

大館市歴史的風致維持向上協議会委員名簿

(平成28年2月16日現在)

No	種 別	専門分野	所 属	職・氏 名
1	学識経験者	建築・都市計画	国立大学法人弘前大学	教授 北原 啓司
2		都市計画・まちづくり	公立大学法人宮城大学 (前国土交通省大臣官房審議官)	客員教授 舟引 敏明
3		建築・まちづくり	秋田職業能力開発短期大学校	教授 小笠原 吉張
4		文化財保護	秋田公立美術大学	教授 澤田 享
5		文化財保護	秋田職業能力開発短期大学校	教授 浅倉 卓也
6		文化財・歴史	大館市文化財保護審議会	会長 清野 宏隆
7	歴史的建造物 所有者	祭礼	国指定重要文化財 大館八幡神社	宮司 福原 良英
8		郷土史	国登録有形文化財 桜櫓館	所有者 成田 欽治
9	郷土史・祭礼 に関する 地元識者	郷土史	大館市文化財保護審議会 (元大館郷土博物館長)	委員 板橋 範芳
10		祭礼	大館神明社	宮司 佐藤 文人
11		天然記念物	公益社団法人 秋田犬保存会	会長 富樫 安民
12	行政機関	国(道路)	国土交通省 東北地方整備局 能代河川国道事務所	所長 遠藤 平
13		県(都市計画)	秋田県 建設部 都市計画課	課長 石川 浩司
14		県(文化財保護)	秋田県 教育庁 生涯学習課 文化財保護室	室長 近江谷 正幸
15		地方行政	大館市	副市長 名村 伸一
16	経済団体	まちづくり	大館商工会議所 街の元気づくり委員会	委員長 中村 博美
17		観光振興	大館商工会議所 観光振興委員会	委員長 畠山 喜満
18	オブザーバー	国	国土交通省 東北地方整備局 建政部	都市調整官 鈴木 武彦
19	オブザーバー	国	国土交通省 東北地方整備局 建政部 計画・建設産業課	課長 上原 茂樹
20	オブザーバー	国	国土交通省 東北地方整備局 建政部 計画・建設産業課 計画・景観係	係長 荒 博之
	計			20人

大館市歴史的風致維持向上協議会条例

(設置)

第1条 地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（平成20年法律第40号。以下「法」という。）第11条第1項の規定に基づき、大館市歴史的風致維持向上協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(所掌事務)

第2条 協議会の所掌事務は次のとおりとする。

- (1) 法第5条第1項に規定する歴史的風致維持向上計画の作成及び変更に関する協議を行うこと。
- (2) 法第5条第8項の認定を受けた歴史的風致維持向上計画の実施に係る連絡調整を行うこと。
- (3) その他歴史的風致の維持及び向上に関し、市長が必要と認めること。

(組織)

第3条 協議会は、委員17人以内で組織し、次に掲げる者のうちから市長が委嘱し、又は任命する。

- (1) 学識経験者
- (2) 関係団体の代表者
- (3) 関係行政機関の職員
- (4) 市職員
- (5) その他市長が必要と認める者

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は再任されることができる。

(会長及び副会長)

第5条 協議会に会長1人及び副会長2人を置き、それぞれ第3条第1号に掲げる者として委嘱された委員のうちから委員の互選によってこれを定める。

2 会長は協議会を代表し、会務を総理する。

3 副会長は会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、会長があらかじめ指名する副会長が、その職務を代理する。

(会議)

第6条 協議会の会議は、会長が招集し、会長が議長となる。

2 協議会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

3 協議会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

4 協議会は、必要があるときは、関係者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(部会)

第7条 協議会は、必要があるときは、部会を置くことができる。

2 部会に属すべき委員は、会長が指名する。

3 部会に部会長を置き、当該部会に属する委員のうちから会長が指名する。

4 部会長は、当該部会の事務を掌理する。

5 部会長に事故があるとき、又は部会長が欠けたときは、当該部会に属する委員又は専門委員のうちから部会長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

6 前条の規定は、部会の会議について準用する。この場合において、同条第1項中「会長」とあるのは「部会長」と、同条第2項及び第3項中「委員」とあるのは「当該部会に属する委員及び専門委員」と読み替えるものとする。

(専門委員)

第8条 協議会は、専門の事項を調査審議させるため必要があるときは、部会に専門委員を置くことができる。

2 専門委員は、当該専門の事項に関し学識経験を有する者のうちから市長が委嘱する。

3 専門委員は、その者の委嘱に係る当該専門の事項に関する調査審議が終了したときは、解嘱されるものとする。

(庶務)

第9条 協議会の庶務は、建設部まちづくり課において処理する。

(委任)

第10条 この条例に定めるもののほか、協議会の運営に関し必要な事項は、会長が協議会に諮って定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、平成28年1月1日（以下「施行日」という。）から施行する。

(最初の任期)

2 施行日以後最初に委嘱され、又は任命される委員の任期は、第4条第1項本文の規定にかかわらず、平成29年3月31日までとする。

(最初の会議の招集)

3 施行日以後最初に開かれる協議会の会議は、第6条第1項の規定にかかわらず、市長が招集する。

大館市歴史的風致維持向上計画（素案）の目次

第1章 大館市の歴史的風致形成の背景

1 - 1 自然的環境	1
1 - 2 社会的環境	5
1 - 3 歴史的環境	10
1 - 4 文化財の指定状況	26
1 - 5 大館の伝統文化	40

第2章 大館市の維持向上すべき歴史的風致

1 大館城下の町割りに残る歴史的風致	45
2 扇田神明社をめぐる歴史的風致	63
3 田代岳（田代山神社）の作占いに見る歴史的風致	70
4 天然記念物「秋田犬」を守り育てる歴史的風致	81

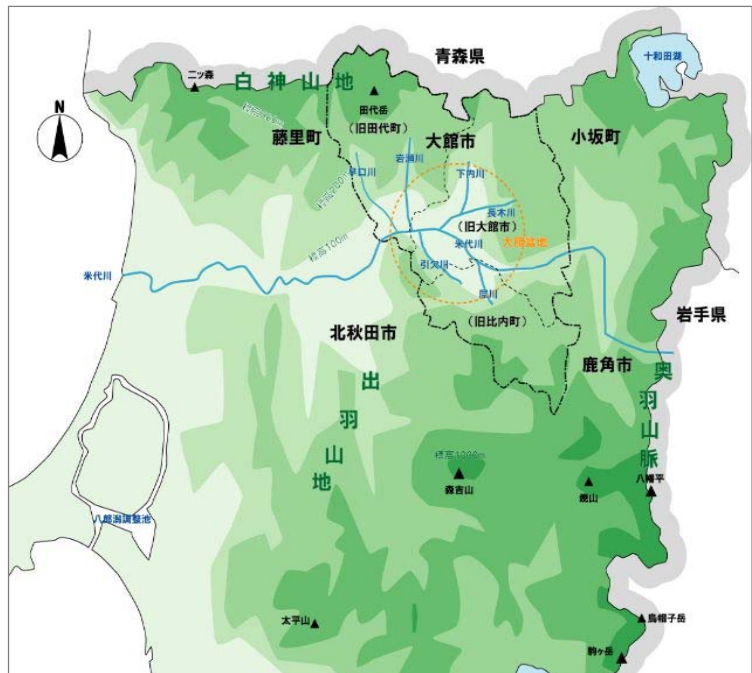
第1章 大館市の歴史的風致形成の背景

1 - 1 自然的環境

(1) 位置

大館市は、秋田県の北部を流れる米代川の中流域に位置し、東側は鹿角市、小坂町、西側は藤里町、南側は北秋田市、北側は青森県と接している。米代川と長木川沿いに開けた大館盆地を中心に北西には白神山地から連なる田代岳（1,178m）があり、南には北秋田市と境を接する竜ヶ森（1,050m）が森吉山麓まで続いている。

市庁舎（大館市中城）の位置は、北緯 40 度 16 分、東経 140 度 34 分である。



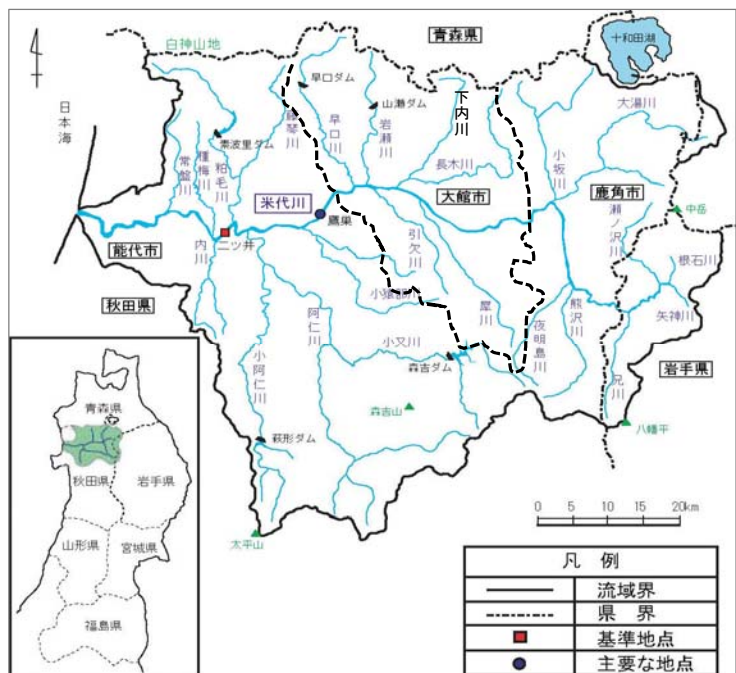
大館市位置図（資料：都市計画マスタープラン）

(2) 地勢

市域は、東西 35km、南北 49km、面積 913.22 km²で、秋田県全体の面積の 7.8%を占めている。県内の市では、由利本荘市、北秋田市、仙北市に次いで 4 番目の広さである。

地形は、奥羽山脈と出羽山地、そして白神山地に囲まれた三角状である。北西部には世界遺産である白神山系の山々が連なっている。

市内を流れる米代川への主な支流として東部を流れる長木川、南部の犀川と引欠川、北部の下内川、西部の岩瀬川、早口

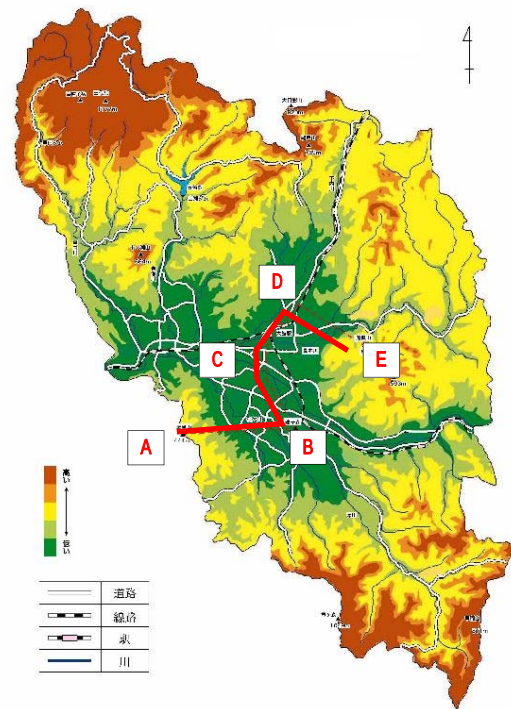


米代川水系流域図（資料：国土交通省）

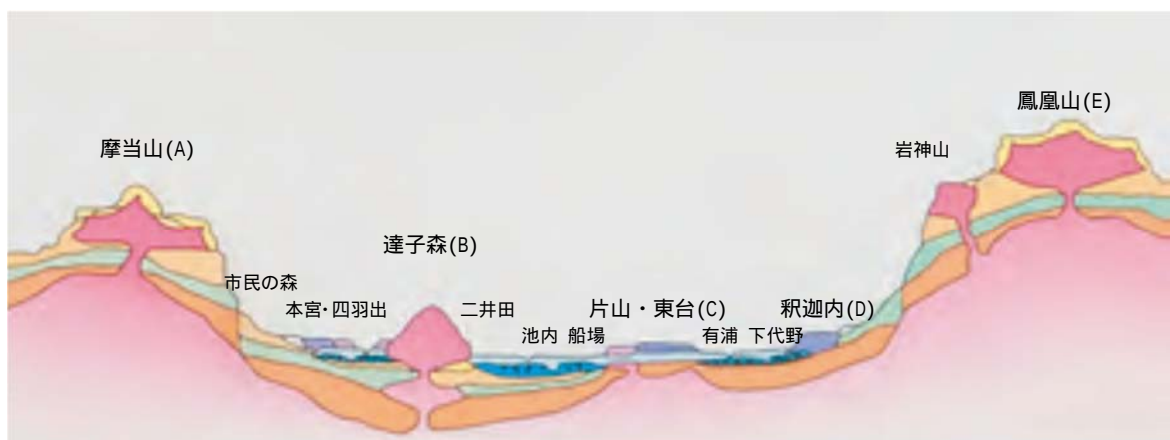
川が合流している。その上流部は原生林のブナ林をはじめ、秋田杉等の森林資源豊かな地域であり、また全長 136km の米代川は、途中花輪盆地、大館盆地、鷹巣盆地を形成しながら能代平野を経て日本海に注いでおり、県内では雄物川に次いで第 2 の長さを誇る。

大館盆地の最下層は安山岩や石英安山岩などが主であり、その上層には泥岩や凝灰岩が形成され、黒鉱鉱床が分布して古くから花岡や釈迦内、松峰、餌釣等で鉱山の開発が行われていた。表層は、粘土層（池内・船場・有浦・下代野）や十和田カルデラ形成時に噴出した火山灰層（本宮・片山・東台・釈迦内）で覆われている。

盆地の地形を模式的にみると西側の摩当山(444m)(A)から市民の森を経て、東側に小高く突き出た達子森(207m)(B)との間に水田地帯が広がり、達子森から北側の米代川両側にも水田地帯が広がって緩やかに高くなっている辺りに片山や東台(C)など市の中心部がある。その北部の釈迦内地域(D)との間の長木川沿いに有浦や下代野の市街地が開けている。そして東側には、山腹に「大」の文字を刻んだ鳳凰山(521m)(E)がそびえ、山頂からは市街地を一望できる。

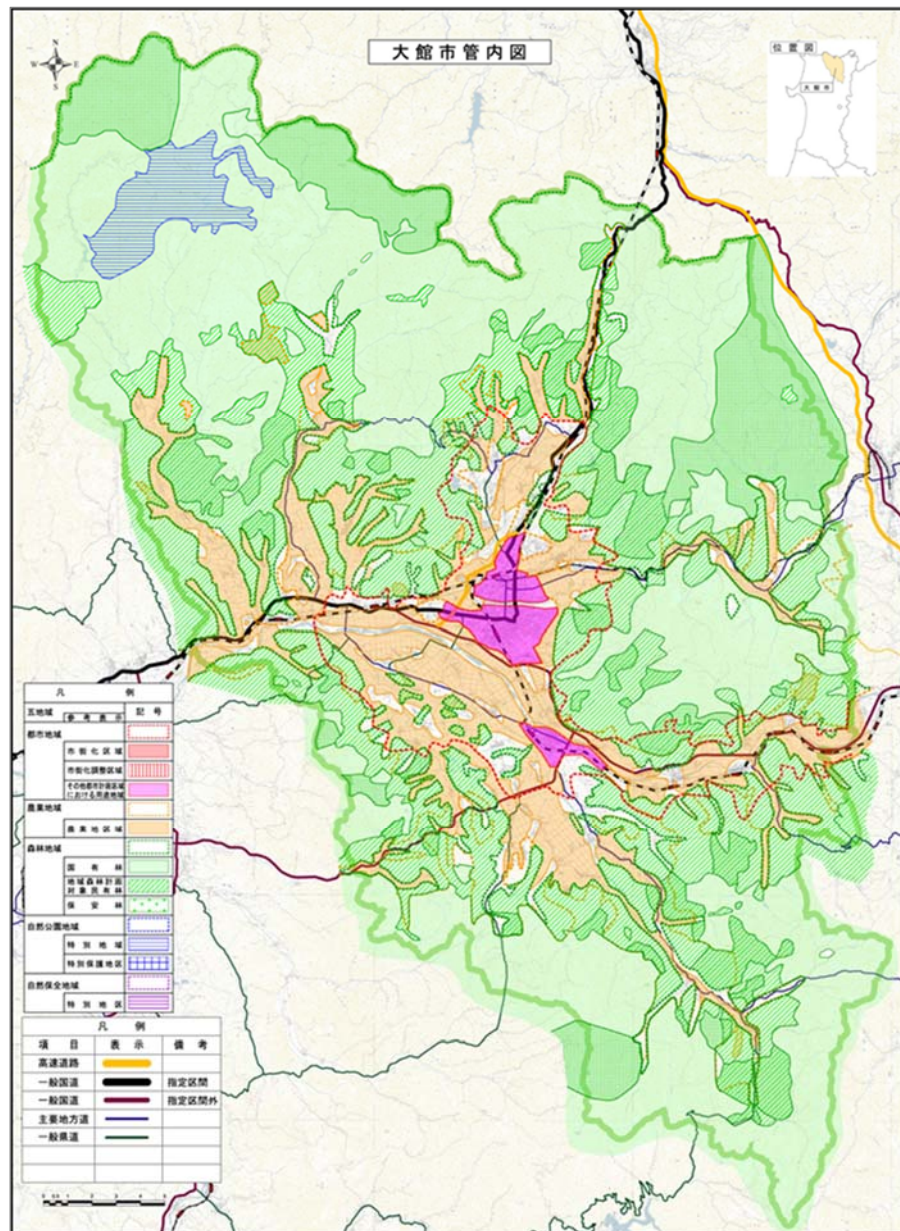


大館市の土地の様子（資料：小学校社会科副読本）
※A から E は、下の地質・地形の模式図の断面箇所



大館盆地の地質・地形の模式図（資料：郷土博物館）

土地利用状況は、森林が 78.7%と市域の大部分を占めており、この内国有林が 46%、民有林が 32.7%と国有林の割合が高い。農用地は 8.6%で米代川とその支流の流域に広がり、稲作や畑作が行われている。残りは、宅地 2.4%、原野 2.3%等となっており自然に恵まれた地域である。



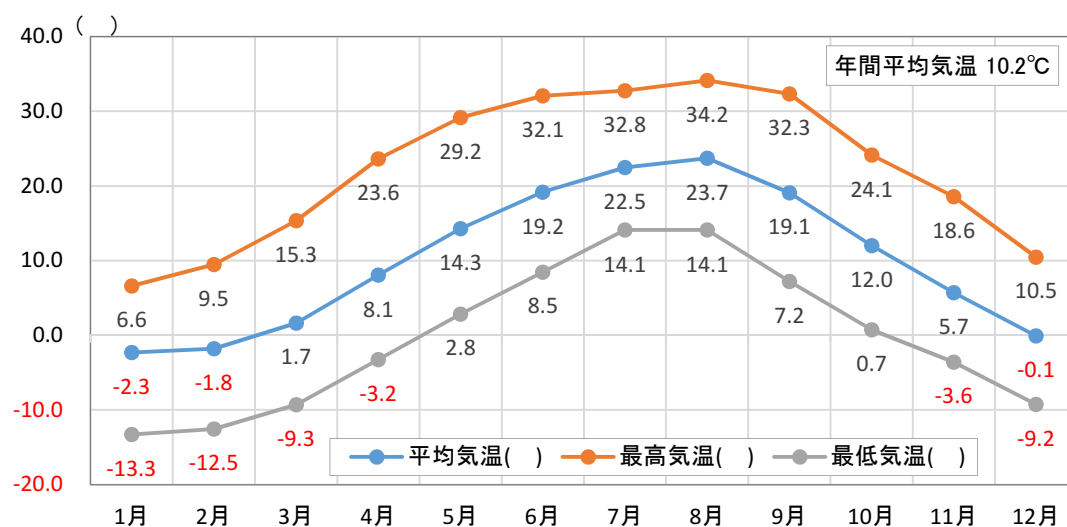
土地利用規制状況（資料：都市計画マスタープラン）

(3) 気候

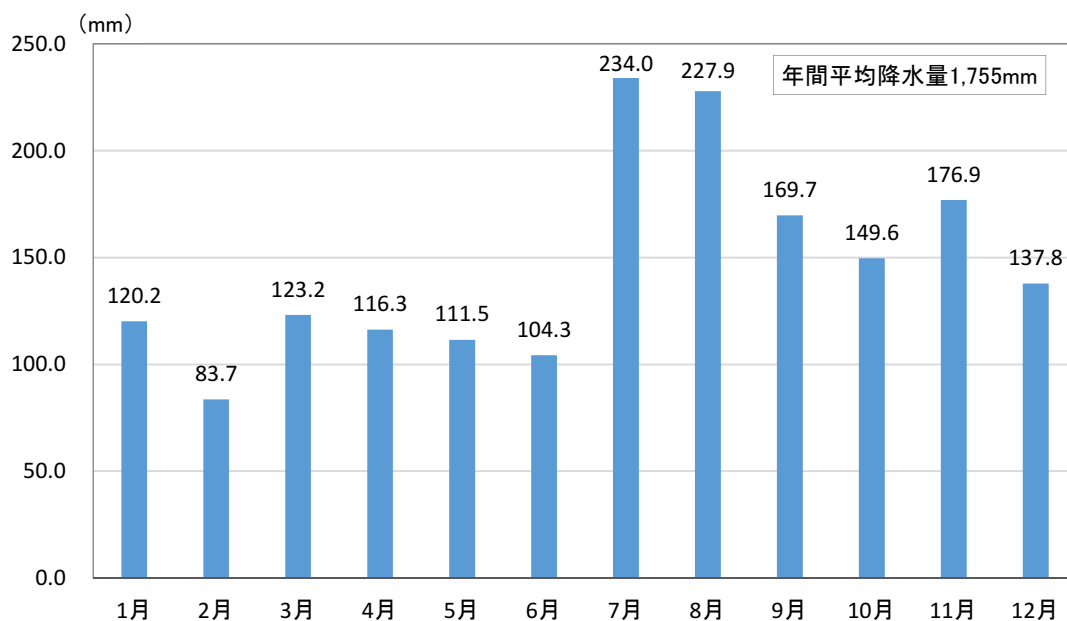
大館市は内陸部に位置していることから、年間の気温の高低差が大きい「内陸性盆地型」気候であり、県全体と比較しても1月・2月の月平均気温が低く、また夏季になるとやませの影響を受けて低温になりやすくなる。

平成12年(2000)から平成26年(2014)の15年間の年平均気温は10.2℃、最高気温34.2度、最低気温-13.3度であり、降水量は年間平均で1,755mmである。

風力は、沿岸部と比較すると1年間を通じて弱く、強風や台風の影響が比較的少なくおだやかである。



月別平均気温・最高気温・最低気温 (H12～H26) (資料：秋田地方気象台)

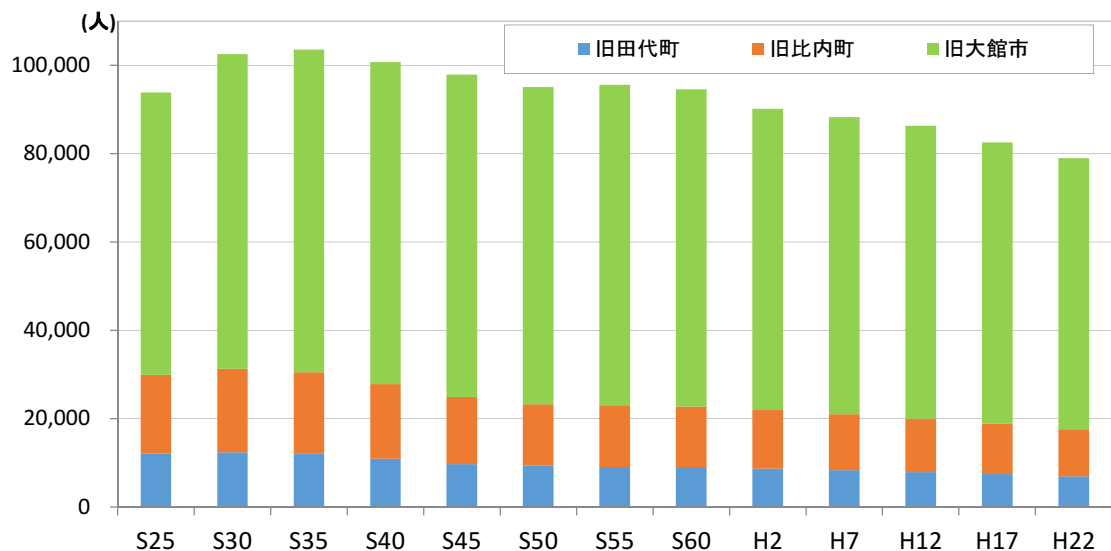


月別降水量 (H12～H26) (資料：秋田地方気象台)

1 - 2 社会的環境

(1) 人口

大館市の合併前旧市町村別合計人口の推移を国勢調査でみると、昭和 25 年（1950）は 93,841 人で、昭和 35 年（1960）にかけて 1 万人程度増加して 103,531 人とピークとなるがその後年々減少してきた。そして大館市、比内町、田代町が合併した平成 17 年では 82,504 人となり平成 22 年では 78,946 人へと減少した。昭和 35 年からみると、50 年間で 24,585 人の減（減少率 23.7%）であり、旧市町単位でも徐々に減少している。



大館市の地域別(合併前旧市町別)人口の推移 資料:国勢調査

区 分	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
大 館 市	93,841	102,491	103,531	100,695	97,856	95,045	95,529	94,526	90,098	88,231	86,288	82,504	78,946
旧 大 館 市	63,946	71,232	73,027	72,883	72,958	71,828	72,478	71,794	68,195	67,214	66,293	63,663	61,383
大 館 町	23,444	25,905	28,204	29,995	30,685	31,575	32,107	31,302	30,041	28,557	29,237	28,712	28,221
釈迦内村	3,612	6,899	6,969	7,363	7,802	7,951	8,856	8,953	8,189	7,877	7,693	7,577	7,319
長 木 村	4,255	4,315	4,145	4,206	4,736	4,671	4,812	4,936	4,749	5,198	4,674	5,064	4,857
上川沿村	2,960	2,905	2,858	2,759	3,546	3,386	3,590	3,952	3,919	3,812	3,637	3,461	3,366
下川沿村	3,524	3,462	3,461	3,598	3,623	4,511	4,833	5,198	5,233	6,581	6,428	5,391	5,365
真 中 村	2,634	2,581	2,451	2,429	2,270	2,081	1,901	1,882	1,804	1,733	1,622	1,544	1,378
二井田村	3,286	3,503	3,434	3,219	2,980	2,761	2,804	2,861	2,749	2,627	2,562	2,450	2,258
十二所町	5,832	6,220	6,253	6,093	5,730	5,474	5,364	5,134	4,765	4,541	4,479	4,097	3,781
花 岡 村	10,523	11,496	11,430	9,727	8,370	6,455	5,373	4,843	4,191	3,830	3,665	3,264	2,929
矢 立 村	3,876	3,946	3,822	3,494	3,216	2,963	2,838	2,733	2,555	2,458	2,296	2,103	1,909
旧 比 内 町	17,796	18,873	18,350	16,891	15,186	13,905	13,992	13,683	13,200	12,713	12,095	11,388	10,622
旧 田 代 町	12,099	12,386	12,154	10,921	9,712	9,312	9,059	8,703	8,304	7,900	7,453	6,941	6,941

大館市の合併前旧市町村別の人口の推移 資料:国勢調査

○合併の変遷

合併の変遷をたどると、明治 22 年（1889）4 月 1 日の町村制施行により、大館町や釈迦内村など現在の大館市を構成する 16 の町村が誕生した。その後昭和 22 年までに扇田村、花岡村、早口村が各々町制を施行。そして昭和 26 年（1951）に大館町と釈迦内村が合併し、全国で最も少ない 3 万人余の市として大館市が誕生した。4 年後の昭和 30 年（1955）に下川沿村など 5 村を編入合併、昭和 42 年（1967）には花矢町を編入合併し、人口は秋田市に次いで県内第 2 位の 7 万 8 千人余となり、県北経済の中心都市として発展してきた。

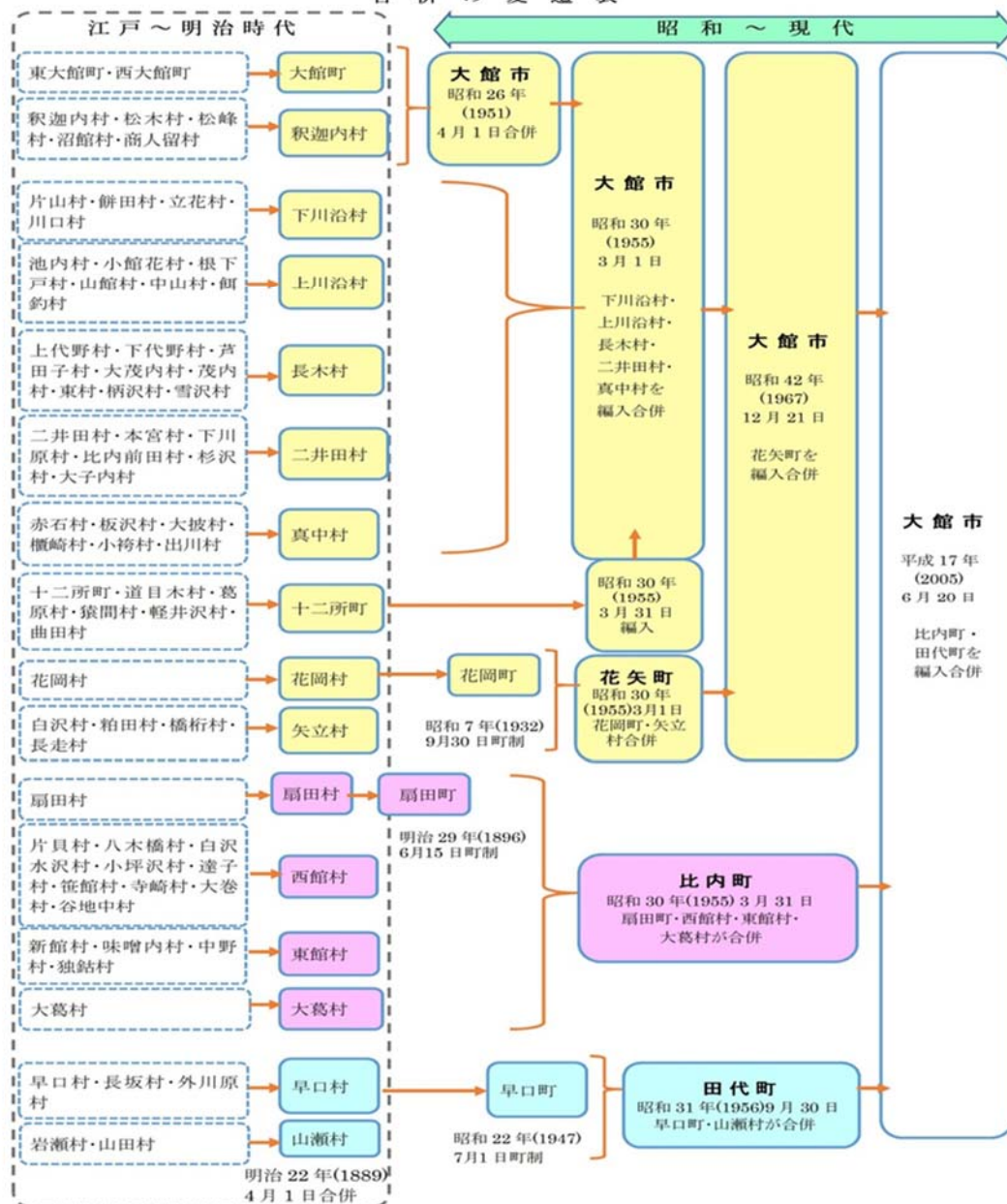
明 22 年 (1889) 合併の行政界



また、昭和 30 年 (1955) には 1 町 3 村が合併して比内町が誕生し、昭和 31 年 (1956) には 1 町 1 村が合併して田代町が誕生して、農業や林業を主な産業として発展してきた。

その後、平成 17 年 (2005) 6 月 20 日、大館市と経済的、歴史的に繋がりのある比内町、田代町を編入合併して人口が 8 万 2 千人余の現在の大館市が誕生し、県内第 5 位の人口となった。

合併の変遷表

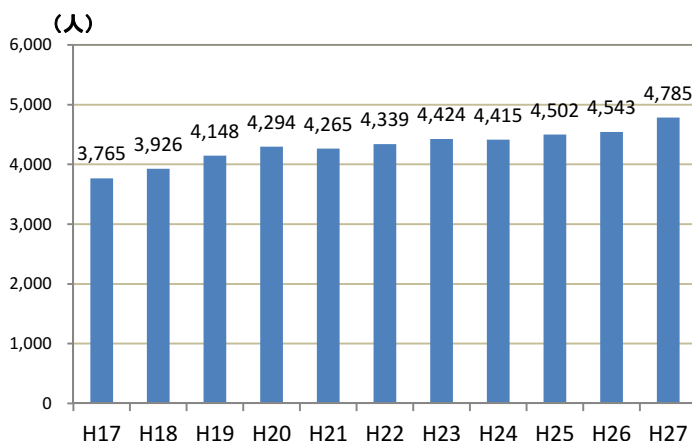


(2) 産業

大館市は、米代川流域の豊かな水資源に恵まれ、稲作を中心とした農業が営まれてきた。また畑作物では、畑のキャビアといわれるとんぶりやネギ、山の芋、アスパラガス、葉たばこ、ホップ、果樹では、りんごや日本なしなど多彩な農産物が生産されている。畜産では日本三大美味鶏といわれる比内地鶏の飼育が盛んなほか、豚や肉牛、乳牛も飼育されている。

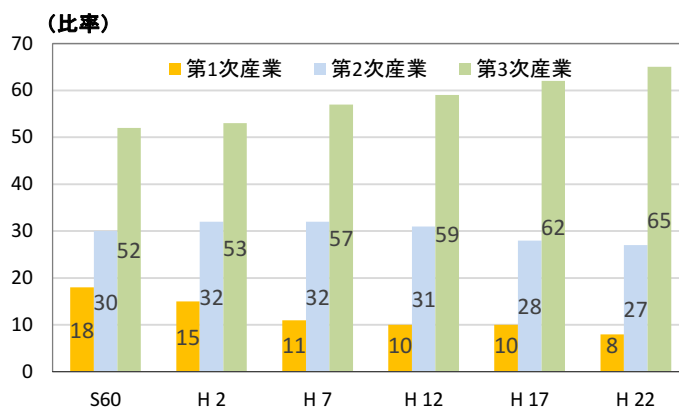
工業では木材・木製品があり、森林に恵まれていることから秋田杉が建築用材として出荷されているほか、秋田杉の特徴を生かした「大館曲げわっぱ」や「秋田杉桶樽」は国の伝統工芸品に指定されている。

また県と協力しながら工業団地の整備を進めて、企業誘致にも力を入れており、市内6カ所の工業団地の企業を含む条例指定企業の従業員数は4,785人（平成27年10月1日、商工課）となっている。



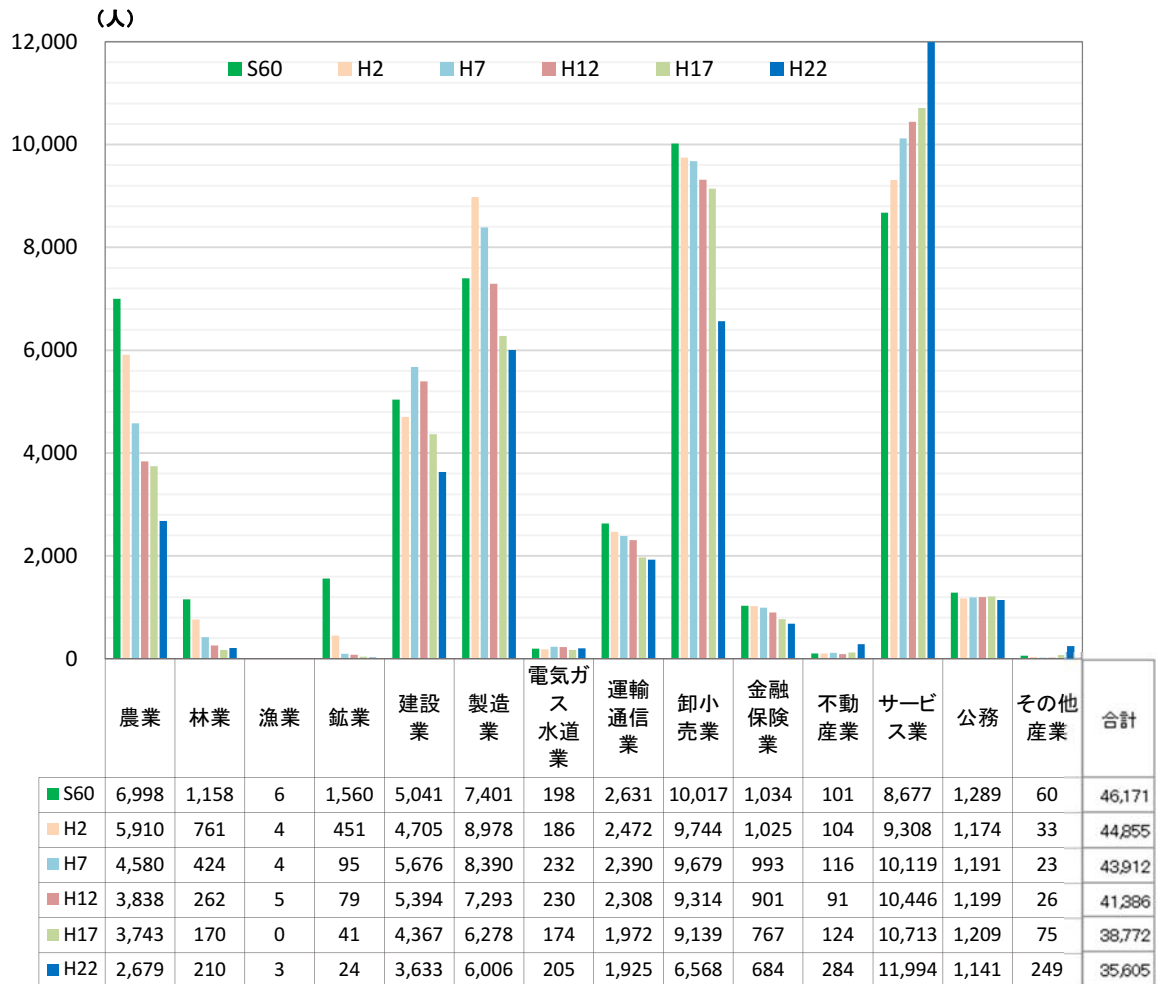
条例指定企業 従業員数（資料：市商工課）

産業大分類別就業者比率をみると第1次産業は昭和60年（1985）以降減少しており、第2次産業が微減、第3次産業は増加傾向にある。産業中分類別の就業者数をみると、市全体では35,605人（平成22年国勢調査）で、製造業や卸小売業、サービス業等の就業者が多い。昭和60年以降の推移では、農業や林業、鉱業、運輸通信業、卸小売業、等が減少しているものの、サービス業は増加している。

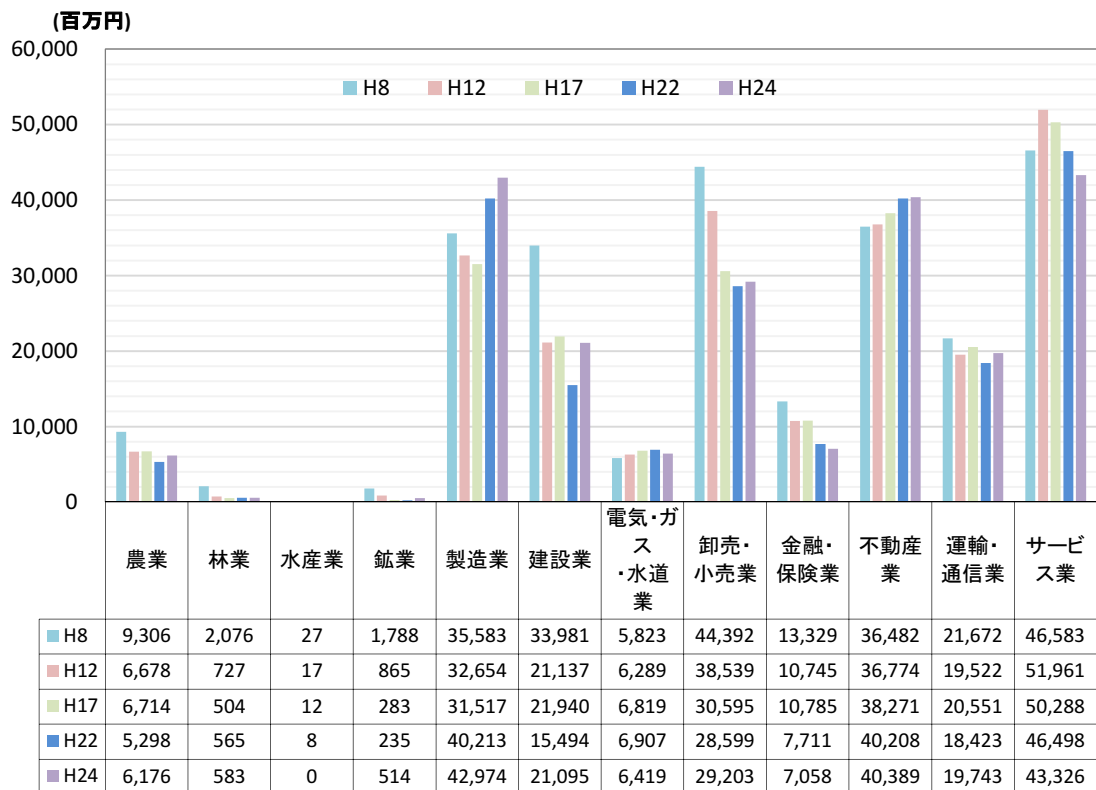


産業大分類別就業者比率の推移
（資料：国勢調査）

また、産業中分類別生産額の推移では農業や林業が平成8年（1996）以降減少傾向にある一方で、製造業は医療系業種の生産額の増加により平成17年（2005）以降伸びており、また不動産業も、主に郊外での住宅建設の伸びを背景として増加している。

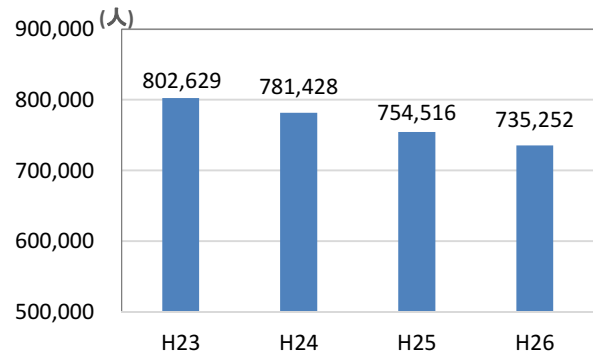


産業中分類別就業者数の推移 (資料: 国勢調査)



産業中分類別生産額の推移 (資料: 秋田県市町村民経済年報から抜粋)

大館市の入込観光客数について近年の推移をみると、平成 23 年（2011）は 80 万 2 千人余であり、平成 24 年以降は、きりたんぽまつりの開催場所を大館樹海ドームに移した効果により観光客が増加したものの、市内の主な温泉地の客数の減少により、年間単位では徐々に減少している。



大館市の入込観光客数の推移
(資料:観光課)

(3) 交通条件

交通条件は、自動車では、県庁所在地の秋田市まで約 100km、青森県の青森市までは約 90km、岩手県の盛岡市まで約 110km、と 3 県をつなぐ交通の要衝にある。

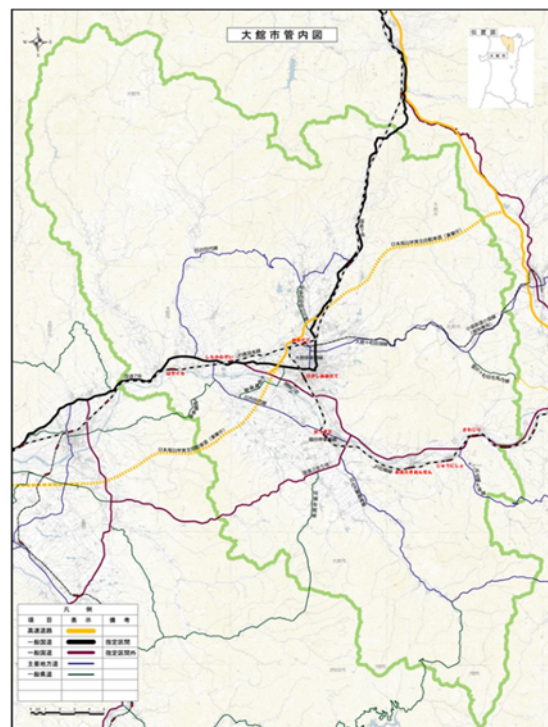
広域的な道路網は、市内中心部を国道 7 号が北西に通じ、国道 103 号が南東に通過している。また市の北東部では、日本海沿岸東北自動車道の一部が開通し東北自動車道の小坂 JCT で連結している。

鉄道は、青森市からの JR 奥羽本線が本市の北部から西側に通過して秋田市を經由後、上野駅まで結んでいる。また JR 花輪線が大館駅から東側に向かい盛岡駅まで結んでいる。

首都圏との連絡では、能代と東京池袋を結ぶ高速バスが、大館市を通過している。空の便では、大館能代空港 羽田空港が 1 日 2 往復している。



首都圏との連絡（資料：観光課）



道路網と鉄道網（資料：都市計画マスタープラン）

1 - 3 歴史的環境

(1) 旧石器時代から弥生時代

大館の地域で人々が生活を営んでいたことを確認できる最も古い証拠として、米代川中・
上流域に位置する松木高館平遺跡^{まつぎたかだてひら}の段丘の赤土の中から発見されたナイフ形の石器が挙げられる。この石器は昭和 61 年(1986)植林作業中偶然発見され、今からおよそ 2 万年～1 万 5 千年前のものとみられ、すでにこの地に人が住んでいた証となっている。その後、大館盆地は十和田火山の噴火に伴う火砕流に飲み込まれたため、縄文時代草創期までの遺跡は発見されていない。



松木高館平遺跡出土石器

市内では、山館上ノ山遺跡^{やまだてかみのやま}を始めとして縄文時代前期から晩期までの集落等の遺跡 60 か所ほどが発掘されている。出土した遺物の多くに、青森県の三内丸山遺跡の遺物との類似・共通点がみられることから、三内丸山を中心とする大きな円筒土器文化圏が形成されていたと考えられる。

縄文時代後期の塚ノ下遺跡^{つかのした}からは、目に天然アスファルトを充填した土偶などが発見されており、人びとの精神生活の中に祈りやまじないを取り入れていたことや他の地域と物資の交易が行われていたことがうかがえる。



塚ノ下遺跡出土土偶

弥生時代に入ると弘前市砂沢遺跡や田舎館村垂柳遺跡で水田址が発見されていることから、この地方では稲作が始まったと考えられているが、大館市内では、花岡大森上岱^{かすだ}の粕田遺跡^{おおしげない}、大茂内諏訪台遺跡^{あきひとどめし}、商人留^{やかいけ}釈迦池遺跡、川口鳴滝遺跡などの弥生時代の遺跡が見つまっているものの、農耕を示す証拠は見つからない。この中で唯一集落跡が発掘調査された諏訪台遺跡からは、5 戸の竪穴式住居と土器類が発見されていてムラの姿を推定できる。

(2) 古墳時代から平安時代

古墳時代(4 世紀から 7 世紀)の大館地方の遺跡としては、10～11 の小竪穴群で作られたムラから形成された片山館コ遺跡がある。この遺跡は 4～5 世紀のものとは推定されているが、それ以外については人々の詳しい生活様式はよく分かっていない。

律令国家として大和朝廷が日本を支配し始めたころ、北海道や東北地方の人々は蝦夷えみしと呼ばれていた。斎明 4 年（658）秋田地方に朝廷の勢力として初めて阿倍比羅夫あべのひらふが進出してきた。この遠征勢力は 180 艘の水軍を率いて日本海を北上し、秋田浦・能代浦に上陸した。当時の族長たちは朝廷に従う意思を示したことから、阿倍比羅夫は、彼らをもてなし朝廷の官位を授けた。

その後、朝廷の勢力は北進してきたが、大館地域を含む北秋田地方はまだ律令体制の支配下には組み込まれておらず、朝廷に恭順の姿勢を示してはいたものの、独自の自立性をもっていたとみられている。

○元慶の乱

天長 7 年（830）に秋田を大地震が襲い、またその後年の冷害などにより人々の生活が悪化していた。それにもかかわらず、秋田城司良岑近よしみねのちかしは、厳しい税の取立てと悪政を行ったため、秋田城の支配下にあった八郎潟周辺の人々が、元慶 2 年（878）ついに独立を要求して蜂起した。これが元慶の乱である。この蜂起を支援する形で、朝廷に内属していた上津野（鹿角）火内（大館・比内地域）楡淵（鷹巣・阿仁）など米代川流域の六つの村も蜂起した。この事件の記録にはじめて大館地方が歴史に登場する。

この戦いは、蝦夷勢が優勢であったため、朝廷は出羽国の事情に詳しい藤原保則ふじわらのやすのりを出羽権守として派遣するとともに小野春風おののはるかぜを鎮守府將軍として派遣し説得にあたらせた。

この結果悪政が改められ、乱は収まった。

しかし、この和平は一時的なものであったため、天慶 2 年（939）ふたたび反乱が起こり（天慶の乱）朝廷の支配力が弱まることになった。こうした状況の中で地元の豪族である清原氏らが勢力を伸ばしていった。

（3）中世

奥州藤原氏と比内河田次郎かわたのじろう

11 世紀半ばの前九年の役を経て東北の覇者となった清原氏は、同族内の対立から、源氏（清衡）対清原氏（家衡）の争いとなり、寛治元年（1087）清衡が勝利し、清原氏は滅亡した。この事件（後三年の役）の後、姓を旧姓の藤原にもどし、清衡は平泉に移りいわゆる奥州藤原氏の基礎づくりにつとめた。前九年の役→前九年合戦 後三年の役→後三年合戦

その後、奥州藤原氏は清衡から基衡・秀衡・泰衡までのおよそ百年間にわたって繁栄した。

肥内（大館・比内地域）では、前九年の役の頃に新しい勢力が芽生えはじめ、藤原氏の支配が東北各地に及ぶ頃には豪族の河田氏がこの地域を支配していたと考えられている。

こうして、大館地方も十二世紀に入って、河田氏の支配を受けつつ、「比内郡」として藤原氏の支配に組み込まれていった。

源義経と平泉

壇ノ浦で平氏を滅ぼし、戦功を挙げた源義経は、兄頼朝と不仲になり藤原秀衡のいる平泉に逃れた。頼朝は平泉に使者を送り義経の処罰を命じた。頼朝の攻撃を察した秀衡は、病床で「義経を主と仰ぎ一族固く団結せよ」と言い残して没した。しかし跡を継いだ4代目泰衡は頼朝の圧力に屈して、義経派についた身内ともども義経を討ってしまった。

頼朝の狙いはもともと藤原氏を滅亡させ、自らの勢力拡大を図ることにあったため、義経をかくまっていたことを責めて、平泉に攻撃を開始した（奥州合戦）。

文治5年（1189）緒戦の阿津賀志山あつかしやまの戦い（福島県伊達郡）で、藤原軍が大敗したことでこの戦いの大勢は決まった。泰衡は敗走し、蝦夷島（北海道）をめざして北へ向かい、その途中、藤原氏の家来であった肥内郡にえのさく 贄 柵の領主である河田次郎を頼りにして立ち寄った。

河田は保護を求められたものの頼朝を恐れるあまり、逆に泰衡を殺害し、その首を陣ヶ岡（岩手県紫波町）まで進んでいた頼朝に持参した。しかし、頼朝は「代々の恩を忘れて主人を殺害した不義不忠の家来」として河田次郎の首をはねさせた。

およそ百年の繁栄を誇った奥州藤原氏は、こうして滅亡した。河田次郎の本拠地は現在の大館市二井田にあったと考えられており、贄の里という地名が残っている。二井田の人々は泰衡の死を哀れみ、首の無い遺体を錦の直垂ひたれに包んで丁重に葬った。これが後に錦神社（二井田橋の近くにある）となり、今も毎年9月3日には地元の人々が泰衡の霊を慰めている。

一方戦乱の中で離ればなれになっていた泰衡の妻は、後を追って五輪台の地までたどり着いたが、里人から夫の最後を知らされ、自らの命を絶ったと伝えられている。この夫人は比内町八木橋五輪台の西木戸神社に祀られている。

1192年、源頼朝が征夷大將軍になり、鎌倉に開いた幕府を拠点に、武士政権を確立した。頼朝は奥州合戦等で活躍した御家人たちに恩賞を与え、河田氏が滅んだあとの肥内地方は、



藤原泰衡をまつる錦神社



泰衡夫人をまつる西木戸神社

甲斐（山梨県）の浅利義成の所領となった。

その後、鎌倉幕府の支配力が徐々に衰え滅亡後、南北朝時代に入る。

14世紀はじめの秋田地方の有力な豪族には、安東（秋田郡・男鹿）浅利（比内）成田（鹿角）の諸氏がおり、また津軽・糠部（八戸）地方を支配していた曾我氏・工藤氏・南部氏等の勢力も強大であった。

60年続く南北朝の争乱の中で、南部師行なんぶもろゆきと津軽の曾我貞光そがさだみつとの間に戦闘が始まり、比内地方も戦いに巻き込まれていく。比内の浅利氏は北朝方の曾我氏に加わり鹿角の国代成田氏は南部氏とともに南朝方に味方したため、鹿角・比内地方は両勢力の抗争の場となった。

この戦いは延元元年（建武3、1336）から4年続き、延元3年（暦応元、1338）の南部師行の戦死を期に、南部氏の勢力は比内地方から排除されていった。

戦国時代の16世紀初め、浅利則頼のりよりが甲斐の国から比内地方に移り十狐城とっこじょう（比内町独鈷）

を築き、比内地方をその勢力下においた。則頼は天文19年（1550）没しその位牌は菩提寺の玉林寺（大館市字大館）に伝えられている。則頼の死後、長男の則祐のりすけは、永禄5年（1562）当時勢力を増大していた安東氏との戦いに敗れて、長岡（比内町扇田）で自害。則頼の後を継いだ弟の勝頼は安東氏の家臣として比内地方を支配したが、やがて安東氏に反抗し戦いとなり、和睦の際をつかれ殺された。



独鈷の大日神社（浅利氏の本拠地）

その後、津軽為信を頼って津軽に逃れていた勝頼の子頼平は、天正18年（1590）為信の助けにより大館城を取戻し、安東氏との関係は、しばらくは平穏であったが、文禄3年（1594）に、再び戦いが始まった。

その頃全国を統一していた豊臣秀吉から、秋田氏（安東氏）と浅利氏は大阪城に召喚され、両者の戦いは厳禁している私闘にあたると裁定を受ける。

慶長3年（1598）1月8日、頼平は急死した。秋田氏に暗殺されたか、浅利の家臣によるものかは不明であるが、浅利氏は滅んだ。

【秋田杉の回送】

秀吉政権のもとで全国の統一が進み、海上交通が発達してくると、秋田杉が注目されるようになった。文禄 2 年（1593）秀吉の命令を受けた秋田実季は、前田氏の建造する朝鮮出兵用大安宅（大軍船）一艘分と淀舟 30 艘分の材木を送っている。浅利頼平は天正 18 年（1590）から文禄 3 年（1594）まで、「舟の木・ほばしら、ほけた」などを秋田氏に造船用として送っている。当時の杉山は米代川流域に多く、大館地域では長木沢の高倉山・面倉山・羽保屋山などが中心であった。

（４）近世

国替えと小場義成の大館入城

慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの後、
慶長 7 年（1602）常陸（茨城県）の佐竹義宣が国替えで秋田に入った。このとき義宣の従弟に当たり一族の重鎮である小場義成も秋田に移った。義成は仙北郡六郷にいた後、秋田三郡を治めるため山本郡檜山城に移った。義成は、赤坂朝光に、大館に移って大館とその周辺地域を固めるよう命じた。

大館城支配の移り変わり

16 世紀後半	浅利氏築城（勝頼）
天正 13 年（1585）	安東氏
天正 17 年（1589）	南部氏
天正 18 年（1590）	浅利氏（頼平）
慶長 3 年（1598）	秋田氏（頼平，毒殺される）
慶長 7 年（1602）	佐竹氏（赤坂氏）
慶長 13 年（1608）	佐竹氏（小場氏）

大館地方では浅利伝兵衛を中心として新政反対の蜂起（慶長 8 年）が起き、立杭村浄応寺の住職日來坊玄性（玄生）が、朝光の救援に来た義成と暴動勢との仲介をし、事態をおさめた。この後、浅利氏の旧臣たちや津軽・南部両国境の備えを固めるために、慶長 13 年（1608）小場義成が大館に入城し、慶長 15 年には正式に大館城代に任命された。以降 11 代 260 年間にわたり大館を治めた。なお、小場氏は三代義房のときの万治年中（1658～1660）に佐竹を名乗ったといわれている。佐竹西家は 6 代目から

大館城は、幕府の一国一城令があったものの、元和 6 年（1620）に久保田城の支城と定められ、津軽・南部に対する要衝として佐竹西家が城代としておかれて幕末まで治めた。

津軽・南部との境界

秋田に移った佐竹氏は検地を実施し、所領境界は巡回・調査の上、話し合いで決定した。その結果、矢立峠をめぐる津軽領との境争では、前藩主秋田氏への照会などにより決着した。森林・鉱山資源を抱えた地域をめぐる南部領との境争では、秋田杉の宝庫とされる長木沢一帯はすべて秋田領に、白根・尾去沢などの鉱山は南部領に属することとして幕府より裁定が下された。

羽州街道

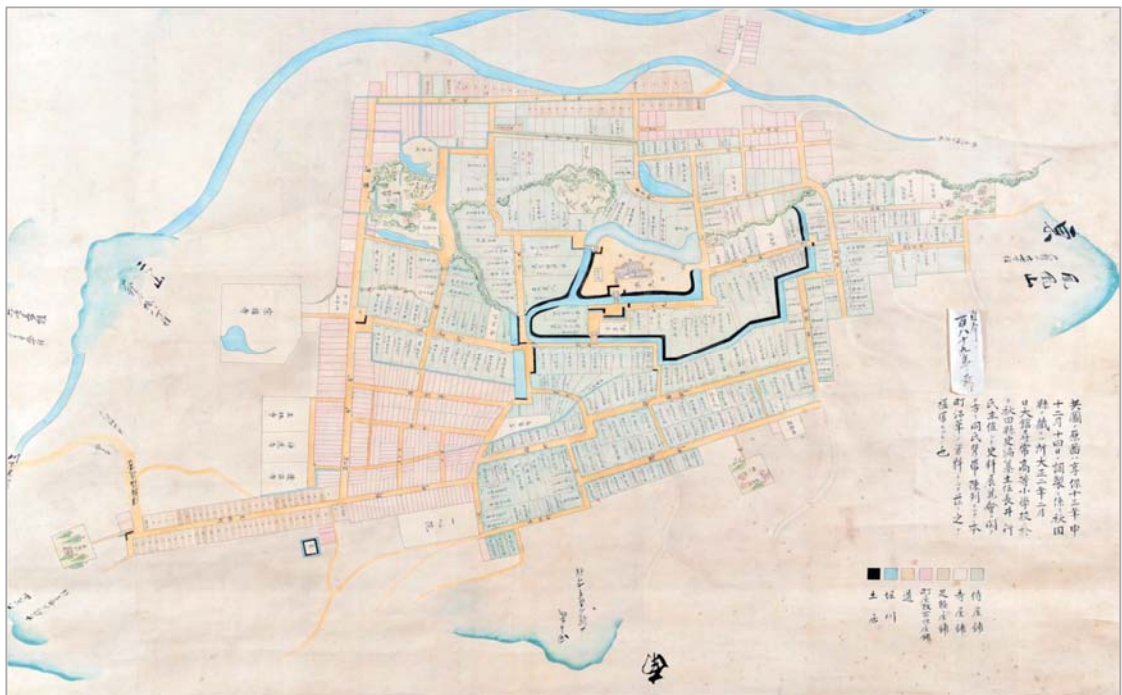
秋田領内の羽州街道は、新庄領（山形県）境の院内から津軽領境の矢立峠までの六十三里四丁（約 250km）の道程である。その内大館市域内で、現在の国道 7 号は、市の中心部や釈迦内地区以外の地域では、ほぼこの羽州街道に沿っている。

街道には、道路管理や旅行者の便のために一里塚が設けられ、大館市域では、長坂、岩瀬、川口、片山、釈迦内、橋桁、白沢、長走、陣場、矢立峠の 10 カ所に設けられたとの記録がある。（市内の羽州街道沿いで残っている一里塚は、長坂のみである。）

また番所は、慶長 16 年（1611）に白沢村番屋台（後に長走に移設） 延宝 7 年（1679）に十二所、^{じょうきょう}貞享元年（1684）に葛原、同年長木沢中羽立に設けられた。

大館城と十二所の町づくり

大館城は 16 世紀後半に浅利氏（勝頼）が築城したのち、小場氏が入城していたが、寛永 17 年（1640）の大火で全焼し、再建されたものの延宝 3 年（1675）にふたたび大火で全焼した後再再建された。城下町は、侍屋敷（内町）と町人町（外町）の二つに分けられていた。延宝 3 年の大火を契機に本格的に町割りが進められ、大町を商業活動の中心に定め、町割りや屋敷割をし、油・茶・紙・木綿・繰綿・小間物等の商人たちが移された。鍛冶町や大工町には鍛冶・大工などの職人が集められ、これまで森林や畑であったところに新町が作られた。



享保 13 年(1728) 大館城下絵図 [大館市立中央図書館蔵]

南部藩との境にある十二所では、元和元年（1615）十二所城の二代目城代であるしおのやよしつな塩谷義綱が本格的に城郭の建設と城下の町割りを行った。しかし幕府の一国一城令により元和6年（1620）にこの城は破却となった。城代の塩谷氏は、城館を居館に改築して住み、この建物を「再来館」と呼んだ。その後梅津忠貞が所預を3年間務めたのち、天和3年（1683）に茂木知恒が所預に任命され、貞享5年（1688）に再来館は城下町北側の一角に移築した。茂木氏は以降、明治2年（1869）の版籍奉還による解任までの10代187年間に及び代々十二所所預を務めた。

大館城代 佐竹氏略歴 西暦年は着任年				
代	城代	元号	年	西暦
1	小場義成	慶長	15年	1610
2	小場義易	寛永	11年	1634
3	佐竹義房	明暦	2年	1656
4	佐竹義武	貞享	2年	1685
5	佐竹義方	元禄	10年	1697
6	佐竹義村	宝永	7年	1710
7	佐竹義休	明和	6年	1769
8	佐竹義種	寛政	元年	1789
9	佐竹義幹	寛政	11年	1799
10	佐竹義茂	嘉永	5年	1852
11	佐竹義遵	文久	4年	1864
〔「大館の人・事典より」〕				

近世の人々の暮らし

寛政年間（1789～）の大館地方では、親郷（と寄郷）が、大館村（18カ村）花岡村（12カ村）坊沢村（5カ村）綴子村（4カ村）十二所村（8カ村）二井田村（12カ村）綴子村（4カ村）扇田村（16カ村）などと置かれ、年貢の徴収、役人や藩士の通行の際の夫役や接待の経費負担など、厳しい支配体制が敷かれ、農民の生活は厳しいものであった。

凶作や飢饉も人々の生活を襲った。大館地方での冷夏・長雨・風水害・干ばつ・病害虫による凶作が、江戸時代に60回以上も記録されている。天明飢饉（天明2年（1782）～8年（1788））やその後の天保飢饉（天保4年（1833）～天保10年（1839））の惨状も伝えられている。

こうした飢饉が続き人々が苦しんでいた時代、開田や堰の建造が行われ、嘉右衛門堰や重右衛門堰、二井田堰、三浦堰などの用水路は、現在も地域の農業に役だっている。

【市日・曲物】

大館の市は、延宝3年（1675）までは六斎市で二の日は大町と新町が交互に、七の日は馬口労町・中町が交互に開いていた。この年以降は、大町は毎日、七の日は馬口労町・中町・新町が交互に三斎市の開市となった。大町ではこのほか正月12日、5月2日の市は盛大に開かれた。

比内町扇田では、江戸時代から現在まで六斎市が開かれている。

秋田杉を材料にした曲物細工が商品として生産され流通したのは、文政年間頃からである。それはもともと樺細工・塗り物・釣り針などとともに武士の内職として興り、発展したものであった。

学問の振興

大館では寛政5年(1793)頃に現在の中城地区に博文書院が設立されたといわれている。また十二所には成章書院が設立されている。博文書院の創立当時の規模は、教職員35名、学生数90名で、成章書院は同じく教職員28名、学生80名であった。

町人の、同志・同学の人たちは、みずからの教育機関として家塾をつくり、村々では、農民たちが寺子屋をつくった。この家塾・寺子屋は、江戸時代中ごろから広く各地に設けられ、幕末期の家塾の数は、大館町で14ないし15、十二所町では12から13を数えた。

家塾の中では沼田^{れきさい}榛^{ちくけい}斎^{きんこう}、江幡^{とみかげ}掃部、二階堂竹^{ちくけい}逕^{きんこう}、中田^{とみかげ}錦^{きんこう}江、石井^{とみかげ}祚^{きんこう}景などがすぐれた教育を行っていた。寺子屋は幕末の白沢肝煎の笹島久蔵など18余り(比内・田代は未調査のため含まず)が知られているが、実際はもっと多かったとみられている。



十二所成章書院之跡碑

久保田藩と蝦夷地

18世紀半ばになるとロシアが北太平洋へ進出し始めたため、幕府は文化4年(1807)蝦夷地全島を直轄地とし、以降、津軽・南部・久保田・庄内の各藩に、警備や蝦夷地への出兵を命じた。

ペリー来航の翌年の安政元年(1854)には、大館地域からは海岸警備のため、湊、八森、北浦などの要所に、浜松新七、日景八右衛門、高橋専右衛門など14人が新家に取り立てられて配置された。またこの年日露通好条約が締結されたが、幕府はロシアの樺太政策に脅威を感じて、安政6年(1859)9月、久保田・津軽・南部・庄内・仙台・会津・松前の各藩に分割して与え、蝦夷地の開拓の促進と警備の強化とを命じた。この年5月に、大館からは給人37人、足軽96人の計133人が警備の増援に出ている。番士には鉄砲頭根本幾之助、組頭中田順吉、旗奉行沼田助八、目付茂内政吉などがいた。

久保田藩の領分は増毛及び宗谷領から紋別領境までの北部と利尻島・礼文島であったが、慶応3年(1867)箱館奉行からの警備の装備充実と人員増員の命令に対し、財政難などを理由に北蝦夷地警備の免除願いを出した。幕府はこれを受けて、免除と同時に領地の上知を命じた。こうして久保田藩兵たちは、増毛を引き揚げた。

大館と戊辰戦争

慶応4年(1868)1月に京都で起こった鳥羽伏見の戦いを契機として戊辰戦争が始まり、新政府軍は東北地方に軍を進めた。これに対し、東北の諸藩は、奥羽越列藩同盟を結んだ。しかし、久保田藩が新政府軍からの参加要請を受け入れ、列藩同盟と戦う状況になった。

大館の十二所地域は、南部藩と境を接していることから8月9日に南部軍が鹿角街道口・葛原口・別所口などから攻め込んできた。南部軍は圧倒的な兵力で勝利し、扇田まで進んだ。久保田藩の茂木勢は岩瀬まで退却し、8月12日に奇襲攻撃をかけ南部軍を退却させた

が、態勢を立て直した南部軍と8月20日に再び扇田方面で戦いが起こり茂木勢は敗れた。

これらの戦闘で十二所の町では、神社仏閣や民家など合わせて約400戸が焼失し、扇田の町でも400戸のうち焼失を免れたのはわずかに6戸といわれる。

南部軍は8月22日に柄沢口付近で大館軍と激突し、ほどなくして舟場口以外の大館軍は指揮系統を失って総崩れとなり、相善堂に本陣をしいていた佐竹義遵^{よししげ}は帰城し、城に火を放つことを命じて西門から脱出した。

こうして、小場義成が初代城代として入城して以来11代260年余の間続いた大館城は、炎上し落城した。敗走する大館軍は町にも火を放ち、ほとんどが焼失した。

城を脱出した義遵^{よししげ}らは、荷上場で応援隊を待ち、反撃の機会を窺った。

久保田藩を援軍した政府軍の主力は、佐賀・小城・長崎などの九州勢で、8月29日に本道・米内沢口・大沢口の三方向から総攻撃を開始し、大館・佐賀連合軍は、徐々に南部軍を退却させ、9月2日岩瀬の戦いで苦戦を強いられていたが、茂木軍が貝吹長根の南部軍を破ると形勢が逆転して連合軍が勝利した。

勢いに乗った連合軍は餅田に軍を進め、大館城奪還のための攻防戦がはじまった。南部



戊辰戦争の激戦地 扇田神明社



早口公園の戊辰戦争激戦跡(9月2日岩瀬での戦い)

軍の強烈な防備により戦いは熾烈をきわめたが、9月5日から翌朝にかけて南部軍は撤退し、連合軍は9月6日大館城を奪還した。7日には十二所奪還のため、大滝・曲田などの戦闘で南部軍を徐々に退却させ、このあとの新沢口や十二所口での戦いで連合軍が勝利し、9月20日に南部軍の使者が停戦を申し込んできたことにより大館での43日間に及ぶ戦いが終わった。

(5) 近代

明治維新

戊辰戦争で南部藩の進攻を直接受けた大館地方の被害は大きく、十二所、大館、二井田、扇田は町や村そのものが戦場となったため、多くの家々が灰になった。また収穫前の戦闘であり、凶作も重なって、人びとは衣食住が欠乏の状態で被害の復興を図らなければならなかった。

明治維新により、版籍奉還、廃藩置県等が進められ、明治4年(1871)1月に久保田藩は秋田藩と改称され、7月には秋田県となる。また同年4月に戸籍法が制定され、翌年2月に施行された。

行政組織の再編により地方行政地域を大区、小区に区画する大小区制を実施。その後明治11年(1878)郡町村制となり、明治17年(1884)大館町役場が現在の市役所の向かいに新築された。明治22年(1889)4月に市町村制が施行され、現在の大館市を構成している町や村が生まれた。

明治政府の地租改正により、秋田県も明治13年までに地租改正の事業が完了し、山林の多くが国有林となった。

○鉱山

明治18年(1885)に、浅利藤松らの堤沢露頭などの発見により、花岡鉱山の開発が開始された。しかし銀の含有量が低下したことにより経営困難となり明治24年(1891)に休山となった。12年後大館市中城に石田鉱業所を経営していた石田兼吉が1800円で譲り受け、硫化鉄鉱の採掘に切り替えて操業を開始した。兼吉の



鉱山の大露天掘り

死後の同43年(1910)小林清一郎が買収し、露天掘の開始、熔鉱炉と火力発電所を建設して銅精錬に着手したが、山林農作物への煙害被害と賠償問題等が生じ、最終的に小坂鉱山へ売却され、大正4年(1915)花岡鉱山は、小坂鉱山の支山となった。その経営が藤田組と

なった後、新鉱床が発見され、花岡町は鉱山町として発展した。

また、大葛金山は、和銅年間（708年～）に発見され、奈良東大寺の大仏や、金閣寺の造営に献金したと伝えられている。佐竹藩営から明治に入り官営となり、明治10年（1877）に小坂鉱山の所管となった後は、金のほかに銅を含む鉱石を生産するなど栄えたが、鉱脈の減少により、昭和50年（1975）閉山となった。

○山林

久保田藩の財政を支えた山林は、明治維新後の明治7年（1874）に内務省の管轄となり、明治19年（1886）以降、長木沢、釈迦内（後に大館）、扇田、早口の小林区署が置かれ、山林行政は主に森林伐採の禁止制限を方針としたが、明治30年（1897）森林法の公布後、林業の振興を図った。明治38年（1905）には、代野貯木場と代野苗畑、同41年（1908）には早口貯木場が完成する。また白沢・尻合沢林道や岩瀬林道、長部林道など他にも徐々に建設され、木材の運搬とともに製材業も活発化した。

○行政機構の整備

明治4年（1871）の司法省の設置後、秋田県には聴訟課が設置され、明治6年（1873）には大館に聴訟課の支庁が設置された。その後明治28年（1895）には秋田地方裁判所大館支部となった。

明治5年（1872）大館郵便局の業務を開始、同43年電話交換業務を開始。さらに、大館警察出張所の設置（明治8年（1872））、第四租税検査区大館派出所の設置（明治18年（1885））、秋田県輸出米検査所大館支所の設置（明治38年（1905））などのほか、大館町農会、在郷軍人会、赤十字北秋田郡委員会大館分区、免囚保護会などが、順次組織設置されている。

文明開化

○大館の学問の系統・流れ

近世以来、明治期以降も活躍を続ける文人も多く、佐竹西家家老の狩野よしとも良知（深蔵）は、秋田明德館から昌平かじ覺に学び、千秋公園、魁新聞前身の遐邇新聞の名称を名付けた。弟の徳蔵は遐邇新聞の主幹として著名で、秋田県史をはじめ多くの歴史書を編さん、執筆している。

良知の子こうきち亨吉（1865～1942）は、幼いときに大館を去っているが、33歳で第一高等学校長、40歳で京都帝国大



狩野亨吉生家跡

学文科大学校長を務め、夏目漱石との親交は有名である。また安藤昌益の「自然真営道」を発見し発表した。三ノ丸に生家跡がある。

^{えはたばんこう}江幡晩香（味右衛門）は、漢詩、書画俳句に通じ、家塾を開き教育面でも地域に貢献した。郷土の様々な姿を後に伝え、その発展を願った。

紫峰笹島定治が編さんした「大館戊辰戦史」は大館地方の優れた歴史書である。（大正 7 年刊行）

○近代化への事業

比較的古い（江戸～明治期）大館の人々の生活や風景については、菅江真澄の一連の遊覧記や、土岐源吾（^{みのむしさんじん}蓑虫山人）の絵日記、イギリス人イザベラ・バードの「日本奥地紀行」などがあり、西洋文明が入る以前の様子を伝えている。

文明開化のための新しい事業については、明治 5 年（1872）の郵便取扱所の開設、同 14 年の電信線の架設が挙げられ、照明は、洋式ランプが明治 10 年ごろ、電燈が大正 2 年に始まっている。

鉄道は、青森から工事が始められ、明治 32 年 6 月奥羽北線が矢立峠の難所を超えて碓ヶ関・白沢間が開通し、これが本県の鉄道史の始まりとなっている。また小坂鉱山と大館を結ぶ小坂鉄道（私鉄）は明治 42 年に開通した。

○近代教育のはじまり

明治 7 年に玉林寺を借用した中城学校が最初に設立され、その後明治 11 年までに 25 校が設置された。明治 31 年には秋田県第二尋常中学校（明治 34 年に県立大館中学校に改称）が設立されている。

明治期の社会

○明治期の社会

明治 7 年（1874）窮民救済を目的とする救貧法恤救規則が交付された。また大館町では大正 7 年（1918）に大館聖保羅教会の米国人イバンスが裏町に私立大館幼稚園を開園し、大館で最初の幼児教育が始まっている。

明治 37 年（1904）に結核予防法が公布され、大正 12 年（1923）には県立大館細菌検査所を設置し、当時亡国病とされた結核の撲滅（減少）に効果を上げた。

○感恩講の活動

^{かんのんこう}大館感恩講は、天保 11 年（1840）正月に肝煎石田宗右衛門が、町の有力者が集まる会で、「今後飢饉や疫病があっても人々を救済することの出来る方法を探っていこう」と説いたことが始まりである。

有志からの寄付や郷役人の役料の一部、土地売買の際の登記手数料の一部などを積み立てて、土地や物の購入を行ない、明治初年には貯蓄米が 1,000 石余となった。この資産は^{たばたごうすけ}「田畑郷助」と名付けられ、初期財産となった。

明治 32 年（1899）に財団法人大館^{でんごう}田郷感恩講となった。この後日露戦争、昭和初期の凶作や恐慌時等に約 83,000 人程の救助を行い、社会的弱者を救済する精神は、社会福祉法人大館感恩講に引き継がれている。

○公立大館病院の設立

明治 12 年（1879）に大館町の開業医 4 人の発起により私立大館病院が設立された。後に県の計画に基づいて明治 15 年に町村組合の公立大館病院が設立されたが、その後建物の老朽化と医療技術の進歩に対処するため、新病舎の建設に着手し、昭和 2 年（1927）に竣工した。診療科目は内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科・眼科・歯科など 7 科約 70 床を擁する総合病院



公立大館病院

となった。医療従事者（看護婦）の養成も古く、大正 8 年（1919）に公立大館病院産婆看護婦学校が設立され、昭和 30 年（1955）に公立大館病院附属高等看護学院の指定を受けたが、平成 2 年（1990）に閉校した。

○公立扇田病院の設立

明治 40 年（1907）公立扇田病院が扇田字白砂に設立された。後述する鳥潟隆三博士の尽力により優秀な医師を揃え、東館村（現大館市）の独鈷や鹿角郡毛馬内町（現鹿角市）に分院を設けた。その後、南扇田（現ふれあい公園）に移転し、さらに病棟の増設・設備の強化を図るため昭和 58 年（1983）中山川原の現在地に移転した。

大正から昭和へ

大正期は、政治的にも経済的にも明治の藩閥政治時代から転換し、民主主義が始まった時代であった。

経済活動を支える鉄道は、奥羽本線の全通後、小坂鉄道花岡線、秋田鉄道（大館・花輪間）が着工された。沿線の鉱山事業の拡張と合わせ、貨物や旅客の輸送に大きな威力を発揮し、地域経済の発達を促した。

企業創設にも大きな影響を与え、大正期に入ってから創設された企業は、木材・運輸・販売業を主に 30 社近くになった。また電気事業や金融も発達し、弘前銀行などの支店も設置された。大戦後の恐慌期になると株式会社大館銀行が創立され、大館の商工業の発展に貢献した。（昭和 3 年（1928）9 月、大館銀行は羽後銀行と合併した）

その一方、東北地方では大正のはじめ、大凶作が起こり、農民の生活は貧窮化し、北海道方面への漁業出稼ぎが急増した。このため大正 14 年・15 年にかけて出稼ぎ労働者の保護

を目的とした出稼ぎ保護組合が県内各地に設立された。

昭和 6 年（1931）の満州事変、昭和 12 年（1937）の盧溝橋事件^{ろこうきょう}で日中戦争が始まり、昭和 16 年（1941）の太平洋戦争へとつながって、昭和 20 年 8 月 15 日の敗戦まで、日本国民は悲惨な戦争の時代を体験した。大館の人々も、これら戦争の影響を大きく受けることになる。

この時代に活躍した人として、日本外科学会会長を務めた医学博士鳥潟隆三（1877～1952）と無線電信の先覚者といわれる工学博士鳥潟右一（1883～1923）がいる。

花岡本郷の鳥潟会館は、鳥潟右一博士の生家で、その庭園は京風の香り漂う名園であり、現在は市に寄付され管理利用されている。（建物、庭園ともに県指定文化財）

学校教育では、栗盛吉右衛門（1838～1914）が育英事業のために財団法人栗盛教育団を創設し、就学奨励、学資援助事業を行い勉学の機会を与え、人材の育成に努めた。



鳥潟会館庭園

（ 6 ） 現代

戦後のあゆみ

昭和 20 年（1945）8 月 15 日の終戦により、日本の民主化が進められた。総選挙や地方選挙が行われ行政の体制も整い、また農地改革により自作農が増え食糧増産と生活の安定に向かって歩みだした。教育面でも、新制中学校の設置や高等学校の開校も進んだ。

産業の移り変わり

昭和 20 年の終戦後、日本の産業界は、朝鮮戦争（1950～1953）による特需景気を機に、急速に復興した。国も工業に力を入れ、飛躍的に発展した。大館でも、建設・製造業などの 2 次産業や、卸売、小売業、サービス業などの第 3 次産業の就業人口が増加していった。一方農林水産業の第 1 次産業の人口は減少していった。

○ 農林業・鉱業の変化

農地改革後、農業基盤整備事業に伴う農業の機械化や栽培技術の向上により、水稻の 10a 当り収量では、昭和 20 年代の 300kg から昭和 40 年代は 500kg 台に向上した。一方農家戸数や農業就業人口は徐々に減少していて、昭和 55 年（1980）の第 1 次産業就業人口が 8,659 人から平成 22 年（2010）は 2,892 人となっている。

市の林野率は 70%前後でやや民有林より国有林が多い。木材の生産量は国産材需要の低下とともに減少し、市の製材工場は昭和 47 年（1972）頃の 55 事業所から現在は半数以下となった。

鉾山は古くから開発されてきたが、昭和 30 年（1955）頃から黒鉾の鉾床が相次いで発見され、黒鉾ブームが起こった。しかし昭和 45 年

（1970）に始まった世界的な石油危機以後の不況と鉾産物価格の暴落、外国産の安い鉾物資の輸入が大きく影響し、昭和 62 年（1972）までに、市内のすべての鉾山が閉山した。

○商工業の様子

城下町から発達した大館市は、古くから周辺の町村の中心地として、物資や人の交流が行われて来た。江戸時代の記録によると、商人や職人の住むところを「外町九町」と称してきたものが、現在の商店街に続いている。また各地区では「市日」が開かれていて扇田では 200 年以上の伝統がある。

一方、都市計画や道路網の整備、住宅地の郊外進展とともに、長木川をはさんで南北に大型スーパーが進出している。

昭和 40 年代に入ると、地域経済の発展を目指して企業誘致に取り組み、工業団地の造成も進められ、昭和 50 年代以降は、医療用具、縫製、運輸、精密機械などの様々な企業が操業している。

大館市の大火

大館市は、昭和 26 年（1951）に市制施行してから 4 度の大火に見舞われている。昭和 28 年（1953）、30 年（1955）、31 年（1956）とたて続けに起き、その後昭和 43 年（1968）に 4 度目の大火が発生した。昭和 28 年は 4 月 29 日に馬喰町から出火し、官公庁街に延焼し、公立大館病院、郵便局、電報電話局など 137 棟が焼けた。2 度目は昭和 30 年 5 月 3 日に御成町 1 丁目から



昭和初期の花岡鉾山役宅街



昭和 31 年大館大火常盤木町上空から

出火し、国鉄大館駅をはじめ、小坂鉄道大館駅、旅館、映画館等広範囲で 508 棟を焼失した。そして、翌 31 年 8 月 18 日には、東大館駅前から出火し、市の中心街（商店街）等で 650 棟を焼失した。これから 12 年経過した昭和 43 年 10 月 12 日に、御成町 2 丁目から出火し、290 棟が焼失した。

これらの大火後の復興の主な施策は、主要道路の拡幅や歩道の整備、街路樹の植栽、防火水槽の増設や消火栓の設置などに力を入れている。

昭和から平成

昭和 40 年代後半から平成 6 年までに大館市の主要産業であった鉱業が鉱山の閉山により衰退した一方で、現在は鉱山関連技術を生かした資源リサイクル産業や医療器具産業が主力になっている。

また高速交通網は、昭和 61 年（1986）東北自動車道と樹海ライン（大館と十和田湖を結ぶ県道）が全線開通、平成 10 年（1998）大館能代空港（あきた北空港）の開港、平成 25 年（2013）日本海沿岸東北自動車道大館北 IC ～小坂 JCT 間の開通などにより、生活圏の拡大や観光振興、物流の効率化による地域経済の活性化などに期待が寄せられている。

平成 5 年（1993）には秋田職業能力開発短期大学が開校、平成 8 年（1996）には秋田桂城短期大学（平成 17 年（2005）に秋田看護福祉大学として 4 年制に改組）が開校し、教育機関の充実にも力を入れている。

平成 27 年（2015）10 月には茨城県常陸大宮市と友好都市協定を結び、江戸時代に佐竹氏が秋田へ国替えとなって以降 400 年の時を超えた交流が始まった。

1 - 4 文化財の指定状況

(1) 指定文化財の概況

大館市の指定文化財は、平成 27 年(2015)3 月末現在、国指定が 7 件、県指定が 16 件、市指定が 45 件で、合計 68 件である。また国登録文化財は 1 件であり、これらの内訳は下表の通り。

文化財の種別指定状況

(平成 27 年 3 月 31 日現在)

部門	種別	国指定	県指定	市指定	合計	国登録
有形文化財	建造物	1	2	1	4	1
	絵画		1	7	8	
	彫刻			8	8	
	工芸品		5	7	12	
	書跡・典籍		1	4	5	
	考古資料		2	2	4	
無形民俗 文化財	民俗芸能			5	5	
	風俗慣習			1	1	
史跡名勝 天然記念物	史跡		3	8	11	
	名勝		1		1	
	天然記念物	6	1	2	9	
合計		7	16	45	68	1

(2) 代表的な文化財

国指定等文化財

【重要文化財】

大館八幡神社（建造物）

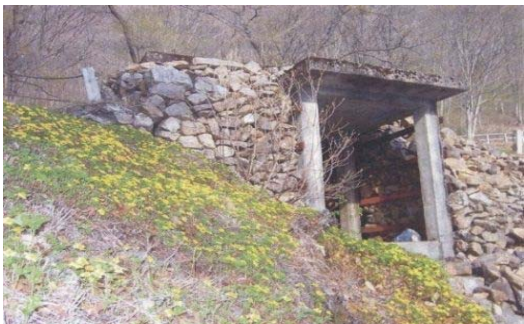


初代大館城代小場義成が常陸太田八幡宮の神霊を勧請し大館城の守護神として城内に祀っていたもので、貞享4年(1687)第4代佐竹義武が大館城及び大館鎮守総社として、大館城下東端の現在地に遷座建立したものである。

神殿は、大館城に向かって西に面して建てられ、左に正八幡宮本殿、右に若宮八幡宮本殿を配し、両殿ともに桃山式の遺風をもった、洗練された流造の建物である。小規模だが、県内では数少ない17世紀の神社建築として、また東北地方の近世社寺建築を代表する建造物としての価値が高い。

【天然記念物】

長走風穴植物群落（天然記念物）



長走風穴は、国見山(454m)の麓に位置しており、真夏でも0~5の冷風を吹き出している。このため、標高170~240mの風穴周辺には、オオタカネバラやコケモモなど標高1000m程度の亜高山帯で見られるような植物が群生している。

長走風穴では、これらの高山植物が群落で自生し、周辺の植物群とは全く異なる景観を呈しているため、学術的に極めて貴重な場所として、国の天然記念物に指定されている。

芝谷地湿原植物群落（天然記念物）



芝谷地湿原は、この地方にごく普通にあった低地湿原だったが、こうした湿原は水田耕作や宅地造成のため急速に消失していったため、現在では低地に残された人為的影響のない貴重な湿原として、国の天然記念物に指定されている。

芝谷地湿原では、学術上価値の高い湿原植物が数多く自生しており、食虫植物が多いこともこの湿原の特徴となっている。また、ハッチョウトンボを始めとして多くのトンボや、水辺の野鳥・小動物などを手軽に観察することができる。

【国登録文化財】

桜櫓館（建造物）



桜櫓館は、昭和8年(1933)に大館町長をつとめた櫻場文蔵(1883~1971)が建てたもので、現存する棟札により設計者は石田常吉・小野熊蔵、大工棟梁は越後甚吉である。

建物は、木造2階建、洋室を備えた和風住宅で、展望台として使われた塔屋をもち、複雑で変化に富んだ外観である。内部は、杉の良材をふんだんに使い、質の高い空間が創出され、建具や付書院に優れた技能が発揮されている。桜櫓館は、たびたび大火に見舞われた大館旧市街地にあって、現存する数少ない質の高い近代和風住宅として貴重である。

県指定文化財

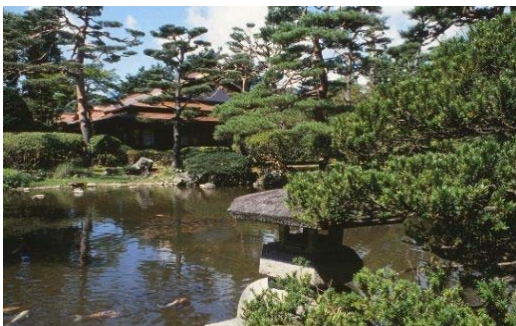
北鹿ハリストス正教会聖堂（建造物）



この聖堂は、北鹿ハリストス正教会聖堂（曲田福音会聖堂）として、畠山市之助等によって建てられたもので、工期は3ヵ月で明治25年（1892）7月31日に竣工し、成聖式がおこなわれた。

聖堂の建築は、本来煉瓦造りか石造りであるが、当教会の聖堂は秋田杉をたくみに加工し、聖所の架構法も四方から木製アーチをのばしてドームをかけるなど、貴重な木造ビザンチン様式建造物である。聖堂内の聖像画（イコン）18点は、日本最初の女流洋画家山下りんの作品で、19点が大館市有形文化財に指定されている。

鳥潟会館・庭園（建造物・名勝）



鳥潟家は慶長年間から400年余の歴史をもつ旧家であり、旧花岡村で代々肝煎を務めてきた。8000㎡を超える広大な敷地に建つ建物及び庭園は、元京都帝国大学名誉教授（医学部長・日本外科学会会長）の鳥潟隆三博士によって京風の意匠を取り入れられ、現在のかたちに整備された。

庭園は同時期に京都の名門植治7代目小川治兵衛の門弟であった粕谷幸作が作庭している。各地から吟味された良材が取り寄せられ、幅3mを超える鞍馬石や直径1mを超える伽藍石などが使用されている。中門などの建造物には、京都を中心に活躍した成行兼太郎が大工棟梁として携わっている。

矢石館遺跡（史跡）



矢石館遺跡は、早口川右岸の段丘縁辺部に位置し、本郷・中仕田集落の中間地点に分布している。昭和27・28年（1952・1953）に武藤鉄城、奥山潤の両氏による発掘調査が行われ、組石棺5基が発見されており、昭和28年3月10日に秋田県史跡に指定された。

発掘調査により、組石棺のほか多数の土器・石器などが出土した。遺跡は、出土した土器から、時期は縄文時代晩期前葉を中心とする、組石棺を持つ墓域を含む集落跡と考えられる。

矢立廃寺跡（史跡）



矢立廃寺跡は、菅江真澄や二階堂道形の記述が残されていて、地元では古くから萬里小路(までのこうじ)藤原藤房卿（無等良雄(むとうりょうおう)）の隠遁の古跡で、秋田市山内の松原補陀寺の前身として言い伝えられてきた。

昭和34年（1959）に秋田県史跡に指定され、昭和39・48・59～61年には5次にわたる発掘調査が行われたが、当地にこれらの建造物が営まれた社会的（政治・経済・文化・信仰など）背景については解明されてお

らず、今後の調査・研究をまたなければならない

安藤昌益墓（史跡）



安藤昌益は、江戸時代中期の思想家である。昌益の思想は、明治 32 年（1899）に狩野亨吉が見出した稿本『自然真営道』で知ることができる。

昭和 49 年（1974）郷土史家の石垣忠吉ら大館市史編さん委員会による二井田一関家文書の調査で、明和元年（1764）昌益の三回忌法要の記録である「掠（かすみ）職手記」と名付けられた昌益の没年に関する資料が発見され、昌益の菩提寺が温泉寺であることが判明し、境内には「堅勝道因土」の戒名を含む墓石と「昌安久益信土」と刻まれた墓石が発見された。

市指定文化財

長岐武家門（建造物）



明治中期に比内地方の大地主であった長岐家が佐竹公別邸の門を模して建立した。総櫓の堂々とした造りで昭和 51 年（1976）旧比内町の文化財として指定された。

田代岳の岳参り作占行事（風俗慣習）



田代山（岳）は山頂に湿原があり、湿原には神聖視される池塘がある。そこは雨乞いの場であり、作を占い、豊作を祈る場である。

半夏生の前日、神主が作占いの許可を願う。翌日、作占いの神事を行い、その結果を告げられる。県北部のみならず津軽地方からも参拝者が訪れ、作占いの結果を聞き、笹とつげを持ち帰る。それを田の水口に立てて虫除けにするという習わしが続いている。

代野番楽（民俗芸能）



現在は、地元の稲荷神社で毎年元旦に奉納されている。その昔（約 400 年前）村を訪れた旅芸人が伝えたとされているが、昭和 35 年頃からしばしば中断し、昭和 48 年（1972）に再興した。番楽の踊りの主流は武士の踊りである。中断した間に脱落した部分もあり、13 あった演目のうち、6 演目のみが演じられている。

蛭沢獅子踊り（民俗芸能）



伝えによれば、安永年間(1772～1781)または文化年間(1804～1818)に津軽から伝来したと伝えられ、豊作祈願、悪病除けに、盆の13日と14日に踊られている。蛭沢にはもと獅子宿があり、獅子関係の道具(獅子頭や衣類)の保管にあたっていた記録が残っている。

山田の獅子踊り（民俗芸能）



慶長7年(1602) 豊年万作・無病息災を祈って始まったという。この年は佐竹義宣が秋田移封を命じられた年である。佐竹氏が大館城に入部の際に、山田獅子踊りを披露し、小場義成公からお褒めの言葉を受けたという。昭和10年代(1935)に一時中断したものの、昭和22年(1947)に再興し、盆の13日と14日に踊られている。

独鈷囃子（民俗芸能）



かつて十狐城を築いた浅利則頼公が、城内で行われた酒宴の席で自ら剣を振り舞ったのが由来とされている。「寄せばやし」「本ばやし」「剣ばやし」「帰り山車」の4種類が伝えられており、毎年大日神社例大祭の日に保存会の人たちにより奉納されている。

大館囃子（民俗芸能）



京都の祇園囃子の流れをくむと伝えられ、伝習には2説あり。 ①：大館城主となる佐竹氏が常陸の国より転封となる際に、道中の行進曲として使用、のちに城中に出入りする商人等に親しまれ広まった。説 ②：大館の地主や町方の親方が若者を京都に送り、伝習させた。400年ほど前から地元神明社例祭の余興奉納として若者たちが腕を競った。

戊辰戦争やその後の相次ぐ大火で記録は消失し、残っている記録は、明治22年(1889)の小野儀助日記の記述。

十二所城代茂木家墓地

十二所城は、十二所町の南側台地に築かれ、浸食谷を空堀とし、浸食谷により孤立した四つの台地を郭とした構造になっている。中世は浅利氏家臣十二所信濃が居住し、浅利、秋田、南部の抗争の中で幾度か城主を変え、佐竹氏国替え後は赤坂朝光が守備についた。元和元年(1615)に塩谷義綱が「所預」に任命され、翌年十二所の屋敷割りが実施された。しかし、本城は、幕府の一国一城令によって、元和6年(1620)に破却された。その後、十二所所預は、梅津氏、茂木氏が務めた。

十二所茂木家墓地は、十二所駅南側の台地上の西寄りに設けられ、十二所茂木三代知暢(とものぶ)以降の代々の墓が建てられている。

成章書院は寛政5年(1793)創立。藩士の弟子の教育を目的とした。

松峰山信仰遺跡群(史跡)



松峰山(大山)は、大館市において最も古い歴史を有する信仰の山であり、松峯神社を中心に古代・中世に縁起をもつ密教遺跡が分布する。それは現在確認できるもっとも古い史料として、慶長6年(1601)に杉沢喜介が秋田実季から管理をまかせられ、そのための経費として三十六石四斗が宛がわれていることから証明される。

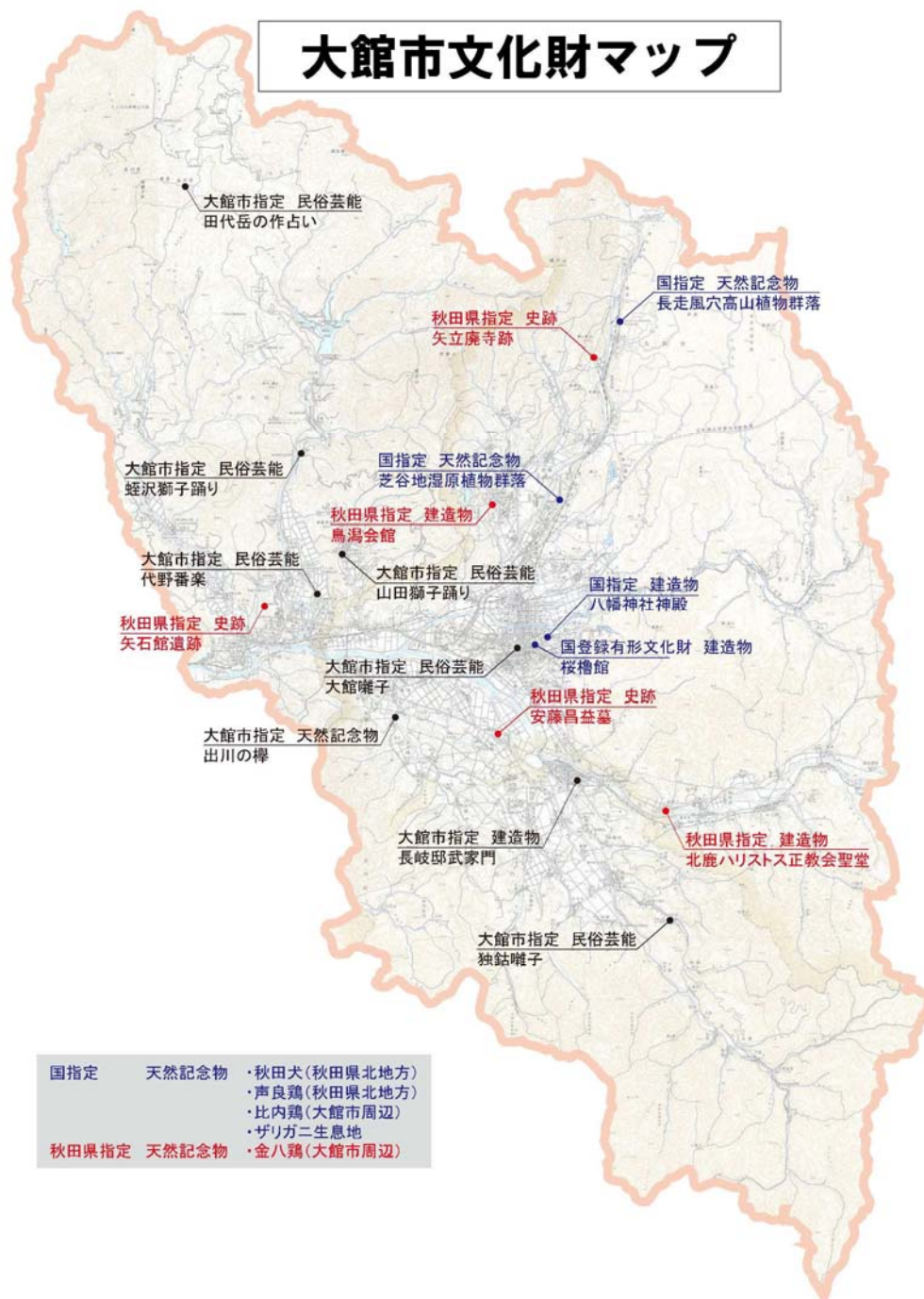
さらに、江戸時代には民間信仰遺跡が、大館地方の人々の厚い心思を受け、それは明治、大正、昭和の各時代を経て現代に継承されてきている。

出川の櫨(天然記念物)



出川村の伝承によると、この櫨は今から700年以上の昔に小松源七という人物が植えつけたもので、板沢の八幡神社の櫨と板子石の山神社の櫨とは兄弟木であるという。この櫨は、村の象徴であり、村を守護する霊木であると信じられてきた。

根元の周囲に発育している多数の巨大なコブもまた信仰の対象となり、母乳の出ない産婦が白布で作った細長い小袋に白米を入れ、それをコブに備えてお祈りをし、それを家に持ち帰り飯に炊いて食べると母乳が出るようになると伝えられ、「おっぱいの神様」として信じられてきた。



大館市の文化財(指定、登録)

国指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	八幡神社	2 棟	平成2年3月19日	大館市
天然記念物	長走風穴高山植物群落		第1次指定：大正15年2月24日 第2次指定：昭和6年10月23日	大館市長走
	芝谷地湿原植物群落		昭和11年9月3日	大館市釈迦内
	秋田犬		昭和6年7月31日	秋田県東北地方
	ザリガ二生息地		昭和9年1月22日	大館市
	声良鶏		昭和12年12月21日	秋田県東北地方
	比内鶏		昭和17年7月21日	大館市周辺

国登録有形文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	桜櫓館（旧桜場家住宅）	1 棟	平成11年7月8日	大館市

秋田県指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	北鹿ハリストス正教会聖堂	1 棟	昭和41年3月22日	大館市曲田
	鳥潟会館（旧鳥潟家住宅）	8 棟	平成23年3月22日	大館市花岡町
絵画	絹本阿弥陀来迎図	1 幅	昭和35年12月17日	大館市比内町
工芸品	太刀 無銘 伝一文字成宗	1 口	昭和40年2月23日	大館郷土博物館
	刀 銘 大和大掾藤原正則	1 口	昭和46年7月17日	大館市十二所
	脇差 銘 粟田口一竿子入道忠綱彫同作	1 口	昭和30年1月24日	大館市
	小柄 金銀地空目鍛 銘 正阿弥伝兵衛	1 本	昭和38年2月5日	大館市十二所
	鐔 竹林猛虎の図 銘 秋田住重具	1 枚	昭和38年2月5日	大館市十二所
書跡・典籍	菅江真澄著作	4 6 点	昭和33年2月5日	中央図書館
考古資料	鋒形石器	2 点	平成5年4月9日	大館郷土博物館
	塚ノ下遺跡出土土偶	1 点	平成23年3月22日	大館郷土博物館
史跡	矢石館遺跡		昭和28年3月10日	大館市早口
	矢立廃寺跡		昭和34年1月7日	大館市白沢
	安藤昌益墓		平成24年3月23日	大館市二井田
天然記念物	金八鶏		昭和34年1月7日	大館市周辺
名勝	鳥潟会館（旧鳥潟家住宅）庭園		平成23年3月22日	大館市花岡町

大館市指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	武家門	1 棟	昭和51年1月20日	大館市比内町
絵画	絵馬額	2 枚	昭和48年10月11日	大館市比内町
	観経曼荼羅	1 幅	昭和54年7月20日	大館市比内町
	釈迦涅槃絵	1 幅	昭和54年7月20日	大館市比内町
	花鳥 佐竹義文	1 幅	昭和54年7月20日	大館市比内町
	花鳥 戸村後草園	双幅	昭和54年7月20日	大館市比内町
	聖像画（イコン）	1 9 点	平成3年9月3日	大館市曲田
	釈迦涅槃図 紙本彩色	1 軸	平成3年9月3日	大館市十二所

種 別	名 称	員数	指定年月日	所在地
彫刻	大日如来像 木造	1 体	昭和48年10月11日	大館市比内町
	十一面千手観音菩薩像 木造	1 体	昭和48年10月11日	大館市比内町
	四天王像 木造	4 体	昭和48年10月11日	大館市比内町
	不動尊像 木造	1 体	昭和48年10月11日	大館市比内町
	毘沙門十王像 木造	1 0 体	昭和48年10月11日	大館市比内町
	延命地藏菩薩 木造	1 体	昭和59年12月10日	大館市
	虚空蔵菩薩 青銅造	1 体	昭和59年12月10日	大館市花岡町
	放光王地藏菩薩座像 青銅造	1 体	平成13年3月5日	大館市
工芸	脇差 銘 出羽住忠秀	1 口	昭和52年3月22日	大館市
	刀 銘 来国俊	1 口	昭和52年3月22日	大館市
	太刀 銘 京都住人菅原国長	1 口	昭和52年3月22日	大館市十二所
	琵琶	1 基	昭和54年7月20日	大館市比内町
	鰐口	1 口	昭和54年7月20日	大館市比内町
	赤絵茶壺 長康亭道三	1 個	昭和54年7月20日	大館市比内町
	刀 銘 出羽住正近	1 口	昭和55年3月4日	大館市
書跡・典籍	十二所土族屋敷絵図	1 軸	昭和54年3月29日	大館郷土博物館
	鸞斎書「六曲一双屏風」	1 双	昭和56年3月30日	大館郷土博物館
	扁額「十二天」	1 面	平成3年9月3日	大館市十二所
	真崎文庫	2,081点	平成17年9月1日	大館市中央図書館
考古資料	大型ナイフ形石器	6 個	平成4年6月15日	大館郷土博物館
	壺（珠洲焼）	3 個	平成4年6月15日	大館郷土博物館
民俗芸能	山田獅子踊り		平成6年5月31日	大館市山田
	蛭沢獅子踊り		平成6年5月31日	大館市岩瀬
	代野番楽		平成6年5月31日	大館市岩瀬
	独鈷囃子		平成12年12月6日	大館市比内町
	大館囃子		平成13年8月29日	大館市
風俗慣習	田代岳の作占い		平成7年3月17日	大館市田代岳
史跡	道標石 達子森下	1 基	昭和53年6月15日	大館市比内町
	道標石 川久保	1 基	昭和53年6月15日	大館市比内町
	道標石 味噌内	1 基	昭和53年6月15日	大館市比内町
	板沢一里塚	1 対	平成元年3月3日	大館市板沢
	ケラ木森一里塚	1 基	平成元年3月3日	大館市二井田
	十二所城代茂木家墓地		平成3年9月3日	大館市十二所
	長坂一里塚		平成15年7月7日	大館市長坂
	松峰山信仰遺跡群	2 6 件	平成21年5月1日	大館市松峰
天然記念物	出川の櫨		昭和53年3月13日	大館市出川
	御神木の櫨、イチイ		平成7年3月17日	大館市岩瀬

(3) 代表的な先人達 (文学)



小林 多喜二:こばやし たきじ 明治36年(1903)~昭和8年(1933)

大館市川口の農家に生まれる。多喜二が4歳の時に一家をあげて北海道小樽へ移住し、叔父のパン屋を手伝いながら、大正13年(1924)に小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)を卒業し、北海道拓殖銀行に就職した。

昭和3年(1928)に小樽の三・一五事件を題材とした『一九二八年三月一五日』を発表し、プロレタリア作家として注目を集める。

昭和4年(1929)に代表作『蟹工船』を発表したが、左翼活動のため北海道拓殖銀行を解雇され、翌年上京した。以後、プロレタリア作家同盟の有力な指導メンバーとして活躍する。弾圧を逃れて地下生活に入ったが、昭和8年(1933)に逮捕され、築地署で激しい拷問を受けて死亡した。

(教育・福祉)



日景 弁吉:ひかげ べんきち 嘉永元年(1848)~大正8年(1919)

大館市釈迦内に生まれる。藩校明德館で学び、戊辰戦争では、応援各藩の応接係とともに、海岸防備に従事する。

明治7年(1874)に釈迦内村にできた向陽学校(現在の釈迦内小学校)を日景学校と改称し、のちに自分の所有地に新築した。さらに、日景英学校を設立するなど教育に力を注いだ。また、土地を切り開いて、釈迦内と立花、白沢と矢立峠を結ぶ道路をつくった。このほか、機織りの技術を教える養成所の設立、養蚕(蚕を飼い、糸をとること)、杉苗の栽培などの産業を興した。

明治12年(1879)から県議会議員を12年間務めた。最初は、自由民権派の秋田改進黨に所属したが、のちに秋田中正党に移って政治活動をした。

晩年は、自ら開発した日景温泉で過ごした。



栗盛 吉右衛門:くりもり きちえもん 天保9年(1838)~大正3年(1914)

大館市に生まれる。8歳の時に父が北海道で荒物屋を開いていた関係で、母とともに函館に渡る。しかし、店が火災になり、父が管理していた船が難破するなど不運の連続で倒産し、一時は姉とともにセンベイやアメの行商をして生活を助けた。父の死後独立し、安政4年(1857)に大館にもどり呉服小間物屋“松前屋”を開き、一代で財を築いた。

自らの体験から、いかに才能があってもお金がなければ成功できないことを悟り、自分の財産を使って奨学金の貸し付けをするなどの育英事業を始めた。この事

業は以後 4 代にわたり引き継がれ、栗盛教育団の解散後、財産のすべては大館市に寄付された。洋館風の事務所は、大館市立栗盛記念図書館として活用されたが、老朽化のため取り壊され、跡地には、現在の大館市立中央図書館が建てられた。

(産業・経済)



山田 定治:やまだ さだじ 明治 31 年(1898)~昭和 58 年(1983)

北秋田養蚕講習所に学び、大正 10 年(1921)に大館町農会技術員になる。昭和 7 年(1932)に大館にできた秋田県種鶏場の日本鶏飼育係助手に採用され、その後、県職員、大館鳳鳴高校事務長を務めながら、声良鶏・比内鶏・金八鶏の三鶏の飼育を行い、天然記念物への指定を働きかけた。その結果、昭和 12 年(1937)に声良鶏、昭和 17 年(1942)に比内鶏が国の天然記念物に、また昭和 34 年(1959)に金八鶏が県の天然記念物に指定された。

退職後は、自宅に声良鶏の孵化場を併設し、昭和 47 年(1972)に施設を整備し「天然記念物秋田三鶏資料収蔵庫山田記念館」として開館した。平成 22 年(2010)に大館郷土博物館の敷地内に新築された「秋田三鶏記念館」が、その役割を引き継いでいる。



岩沢 太治兵衛:いわさわ たじべえ 文政 3 年(1820)~明治 31 年(1898)

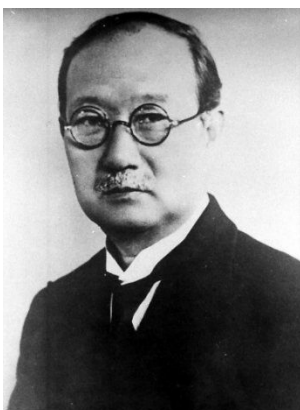
今の大館市中町に生まれる。子どものころ、飢饉に苦しむ人々を見て「一人の人間も飢えさせてはならない」と強く心に誓った。

役所に勤めると、飢饉にそなえて寄付を集め、米 1800 石(約 270 トン)を蓄えた。この米は、「戊辰の役」という戦争で町のほとんどが焼けたときに役に立った。また、ほかの人たちと協

力して「田畑郷助」というしくみをつくった。これは、米やお金をためておき、生活に苦しんでいる人たちに与えようというもので、今でも「大館感恩講」として活動が続けている。

(平成 23 年 4 月 大館市教育委員会発行 小学校 3・4 年社会科副読本「わたしたちの大館市」より)

(医学)



鳥潟 隆三:とりかた りゅうぞう 明治 10 年(1877)~昭和 27 年(1952)

函館に生まれる。幼少期を函館で過ごした後に、大分中学校、第一高等学校、京都帝国大学(現在の京都大学)医学部へと進んだ。

大正 2 年(1913)にスイスのベルン大学に留学し、「血清細菌学」を研究する。

「イムペジン学説」を提唱し、帰国後に鳥潟免疫研究所と附属病院を設立し、この時期に外用薬「コクチゲン」(鳥潟軟膏)を発明した。

大正 11 年（1922）に京都帝国大学教授になり、平圧開胸術を考案して肺結核外科手術を向上させた。その後、日本外科学会会長に就任し、昭和 20 年（1945）から昭和 22 年（1947）まで疎開して故郷の花岡で暮らした。

昭和 26 年（1951）には、花岡の邸宅と庭園（現在の鳥潟会館）が当時の花岡町に寄贈され、一般の利用に開放されている。鳥潟会館は平成 23 年（2011）3 月に秋田県指定文化財に、庭園は秋田県指定名勝に指定された。

（人文科学）



狩野 良知：かのう よしとも 文政 12 年(1829)～明治 39 年(1906)

藩校明徳館に学び、その後当時の最高学府である昌平黉で学んだ。

明治 18 年（1858）には、幕府の鎖国政策を批判した『三策』を執筆した。「上策」は交易を通じ、外国文明を取り入れて世界の動きを知ること。「中策」は軍隊を充実させ、港を封鎖し外交を拒絶して外敵を撃退すること。「下策」は外国人のおどしを受けて何もしていないこと。「上策」が最高の策で、「中策」はやむを得ず行う策であると結論づけた。この『三策』は、明治元年（1868）に吉田松陰

が開いた松下村塾から出版されている。

戊辰戦争では、大館城代の家老として本荘に進軍した。

明治 7 年（1874）に内務省に入り、退官後は秋田に帰り文筆の面で活躍した。

秋田市の「千秋公園」の命名者。



狩野 亨吉：かのう こうきち 慶応元年（1865）～昭和 17 年（1942）

帝国大学（現在の東京大学）を卒業後、金沢の第四高等中学校で教授を務める。その後、熊本の第五高等学校を経て、34 歳の若さで第一高等学校の校長になる。

明治 39 年（1906）に初代の京都帝国大学（現在の京都大学）文科大学長になり、内藤湖南や幸田露伴ら民間の優秀な人材を招き、大学の発展に尽くした。

明治 32 年（1899）に安藤昌益の『自然真営道』の写本を発見し、ひそかに研究を続けた。明治 41 年（1908）に『内外教育評論』に「大思想家あり」を発表し、安藤昌益を世に紹介した。昭和 3 年（1928）には岩波講座『世界思潮』に「安藤昌益」を発表し、その思想を詳しく紹介した。

夏目漱石と親しく、名作『我輩は猫である』の猫の飼い主の苦沙弥先生のモデル。

東北大学図書館の「狩野文庫」は亨吉の収集した蔵書。

（政治）



石田 博英:いしだ ひろひで 大正 3 年(1914)~平成 5 年(1993)

昭和 14 年(1939)に早稲田大学政経学部を卒業し、中外商業新報社(現在の日本経済新聞社)に入社する。

昭和 22 年(1947)に父の故郷である大館市へもどり、日本国憲法のもとでの初の衆議院議員選挙に立候補して当選し、以来 36 年余にわたり国会議員として活躍した。

昭和 32 年(1957)に岸内閣で労働大臣に就任し、以来池田内閣で 3 回、佐藤内閣で 1 回、福田内閣で 1 回と通算 6 期にわたり労働大臣を務めた。この間、大きな政治問題となった三池炭鉱争議や

ILO87 号条約の批准問題に取り組んだ。

バラの花を愛し、自宅の庭には世界各国の数百種のバラが植えられ、現在も「石田ローズガーデン」として市民に親しまれている。



佐藤 敬治:さとう けいじ 大正 9 年(1920)~平成 21 年(2009)

東京帝国大学(現在の東京大学)在学中に学徒出陣のため、満州国に出征した。卒業後は家業を手伝い、昭和 24 年(1949)に大曲高等女学校(現在の大曲高校)の教諭になる。

昭和 26 年(1951)に大館町と釈迦内村が合併して誕生した人口 30,056 人の大館市の初代市長に当選し、当時「日本一小さい市の全国最年少市長」となり、以後 4 期 16 年間市長を務める。在任中は 3 度の大火があり、その復興と都市の整備に尽くした。

昭和 30 年(1955)に、周辺の十二所町・長木村・上川沿村・下川沿村・真中村・二井田村との合併を実施し、大館市の人口は 56,673 人になる。

昭和 47 年(1972)には、社会党から衆議院議員選挙に立候補して当選し、通算 6 期 20 年務める。

（自然科学）



荒谷 武三郎:あらや たけさぶろう 明治 17 年(1884)~昭和 37 年(1962)

大館市比内町扇田に生まれる。明治 39 年(1906)に秋田師範学校(現在の秋田大学)を卒業し、釈迦内小学校に赴任した。

大正 5 年(1916)には矢立小学校の校長になり、風穴の理論的研究に着手した。大正 9 年(1920)に「風穴の研究」を『理学界』に発表、大正 11 年(1922)には「矢立風穴」を『地学雑誌』に発表し、注目を集めた。昭和 2 年(1927)には風穴研究の集大成として「秋田県長走風穴に就て」を『地球』に発表した。

大正 6 年(1917)から昭和 5 年(1930)までの 13 年間、釈迦内小学校の校長を務める。

郷土研究にも熱心で、大正 7 年（1918）には『釈迦内郷土誌』を完成させた。この『釈迦内郷土誌』は、平成元年（1989）に地区の有志の手で復刻刊行された。

（技術・工学）



鳥潟 右一:とりかた ういち 明治 16 年(1883)~大正 12 年(1923)

大館市花岡町に生まれる。大分中学校から東京の開成中学校に転校し、第一高等学校、東京帝国大学（現在の東京大学）電気工学科へと進んだ。明治 39 年（1906）に大学を首席で卒業後、逓信省電気試験所に入り、通信技手になる。

明治 42 年(1909)からアメリカやイギリスなど 5 カ国に留学し、帰国後に T Y K 式無線電話を発明した。T Y K は共同発明者の鳥潟右一、横山英太郎、北村政次郎の 3 人のイニシャル。その後、三重県鳥羽市で無線電話の世界初の実用化に成功した。

大正 4 年（1915）には、東京と中国の上海の間を、無線電話を使って通信することに成功し、世界的に有名になる。

大正 9 年（1920）に逓信省電気試験所長になったが、1923 年に亡くなる。

（思想・宗教）



安藤 昌益:あんど う しょうえき 元禄 16 年(1703)~宝暦 12 年(1762)

享保 17 年（1732）に京都で医学修行を開始し、3 代目味岡三伯に師事した。

延享元年（1744）に八戸に移住し、町医者をしてしながら、平等な社会を求める独自の思想を生み出した。

代表的著作である『自然真営道』の中で、江戸幕府を頂点に武士が他の身分を支配する現実の社会を批判している。そして、すべての人が自然の中で農耕を行って生活することにより、貧富の差も支配関係もない平等な社会が実現すると述べている。

宝暦 8 年（1758）に妻子を八戸に残して、故郷である大館市二井田に移住した。

昌益の思想が村に広まり、村人は昌益を尊敬して寺や神社の宗教的行事を行わなくなり、昌益の死後、昌益の門弟と寺や神社の間で争いがあったという記録が残されている。

平成 24 年（2012）に墓が県指定史跡になった。

宗教音楽の伝道と普及に尽くした。

1 - 5 大館の伝統文化

豊かな大地と豊富な森林資源に恵まれた大館市は、その地勢からこの地方固有の伝統的な産物を創り出した。

津軽藩との境界論争で得た秋田杉の宝庫からは「大館曲げわっぱ」が、そして第三期古層腐植土で形成される比内地方の黒土を主としたミネラル分が多い土壌からは日本三大美味鶏として名高い「比内地鶏」が生まれた。加えて、「きりたんぼ鍋」は伝統的な食文化として大館に古くから根付いている。

また、藩政時代に番犬や闘犬に使われた大館犬は、「秋田犬」として昭和 6 年（1931）に日本犬では最初の天然記念物として指定された。

（1）大館曲げわっぱ

（起源）

市秋田音頭にも歌われている「大館曲げわっぱ」は、全国各地にある曲げ物の中で唯一、国の伝統的工芸品に指定（昭和 55 年（1980））されている大館の特産品である。

もともとは、木こりが杉杙で曲げ物の容器を作ったのが始まりで、藩政時代には大館城主佐竹西家が、領内の豊富な天然杉に着目し、下級武士たちの内職として奨励し普及発展したと伝えられている。

（1100 年前の曲げわっぱ）

また、平成 11 年（1999）8 月に発見された埋没家屋からは、完形の曲物（口径 13 cm、高さ 9 cm、底径 13 cm）が出土している。これは延喜 15 年（915）年 7 月に噴火したとされる十和田火山から噴出したシラス層の下から出土したことから、10 世紀初頭のものと考えられる（現在大館郷土博物館に展示 右写真）。

これが「大館曲げわっぱのルーツ」であると断定することはできないが、少なくとも 1100 年以上前から、この地方には完成度の高い曲げ物が存在していたという証ではある。



曲物（道目木遺跡）

10 世紀初頭の遺跡（餌釣館山王台遺跡）に比べて、10 世紀中ごろ以降の遺跡（大館野遺跡、扇田道下遺跡）からの遺物では、杯（椀）、皿類の土器が著しく減少する傾向がみられていることから、この頃には多くの木器が使われていたのではないかと考えられる。

（生活道具から美術工芸品に）

薄い板を曲げて底をつけ、桜や樺などで縫いとめて作る「曲げ物」は、全国各地で作られ、昭和 30 年（1955）ごろには、生活道具の大半は木製であったが、その後、金属、ガラス、プラスチックに代わられ、大館曲げわっぱもまた試練の時期を迎えた。

その後、時代は本物志向の風潮が高まり、新しいデザインを取り入れた多くの製品が生み出され、今では職人たちの技術向上と創意工夫で美術工芸品としての価値を高めている。



おひつ 隅丸七寸



弁当箱

（大館に根付いた文化としてつなげる取り組み）

かつて大館曲げわっぱには、樹齢 300 年を超える天然秋田杉が使われていたが、今では天然秋田杉自体がほとんど手に入らなくなっている。そのため、将来に向けて大館曲げわっぱに使える良質の植林秋田杉を育てようと、林業関係者とのコラボレーションで「曲げわっぱの森」の活動も広がっていると同時に、天然秋田杉に代わる人口杉の選別法確立に向け、市と米代東部森林管理署、県立大木材高度加工研究所、大館曲げわっぱ協同組合の 4 社が適材木選別調査協定を締結している。

また、地元の子供たちに「大館曲げわっぱ」の良さを伝える取り組みとして、子供たち自身で曲げわっぱの食器を作り、給食で使用するという取り組みも広がっている。

（２）比内地鶏（比内鶏の一代雑種）

比内鶏は大館市を中心に分布する日本鶏で、その成立は江戸時代と推定される。古くから肉、卵は食用として、また毛羽等は兵具や獅子頭の装飾用として徴用の対象になったことが古文書にうかがわれる。

とりわけこの鶏の声価を今日まで高めたのは、その美味なる肉であり、この地方の名物であるきりたんぼ鍋は、この肉を用いることを本場の定義としている。

山鳥の風味とコクを持ち、抜群の出汁が出るこの鶏は、もともと古くから比内地方で飼育されてきた日本固有の地鶏である。



比内地鶏

比内鶏を含む純粋日本鶏は、肉養鶏や採卵鶏に比べると非生産的であることから減少の一途を辿ることになる。これに危機感を感じた山田定治氏（大館市）の努力により、昭和 17 年（1942）に比内鶏は国の天然記念物に指定された。

以後、食用には一代交配種の「比内地鶏」が作出され、当地を代表するブランドとして市場に流通している。

（３）きりたんぽ鍋

「たんぽ」の起源は、秋田県北部が広く「ひない」と呼ばれていた時代にさかのぼり、狩りで山に入ったマタギが、ご飯をこねて木の串に巻き付けて、山神様へのお供え物にしたのが始まりとされている。また、自給自足の祖先たちが、秋の農作業を終えて米、みそ、鶏などを持って炭焼きのために山籠もりをした際に、その日残ったご飯をこねて丸め、串に巻いて焼き干して食べたという夜長の廃物利用食が始まりという説もある。

いずれにしてもこの地域には、農民がその年の農作業を終え、一年中の慰安を兼ねた収穫感謝祭や一家団らんの食事に貧富の区別なく、必ず手づくりの「たんぽ」を会食する風習が続いてきたことだけは間違いがない。

（古文書の記録）

「タンポ」が古文書に登場するのは、菅江真澄遊覧記（寛政 6 年（1794））で、今からおよそ 220 年前、「キリタンポ」は阿仁前田の俳人・庄司喙風「郡方勤中日記」（慶応元年（1865））というから、少なくとも県北地方では、150 年ほど前から食されているということになる。そのほかの文献から見ても、きりたんぽ鍋がハレの日や一般家庭料理として提供されるようになったのは、これらの文献から、幕末から明治にかけてと考えられる。

（たんぽ会の文化）

大館では、秋口になって新米が出ると「たんぽ会でもしょうか」という言葉があいさつ代わりになる。きりたんぽ鍋で一杯飲もうというのが「たんぽ会」であるが、この季節になると肝心のたんぽが出ない「たんぽ会」さえ開かれるほどで、人が寄り集まった会に出るハレの食物のイメージがある。



たんぽづくり（鳥潟会館）

また、結婚式の後やお祭りで一族郎党が集まるとき、大切なお客様や懐かしい友達、里

帰りの子供たちを迎えるのも「きりたんぼ鍋」である。大館人が最上のおもてなしを込めて提供する料理であり、久しぶりに帰郷した方には「きりたんぼ鍋」を食べて初めて大館に帰ってきたことを実感できる故郷そのものと言える特別なご馳走なのである。

（本場大館きりたんぼの誇り）

大館人の「きりたんぼ」に対する思い入れは大変強い。今では、きりたんぼ鍋は全国各地で食べることができるが、まがい物が登場し「おいしくない」などと評されると論争が起きるほどである。まずいきりたんぼは許せないと、今では「本場大館きりたんぼの定義」があり、天然記念物「比内鶏」の血統である「比内地鶏」や地場産の食材を使う厳密なレシピが定められているほどである。

こんな熱意で始まった「本場大館きりたんぼまつり」は今年 43 年目を迎え、今では大館樹海ドームを会場に開かれる一大イベントになっている。全国に美味しい大館の味を発信し、一度食べた人はまた大館に戻ってくるような、最上のおもてなしを目指して毎年開催している。

厳密な定義はあるものの、市内の各家庭で作られているものは、すべて「本場おおだてきりたんぼ」であるとされている。これもまた故郷の味の所以である。

（参考文献）

寛政 6 年（1794）菅江真澄遊覧記「奥のてぶり」

木材をくりくぼめたものにご飯を入れ、細い杵で突いて餅にした「たんばやき」

天保 5 年（1834）「天保飢饉見聞記」長谷川伊右衛門

「反甫（たんぽ）」飯をつぶし、長い木の串に蒲の穂のように握りつけ、炉火に焼いて味噌をつけ、焼き乾かして食べる。松橋栄信：校注

元治元年（1864）二井田一関文書「日監」

「扇田の病人模様宜敷候よしタンポと鶏壺羽牛蒡添テ遣候」

慶応元年（1865）12 月 30 日 阿仁前田の俳人・庄司喙風「郡方勤中日記」

宅にてキリタンポ振舞相はしめ候

明治 20 年（1887）12 月 1 日 小野儀助日記

大町の呉服店「まるこ」の大旦那が「夜、鶏皿やき・タンポに而大食せり」

ドイツの建築家ブルーノ・タウトが昭和 11 年 2 月に秋田市を訪れた際、川反で「とりわけ有名なキリタンポをごちそうになって」（「日本美の再発見」）いる。その頃には、広く秋田県の料理となっていた。

（４）秋田犬

秋田犬の祖先犬は、マタギ犬（山岳狩猟犬）で、中型か中型よりやや大きい程度の熊猟犬であった。藩政時代、佐竹西家（小場家）は、闘犬によって武士の魂を養ったと伝えられ、闘犬は大館を中心に発達したことから、大館犬と呼ばれた。

闘犬は明治、大正時代に最も盛んになったが、しばしば闘犬禁止令が出され、一時闘犬が行われなくなった。その後、明治 42 年（1909）頃から再び盛んとなり、より強い犬を求め土佐犬との交配が積極的に進められるなど、秋田犬の純粋性が危ぶまれるようになった。

秋田犬は国犬として保存すべきであるという声が高まり、昭和 2 年（1927）に大館町の有志により秋田犬の純粋種保存の基盤づくりが行われ、昭和 6 年（1931）7 月に日本犬として最初の天然記念物として国の指定を受けた。

この 1 年後、帰らぬ主人・上野英三郎（東京帝国大学教授）を渋谷駅で待ち続ける秋田犬忠犬ハチ公の記事が朝日新聞に報道され、注目を集めた。



秋田犬

2 年後には、渋谷駅のハチ公像が除幕され、ハチ公は翌昭和 10 年（1935）3 月 8 日、11 歳 4 か月で死亡したが、主人に忠実な秋田犬は、忠犬ハチ公の名とともに、ますます世に知られることになった。

[秋田犬保存会]

この昭和 9 年（1934）頃から、秋田犬保存会は犬籍登録を実施、昭和 13 年（1938）には「秋田犬標準」も制定され、展覧会も開催されるようになったが、これは太平洋戦争の勃発によって、一時中断されることになった。

戦後はいちはやく復活、昭和 22 年（1947）からは展覧会を開催し、同 24 年（1949）からは会報「秋田犬」が発行されるようになり、同 28 年（1953）5 月からは社団法人組織に移行、運営されている。

昭和 24・5 年頃（1949・1950）からは全国各地に支部、総支部の設立がはじまって、現在では、東北北海道、関東、東海北陸、関西、中国四国、九州に総支部が置かれ、その管下には 50 余の支部があり、海外には、米国・ロサンゼルス支部と台湾支部がある。そうして春秋 2 回の本部展・総支部展は勿論、各支部は年間 1～2 回の展覧会を開催し、それ以外に観賞会や研究会を随時催している。

尚、本会は昭和 52 年度（1977）が創立 50 周年に当り、それを記念して秋田犬会館が設立された。1 階は本部事務室、2 階が会議室で 3 階が秋田犬博物室になっており、我が国犬種団体唯一の博物室として高く評価されている。

第2章 大館市の維持向上すべき歴史的風致

1 大館城下の町割りに残る歴史的風致

(1) 大館城下の町割り

佐竹西家と小場義成

慶長7年(1602)、佐竹義宣^{よしのぶ}は出羽秋田への所替えを命じられ、のちに初代大館城代となる小場義成^{お ば よしなり}は、ほかの家臣とともに秋田入りし、当初は仙北の六郷に、次いで(山本郡)^{ひやま}檜山城に入城した。

小場義成の命で大館入りしたのは赤坂朝光であったが、慶長7年(1602)7月、浅利氏の旧臣であった^{つづれこ}綴子村太田四郎左衛門等を中心に坊沢村、綴子村、小森村一円の農民が蜂起し、これに呼応するように、慶長8年(1603)8月、扇田村川口六右衛門、^{とつこ}独鈷村岡田七兵衛、野呂孫四郎や花岡村、十二所村などの浅利旧臣が新政反対の拠点を作り、特に大館村では浅利伝兵衛らが結束して大きな抵抗勢力となった。

相次ぐ反乱に対処できなくなったため、小場義成は300の兵を率いて大館の赤坂救援に出動したが、戦乱は必至の様相を呈した。その時立^{たちくいむらじょうおう}杭村浄応寺の住職が、蜂起軍と義成軍との間に仲介に入り、戦乱を避けることができたという。

こうして小場義成は、残存勢力を抑えるとともに、津軽・南部両国境の備えを固めるために、慶長15年(1610)大館城に入城した。大館城代となった小場義成は、さっそく城郭の改修と拡張を行い、同時に町割りにも着手した。

元和元年(1615)幕府の一国一城令が発令されたが、秋田藩では、大館城と横手城は久保田城の支城という名目で幕府から残置が容認された。その後徐々に地盤を固めた小場氏は、万治年間(1658~1660)に「佐竹」を名乗ることを許され、のちに「佐竹西家」と呼ばれるようになり、大館佐竹氏は、第11代義遵^{よしゆき}まで約260年間、大館城代を務めた。

大館城跡(桂城公園)

記録によると大館城は、浅利勝頼が築いたのが最初とされる。その後、大館城代となった小場義成によって新たな城郭が整備されたが、戊辰の際に自ら火を放ち落城した。

その後この土地は、明治8年には民間に払い下げられ、しばらくの間は開墾地となっていたが、明治35年には本丸跡に高等小学校が開校され、のちに桂城小学校が移転するまで学校敷地として活用されていた。



大館城跡(春の桂城公園)

桂城公園としての供用開始は、昭和31年10月15日となっているが、その前年

には年祝いの記念植樹が行われ、その記念碑が今も残っている。これ以降、公園の整備が進め



られ、昭和 40 年頃からは 4 月下旬に「桜まつり」が開かれるようになり、四季折々の風景を楽しめる市民の憩いの場となっている。今となっては、城の面影を残すものは少ないが、わずかに内堀の一部と土塁の一部が残っている。

市史に記されている大館城の規模は以下のとおりである。

本丸は、東西 97 間、南側では東西約 120 間とやや広く、南北 50 間 3 尺という形状をなしていた。虎口は三つ。^{こぐち}南側表門は入枳形。久保田城と同様に、石垣の無い土居づくり。土居の高さは約 10 尺。^{ばふみ}馬踏は約 2 間、正面だけが少し石土居をなしている。本丸の面積は約 5,400 坪、本丸と二の丸の間に内堀があり、堀の幅は約 11 間と推定。

二の丸は、東西 278 間 3 尺、南北 61 間 2 尺で、本丸を東と南から包むように形成している。二の丸の面積は、約 18,000 坪。主として侍屋敷が配置されている。二の丸と片町、金坂まで外堀がめぐらされている。

三の丸は、東西 82 間、南北 75 間、面積約 6,100 坪。家老級の侍屋敷が配置されていた。

からめて



城下の町割りと現在の街並み

「大館平成の地図と享保 13 年（1728）城下町復元試作図」は、小場義成が大館城下の町割に着手して 400 年にあたる平成 22 年に製作されたものである。絵図と現在の地図では縦横の縮尺が違いため、現地を確認しながら、絵図を地図に合わせる形で復元されているため厳密に当時の位置とは断言できないが、往時の姿をしのぶことができる。

戊辰戦争の火災をはじめ、度重なる大火により灰燼に帰した焼土から何度も復興を重ねてきた現在の市街地からは、城下町の様子を正確に解析することは大変難しいが、いまでも同じ方位に配置されている多くの寺院や神社、小場氏とともに常陸から遷ってきた家臣団が大館城下に配置された町名などが、城下町の痕跡を今に伝えている。

侍町(水色)

本藩から派遣された給士は、三の丸・横町・長倉町・谷地町・桜町・部垂町・近藤町・古川町・足軽町・下夕町・に居住し、大館城代の家中は、中城町・片町・裏町・向町・上町・金坂町・新金坂町・独鈷町・八幡町・愛宕町に居住した。侍町は内町とも呼ばれた。

町人町(ピンク色)

寛永 17 年(1640)の大火以降、町人町も着々と町割りが進められていたが、延宝 3 年(1675) 4 月、馬喰町からの大火により町の大半が焼け、同年 7 月から改めて本格的な町割りが行われた。これにより大町が町人町の中心となり、馬喰町・中町・新町にも町人を集め、この地域にいた農民を強制的に田町・通町・川原町・新地・下夕町に移転させた。これら町人町は外町と呼ばれた。

今も残る町(地)名の由来

内町、外町の町名多くは、現在の市街地に引き継がれて残っている。そのいくつかは、秋田に国替えになった佐竹氏とともに常陸（現在の常陸大宮市）から遷ってきた家臣団に由来するもので、それぞれが配置された侍町の町名となっている。

部垂町に居住したのは、部垂衆と呼ばれる家臣団。常陸大宮市に所在した部垂城は部垂義元居城であったが、佐竹 17 代義篤に攻め滅ぼされた。主を失った家臣は小場の寄騎となり、大館城下に居住した。部垂衆は、かつての主君であった義元を祀った部垂八幡神社を建立した。

長倉町に居住したのは、常陸大宮市長倉に長倉城を築いた佐竹一門、長倉義興の家臣たちで、長倉衆と呼ばれた。長倉義尚の二男、上平義景家が常陸時代から祀っていた御神像が、大館神明社の御神体として合祀されたと伝えられている。

赤館町は、赤館城付給人が赤館衆として小場家寄騎となり、居住したところである。部垂衆、長倉衆、赤館衆の身分は、小場家の陪臣ではなく、佐竹本家直属の給士身分であった。

[illegible]

城下町割りに残る寺社

そうふくじ
宗福寺

大館佐竹の祖、義躬が常陸小場に万松山宗福寺を建立したのが始まり。国替えの際、小場義成に随従して大館に移った。境内には、大館佐竹初代から23代までの墓がある。



いっしんいん
一心院

弘治元年(1555)小場義忠の建立が始まり。元和3年(1617)大館城代の命により常陸那珂郡小場より当地に再建。



へたれはちまん
部垂八幡神社

佐竹第14代義人の子、部垂義元(よしもと)をまつ。常陸で非命に倒れた主人を忘れない忠義の家臣団が建立した。



へんじょういん
遍照院

真言宗、久保田宝鏡院末。大館佐竹家の祈願所。慶長3年(1598)小場義成に従って小田に移り、同7年国替えで秋田に下向、同15年大館に移った。



れんそうじ
蓮荘寺

小場義成が大館城代となった後の元和元年に常陸太田より移転したとある。戊辰の戦火で焼失し、明治11年(1878)の再建。



じょうおうじ
浄応寺

小場氏入城の際、熱弁で浅利残党を説得し無血入城させた功により、立杭村より現在地に移転した。明治20年(1887)頃の再建。



あたご
愛宕神社

寛永6年(1629)大館城代義房(よしふさ)のときに建立。もとは宗福寺境内にあったが、貞享2年(1685)に現在地に移した。小場義成の奥方が熱心な愛宕信仰者であった。



ぎよくりん じ
玉林寺 (大館最古の寺院)

大永7年(1527)大館地方の領主であった浅利則頼が鳳凰山の麓に創建。のちに十狐城下へ移転し、慶長年間に現在地に移った。たびたびの大火で類焼し、昭和6年(1931)本堂、鐘楼を造営。



おおだてはちまん
大館八幡神社

(国指定重要文化財)

佐竹秋田遷封ののち、慶長15年(1610)大館初代城代小場義成が入城したおり、常陸より遷していた神位を城中に鎮安したとある。万治元年(1658)大館佐竹2代義易が今の社地に再建した。祭礼は旧8月15日であったが、新暦の採用で7月15日に改められた。戊辰の戦火を免れ、この時代の建造物としては唯一残った文化財である。



コラム

当時の八幡神社は佐竹家の氏神(お城の八幡様)で、農工商民はおろか士族さえ参拝できない非公開の神社であった。そのため、佐竹家はもちろん、国や郷土の安全や発展を祈願する神社として存在していたため、城主がいなくなって以降、今に伝わる伝承行事や民俗習慣は全くない。一方神明社は地元の神様ということで、城主・城代の参拝は特別ではあっても

珍しいことではなく、家臣らの参拝は不断のことで、元旦には登城に先立って参拝するなどしていたようである。農工商民も広く参拝する神社として続いている。

（２）大館神明社祭典に見る歴史的風致

大館神明社の例大祭は、大館大町通りを中心に毎年 9 月 10 日（宵宮） 11 日（本祭）の二日間にわたって執り行われる本市の代表的な秋祭りである。

例祭は、古くから続く神明社の御輿巡行と露店ひしめく通りを、重さ 1 トンを超える各講自慢の山車（やま）を曳き、その勇壮さを競い合うのが特徴であり、山車の上で披露される「大館囃子」が各講に共通した伝統芸能として継承されている。

大館神明社は、かつて小場義成が行った城下町割りの西端に位置し、参道からまっすぐ東に続く旧羽州街道は、祭りの中心となる大町通りから北方向に折れ、津軽方向へと向かう。

大館神明社の起源

大館神明社は大館町草創時代からの鎮守社とされているが、その年代は詳しくわかっていない。旧記（安政 5 年（1858）頃の「郷村史略」）によると、もともとは小館花道上（新地）にある古神明社（上神明社）が大館・小館の産土神^{うぶすな}であったと記録されている。また、「明治神社誌料」によれば元慶 2 年（878）頃には、既に鎮座（古神明社）と記述されている。



大館神明社

現神明社についての記録は、「大館戊辰戦史付沿革史」によると、慶長 7 年（1602）5 月、佐竹義宣侯が秋田に遷封され、その 70 余年後の延宝 3 年（1675）に神明社は現在地（下神明社）に遷され、この際に佐竹家支裔（しえい）・長倉義尚（長倉家居所から長倉町の町名ができた）の二男上平（うわだいら）義景家が、常陸時代から祀っていた同家のご神像を神明社ご神体として奉鎮座したものとある。大館神明社は、古神明社の祭神と上平家の氏神様を合祀して建立されており、佐竹西家の縁が色濃く受け継がれているといえる。

戊辰戦争の際に大館全町 750 戸が全焼したが、大館神明社はわずか 29 戸の民家と共に類焼を免れ復興の拠点となった。しかし明治 3 年（1870）9 月、再度の大火で類焼し、再建までは 6 年の期間を要した。

明治 38 年（1905）の再建事業録によれば、大館全郷から四千元余の献納金を得て明治 8 年（1875）斎藤順之助氏を大工棟梁と定めて工事を起こし、同 9 年秋に完工をみたとある。当時の米価は一石（150kg）三円五十銭ほどなので、四千元がいかに大きな額かがわかる。このほかに明治 5 年から 3 年間、全氏子が毎月五厘ずつ奉納して御神輿を建造させたと記録されている。

幣殿は 100 周年記念（昭和 58 年）で建設。本殿を後ろ側に移動して増築したもの。

- ・現在の大館神明社配置図、（明治初期の建造物を明示）

（図面製作中）山車は 8 講が境内近くに収納、5 講が各町内

- ・境内には、・・・宝物殿昭和 3 年（神輿を格納）明治 7 年作（2 代目）、初代は焼失。

大館神明社祭典の始まり

大館神明社例大祭の始まりは明らかではないが、生まれ育った土地の産土の神様をできるだけもてなしするのがお祭りの起源と考えると、古神明社の時代（878 年）からお祭りは存在していたと思われる。少なくとも現在地に遷された延宝 3 年（1675）頃には、大館神明社例大祭の元となるお祭りが始まっていたと伝えられている。

当初は、旧暦 7 月 30 日が宵祭、8 月 1 日が例大祭・神輿巡行、8 月 2 日には湯立が行われていた。明治 42 年（1909）になると、本祭の開催が新暦の 9 月 15 日に変わり、その翌年には明治天皇の御巡幸を記念して 9 月 11 日の開催になり、以降現在まで続いている。

また、山車やお神輿が練り歩く祭りの範囲は、大館城下の外町 4 町（大町・中町・馬喰町・新町）と御神体由来の長倉町までで、その運営も外町 4 町の年番で行われてきた。その後、奉納講の増加などで範囲が大きく広がり、現在は参加する講の代表者で組織する祭典実行委員会が組織され、神明社氏子会と共に祭典の安全な運営とさらなる発展に取り組んでいる。

- ・記録に残る過去の風景（例大祭の写真など掲載予定）

大館囃子（大館市無形民俗文化財・平成 13 年 8 月 29 日指定）

大館囃子は、大館神明社祭典のお囃子として、保存会の努力により受け継がれ、平成 13 年には市の無形民俗文化財に指定されている。

保存会では後継者を育て、祭典奉納行事に参加する講に正しく伝えるために、新たな譜面や DVD 画像を作成し、現代の子供たちにも伝える活動も展開している。また、伝統芸能としての大館囃子を広く伝えるために、市内外のイベント等にも積極的に出演、協力している。

大館囃子の構成

寄せ囃子：笛太鼓で演奏される前奏曲で、「これからお囃子が始まるからみんな集まれ」の意味がある。

大館祇園囃子：京都祇園囃子の流れをくむと伝えられる。踊りは扇子を持たず、「イヤサカサッサ」の掛け声とともに、山車の運行中に演奏される。



大館囃子

剣 囃 子 : 剣の舞と言われ、踊り子は扇子を右手に持って踊る。

帰 り 山 : 戦場から勇ましく勝鬨を揚げて帰る凱旋の曲と言われる。右手に扇子を持って踊るのが一般的だが、両手に持って踊るパターンもあり。締め曲としてテンポを速めながら終了する。

大館囃子の由来（文化財保護審議会の見解より抜粋）

お囃子の音や調子の古い記録は残っていないが、小野儀助日記の明治22年には、「祭りの4日前に大工の佐吉に囃子方をそろえるように依頼し、翌日に栗吉と小野吉から太鼓一つずつを借り受け、宵の宮の当日に、かれこれ7人ほどの囃子方をそろえた」とある。毎年恒例のことで、顔合わせ、調子合わせだけで本番に臨むことができたのは、お囃子に長く慣れ親しんでいたからではないかと考えられる。山車には「囃子付き」の記載もある。

また、祭典の巡行行列の記載もあり、その中に御神輿等の後に続く「鉦」や「山車」の記載もある。明治31年（1898）に馬龍講が運行した山車の姿は「京都祇園山鉦」と大変似ている（大館市史第4巻に掲載）。

お囃子の曲については、長年「花輪ばやし」の演奏を続けてきた藤井安正氏の見解によると、大変近似性が高く、特に笛のメロディーは共通する要素が強いとされる。

これらのことから、近郷近在との交流の中で伝承の内容が変化した可能性は否定できないが、保存会に伝えられているとおり「京都の祇園囃子」の系統に位置づけられる。



明治31年 大館神明社祭典の馬龍講 →

大館神明社祭典に係る組織

（氏子会・祭典実行委員会・大館囃子保存会）別紙

かつての祭典は、年番の内町4町が担当して奉納行事を運営してきたが、現在は、「神明社」、「祭典実行委員会」、「大館囃子保存会」がそれぞれの役割を担い、連携して運営する組織体制になっている。

この背景には、祭りのエリア拡大、参加する講の増大のほか、都市化による道路条件等の変化があり、祭りの神髄を無くさず、安全により多くの皆さんが楽しめるように配慮するために体制整備されてきたものである。

神事と御神輿巡行を運営する神明社氏子会

氏子会は、宮司・禰宜・氏子で組織されている。氏子会は、対象町内の代表者である常任総代で組織され、その中から5人の総代が各ブロックから選出され、全体から選出される正副会長で構成される。宵宮、本祭の神事や古くから続く御神輿巡行のほか、余興奉納奉告祭をはじめ祭典全体の神事をつかさどっている。

奉納行事やイベント全体の運営を取り扱う「祭典実行委員会」

実行委員会は、山車やみこしを奉納する23講の代表である理事で構成されている。

例祭における山車・神輿の運行を始め、神社の御神輿巡行への協力、安全運営等のために五つの専門部を設定して取り組んでいる。

大館囃子の保存伝承に取り組む「大館囃子保存会」

祭典実行委員会の芸能伝承部と連携し、各講への「大館囃子」伝承に努めている。

また、市指定無形民俗文化財である「大館囃子」を保存・伝承するため独自の活動として、各種イベントへの出演や後継者の育成に努めている。

大館神明社祭典を運営する組織

◎大館神明社氏子会 主として神事を中心に扱う

宮司	氏子会		
禰宜	氏子会長	1名	
	副会長	1名	
	総代	5名	5ブロックの代表
	常任総代		各町内の代表者

◎祭典実行委員会 主として奉納行事とイベントの運営を取り扱う

会長	1名	※山車・神輿を運行する団体の代表			
理事	23名				
	(内訳)	(山車)	有三	一成	新連
			清豊	大豊	田豊
			二丁目	馬龍	弁天
		(神輿)	四成		
			有浦	城西	水門
			中神明	長根	御坂
			南ヶ丘		住吉
					美園
監事	2名	理事会事務局	2名		
顧問	福原市長	小根前会長	佐藤文彦	佐藤文人	
		(専門部)	総務部	6名	正副部長各1
			会計部	1名	部長1
			企画運行部	8名	部長1、副部長2
			宣伝広報部	27名	部長1、副部長3
			芸能伝承部	1名	部長1
			各講責任者	実行責任者	1名
				運行責任者	1名
				警備責任者	1名

◎大館囃子保存会 大館囃子の保存伝承を取り扱う

会長	1名	(笛) 師範	4名
副会長	3名	師範代	4名
監事	2名	(太鼓) 師範	1名
		師範代	10名
		(三味線) 師範	1名
		師範代	1名
		(鉦) 師範	1名
		師範代	1名
		(踊) 師範	1名
		※その他各講に所属する準会員多数	

山車と奉納行事の変遷

山車の変遷

小野儀助日記には、明治 30 年「大豊講の山は田豊講へ行く途中、坂中にて電信へ横たわり」と記され、この頃から背の高い山車の運行に問題が起きていたことがわかる。その後さらに電柱が立ち並び、昭和 40 年代以降に訪れたモータリゼーションの時代を迎えると、人力で運行されていた神明社の御神輿巡行が自動車に変わり、奉納講の山車もトラックを利用するようになったのである。

現在の山車が登場したのは、(昭和 50 年)大豊講が建造した唐破風を四面に持つ神楽殿を模したものである。その後、昭和 51 年馬龍講、同 54 年南正講、同 55 年辨天講、同 56 年田豊講・栄講、同 57 年新連講と続き、これらが現在の山車の形態に大きな影響を与えたと考えられる(唐破風は、花輪ばやし屋台車の模倣影響とみられる)。

祭典奉納行事の変遷

明治期の記録(小野儀助日記)では、神明社の御神輿行列に鉾や飾山が続いて運行されていた。やがて自動車の時代を迎え、それでも昭和 41 年頃には神社神輿を先頭に大館駅前から曳山車パレードを行い、延々と渋滞が発生したと伝えられている。その後も交通渋滞等が問題となったようで、昭和 44 年には、祭典奉納奉告祭が馬喰町で開催され、以降神明社の御神輿巡行と奉納山車は別々に運行されるようになったのである。

それ以降、その奉納山車の運行はだんだんと変化を見せ、昭和 54 年には夜の運行が始まり、追従する山車が増えて夜の祭りへと変化を遂げる。合同運行が始まった昭和 58 年以降、だんだんと区間が延長して現在に到っている。

また、「出陣式」「田乃坂越え」「駅前競演」「祭典祝い水」などの企画が立ち上がり、神明社の神様をおもてなししつつ、参加する人々がますます楽しめるお祭りへと進化を続けている。

祭り開催までの準備

5 月頃になると修得が一番難しい笛の稽古が始まる。やや遅れて 7 月頃には太鼓や鉦、踊りの稽古も始まる。各講では保存会に師範や師範代の派遣を要請して、囃子手や踊り手の養成に余念がない。

8 月になると、囃子手たちの人数がそろい調子も上がり、お盆を過ぎると市内のあちらこちらから各講が奏でる大館囃子の音色が聞こえてくるようになる。



大館囃子の稽古の様子

56

- ・まずは囃子手たちが「寄せ囃子」を二廻し演奏する。
- ・挨拶を終え、鏡開き。乾杯を終えると、合図に合わせて全員で「勝鬨」をあげる。
- ・各講の「大館囃子」が盛大に演奏され、出発の合図を待つ。

いよいよ参加する全部の山車が勢ぞろいして大町会場を目指す。沿道にはたくさんの観客がひしめき合い、ひいきの山車を待ち受けている。

田乃坂越え 19:40

大町を前に立ちはだかるのが、「田乃坂越え」である。祭典の見せ場として昭和58年から実施しているもので、上り坂を重さ1トン以上の山車が地響きをあげて駆け上がる。

坂の300メートルほど手前にある田町交差点では、それぞれが息を整え、出発合図とともに氣勢を上げ、各講の面子と誇りをかけて一丸となって駆け



田乃坂越え

上がる。山車の上のお囃子と踊りも勢いを増し、沿道の観客からは惜しめない声援が飛ぶ。

無事に大町会場に着いた各講は、自慢の山車と踊り・お囃子の競演を繰り広げ、それぞれの地元に帰還する（午後11時運行終了）。

本祭（9月11日） 8:30

例大祭と御神輿巡行

本祭の朝は神明社の例大祭から始まる。修祓に続いて斎主が祝詞を奏上し、舞を奉納。関係者が玉串を奉り神事を終えると、「遷御」の神事を行い、御神輿巡行の準備となる。

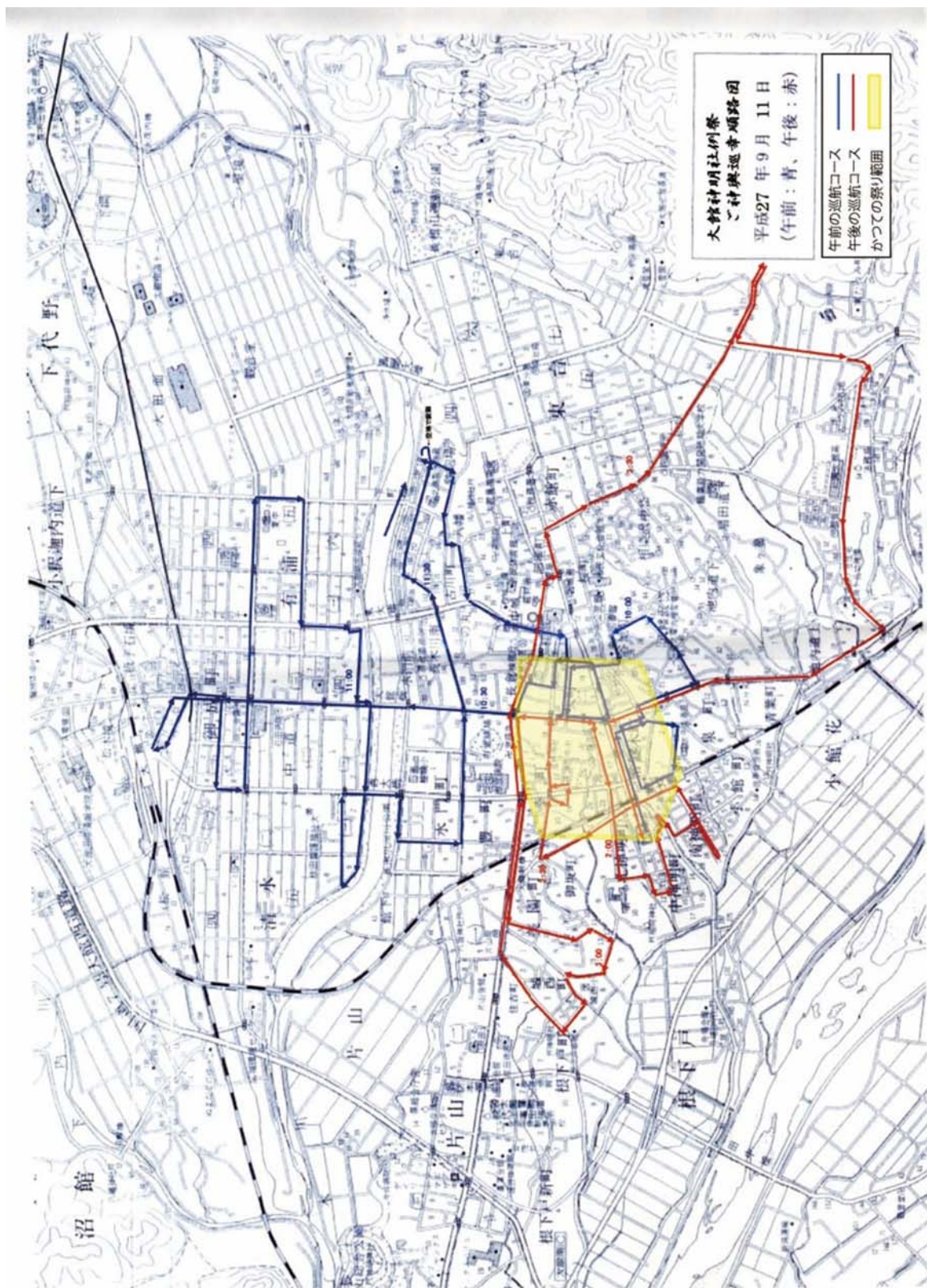
初代のお神輿は、戊辰の火災で本殿と共に焼失したため、明治7年造られた二代目である。昔は氏子たちが御神輿を担ぎ、神官が馬に乗り、牛が荷車を曳いて続いた時代もあったが、現在は巡行の範囲が広くなり道路事情も変わったため自動車の運行に変わっている。

行列の様子も、明治20年の記録では、「1 榊、2 御神旗、3 かんこう鉦、4 猿田彦命、5 御供、6 祠掌、5 神官、6 御神輿、7 御神馬、8 唐櫃、その後ろに飾山が続く」だったが、現在は、1 先導車（先触れ）、2 指揮車（猿田彦）、3 前衛車（神官）、4 神輿車（御神輿、総代）、5 初穂車という車列になっている。

御神輿行列は、古くからの習わしで、古神明社と御神体所縁の長倉町（現在のグランドパークホテル）で祭事を行い、外町4町（大町、中町、馬喰町、新町）当番町の御旅所がお昼の休憩所となる。昔は、分限者のお屋敷が御旅所となったが、現在は町内会館や飲食店を使用するようになった。

渡御の神事と現在の御神輿巡行の写真を入れる予定

全域を廻り、午後 4 時頃には神明社に帰還。「還御」の神事を執り行い、神明社例大祭の日程を終える。



山車・おみこしの運行と奉納行事の開催箇所

大館神明社例祭2015

余興奉納行事

イベント&トイレ案内図

駅前大館囃子 共演
9月11日 午後6時より
JR大館駅前

田乃坂越え
9月10日 午後7時40分頃より
二丁目～大町区間

曲げわっぱ 太鼓演奏
9月11日 12時20分より
大町交差点

祭典祝い水
9月11日 午後6時45分より
大町交差点

会場内及び周辺における
ドローンの飛行は**危険防止**
のため**禁止**いたします。

山車合同運行
 9月10日
 午後6時55分 出陣式
 午後7時15分 出発
 二丁目～新町交差点

余興奉納奉告祭
 9月10日
 午後2時より 奉告祭祭事
 午後2時30分 運行開始
 馬喰町

みこしパレード
 9月10日 午後3時より
 中町～大町区間

山車見世
 9月11日 午後1時30分より
 大町ハチ公通り

山車見世 (13:20~15:00)

それぞれ運行していた12講の山車が集合し、大町会場に詰めかけた大観衆を前にそれぞれがパフォーマンスを披露。昼の部最大の盛り上がりを見せる。



山車見世

駅前囃子共演 (18:00~19:30)

大館駅前の会場に当番4講の山車が集合し、大館囃子「寄せ囃子」「祇園ばやし」「剣囃子」「帰り山」をリレー演奏する。最近では、解禁され始めた各講のオリジナルの曲や踊りも披露している。長木川の北側に位置する講の見せ場である。

祭典祝い水 (18:45~20:30)

祭りの終わりを惜しみ、締め込み姿の熱い祭り人達が周囲から盛大に祝い水を受ける「祭典祝い水」。もともとは、田豊・辨天・馬龍・大豊の4講が始めた「水かけ」であったが、昭和61年から最終夜の企画行事として定着した。現在は8講が参加。



祭典祝い水

- ・清めの儀：お祓いと拝礼。
- ・のろし水の交換：中央で一斉に水かけ。
- ・勇み水の交換：4組で御神水をかけあう。
- ・手打ち水：運行責任者、介添え人が円陣を組み、周囲から御神水をかける。
- ・大披露：各講自慢のお囃子を披露する。
- ・大団円：当番講がお囃子を披露し、全講が応援に回る。
- ・引き継ぎの儀：次年度当番講への引き継ぎ。
- ・名残囃子：祭りの終わりを惜しんで、各講一斉にお囃子や踊りを披露。
- ・各町内に帰還 (21:00)





曳山車を奉納する各講の所在地 ●
 曲げわっぱ講は、枠外の位置

- ① 弁天講
- ② 二丁目講
- ③ 大豊講
- ④ 有三講
- ⑤ 四成講
- ⑥ 馬龍講
- ⑦ 南神講
- ⑧ 新連講
- ⑨ 南正講
- ⑩ 末広講
- ⑪ 一成講
- ⑫ 清豊講
- ⑬ 田豊講

大火からの復興と祭り

大館は、大火の町と称されたほど度重なる大火に見舞われている。戊辰戦争では大館全町の750戸が全焼。明治3年には外町314戸が全焼し、神明社の社殿も類焼。戦後は、昭和28年に公立病院、電話局、主要官庁を焼失。昭和30年に御成町一丁目の大火で大館駅を焼失。昭和31年の大火災では中心商店街と周辺を焼失し、この時の被害は罹災世帯770、損害40億2200万円であった。一面焼け野原となった市街から、復興を繰り返してきた先人たちの姿が、「大豊講祭典記録」に記されている。

『大豊講祭典記録』より抜粋（祭典HP 鷲谷氏）

昭和31年、東大館駅前に発した火は、風速10mを超える南西の風に煽られて拡がり、中心街1300戸余を灰燼に帰した。大町も風下のため一瞬のうちに全戸被災し焦土と化した。議員は悲嘆に暮れ、惨憺たる焼野原に立って一時茫然としたが、奮然と再建に立上って翌日より復興に踏み出した。引継ぎを受けた文書は焼失し、伝統の記録簿一切を永遠に失ったことは全く申し訳なくひたすら皆様にお詫び申上げる。

祭典の日まではバラックも立ち並び、曳山は無いが復興祈願の人で一杯であった。当日はバラックの店先を借りて灯籠を飾り、御神輿様に奉祝を申し上げ復興祈願の微意を表した。

翌年には、置舞台を羽後銀行空地に設置奉納。翌々年には自動車を使った舞台曳山車を奉納している。その後、周囲の講中も次々に曳山車を復活して奉納し、祭りの復活とともに復興が進んで賑やかさを増してゆく……。

この様子を見ると、間違いなく「祭り」にかける情熱が、復興のエネルギーになったに違いない。祭りを通じて私たちに、そんな先人たちの魂が受け継がれている。

大館神明社のお祭りは、旧大館の城下町が周辺の農村集落から人々が集まる町を形成・発展してきたことを背景にもち、地域の一体性を強める祭礼として、連綿として続いてきた。度重なる火災で市街地は焼失したものの、昔と変わらぬ配置にある佐竹由来の寺社と大館神明社のお祭りが、かつてこの地が城下町であったことを今に伝えている。そのことが今も昔も大館の人々の誇りであり、一年の暮らしの中で欠くことのできない祭りとして、その賑わいを高めてきた。

市街地の拡大と共に祭りの範囲が広がり、運営体制も大きく変わってきた。それでもお祭りに対する情熱は代々受け継がれ、より華やかさ・勇壮さ・迫力を増した祭りを作り上げる取り組みが続けられ、近郷近在はもちろん、ふるさとを離れた人でもこの日は帰郷し、昔と変わらぬ仲間と賑わいを共有できる大切な場となっている。

お祭りの範囲は、旧城下町を大きく超えて拡大したが、大館神明社の例祭と奉納する「大館囃子」の伝統は今も良好に引き継がれ、守り伝えられてきた伝統文化として、大館市の歴史的風致を形成している。

2 扇田神明社をめぐる歴史的風致

(1) 扇田神明社の由緒

創建と遷座

お日様ひさまと呼ぶ人も今では少なくな
ったが、扇田おうぎたしんめいしゃ神明社はその名のと
おり太陽神である天照大神を主神と
した神社である。扇田地区の東に西
向きに鎮座し、扇田の人々は、朝、
神明社の方向から太陽が昇るのを見
る位置関係になっている。一般に神
明社という名称は明治の初めに始ま
ったと言われており、以前は伊勢堂、
お伊勢様、鎮守様などと呼ばれてい

た。江戸時代の紀行家菅江真澄は享和 3 年 (1803) 「伊勢神宮をうつし奉った社」と言い、
秋田県立公文書館にある明治 7 年 (1783) の絵図面には、鎮守社と書かれている。

創建は文治 2 年 (1186) といわれており、天正 3 年 (1575) 現在地に遷座したとされて
いる。

現在地である本道端ほんどうばたの南に、伊勢堂岱いせどうたいという地名が残っている。今は田んぼとそれを造
成した宅地だが、往時は伊勢堂すなわち神明社がその地にあったということであろう。

お祭りは、創建当時からあったと思われるが、記録としては郷村史 略ごうそんしりやく (安政 5 年 (1858))
に「伊勢 祭祀六月十五日」とあるものが古い。

中世浅利氏との関係

鎌倉時代から戦国時代の間この地方を治
めたのは、甲斐に始まる浅利氏である。鎌
倉初期に比内の地頭になったと言われているが、天文 7 年 (1538) 又は 9 年 (1540) 浅利則頼のりよりが独鈷城に入
って中興の祖とな
るまでは、伝えられる事柄は少ない。浅利
氏は則頼の没後長男の則祐のりすけ、次いでその弟
勝頼かつよりが当主となった。



独鈷大日堂

明和 3 年 (1766) 寺社奉行に提出した由緒書によると、その勝頼が天正 3 年の遷座を行
ったとされている。現在の伊勢堂岱が田んぼであるところから、農地を広げることがこの
遷座の目的であった可能性がある。

また、浅利氏が奉納したと言われる両刃の短刀が伝わっている。

近世佐竹氏との関係

慶長7年(1602) 浅利氏と同じ清和源氏義光流の佐竹氏が秋田に入り、以後約270年間この地を治めた。

最初のころは、浅利氏縁故の人たちが反乱をおこし、新領主を悩ませたが、翌年には赤坂^{あかさか}朝光^{ともみつ}や小場義成^{おばよしなり}そして僧玄性^{げんしょう}の活躍でそれも落ち着いた。

一説には、荒れる地方を鎮撫するため、ここ扇田神明社に神輿が贈られたと言われている。この神輿は、佐竹氏秋田入部の際水戸から特別に移したものであり、ここ扇田を中心とした米代川南地区、いわゆる南比内^{みなみひない}を重視していたことがうかがえる。

ある時、佐竹侯が扇田神明社にお立ち寄りになり、境内にて野立ての茶会を催された事があった。その際、御屋形様たいそうご機嫌うるわしく、茶会で使用した家紋入りの陣幕をお下げ渡しになり、家紋の使用を許された。以降、扇田神明社の社紋は五本骨扇に月の丸となる。それ以前は秋田氏(安東氏)の檜扇紋であった。

また、別当扇田寺は南比内の頭巾頭^{せんでんじ}頭^{ときんがしら}(修験を取り纏めた役職)をたびたび務め、時には大頭^{おおがしら}まで務めた名門である。

戊辰戦争の激戦地

戊辰戦争の際、扇田神明社では血戦が繰り返され、社殿は扇田村の家々と共に戦火に消えた。

現在の社殿は、この焼失後佐竹義遵^{さたけよしゆき}、茂木知端^{もてぎともただ}が明治7年(1874)再建した。

現在、境内には杉の大木が林立しているが、倒木などを製材すると、銃弾が出てくることがある。それは、この戊辰戦争の時のものであり、激戦を現在に伝える証人である。



戊辰戦争の激戦地 扇田神明社

近代明治政府との関係

国家神道を目指した明治政府により、郷社となったが、盛んだった修験道^{しゅげんどう}は禁止され、別当であった扇田寺も廃止された。

明治5年(1872)の太政官布告により、神職の世襲は否定されたが、扇田の人々の粘り強い働きかけにより長岡家は宮司家として現在まで続いている。

また、明治39年(1906)の一村一社の令^{いっそんいっしゃ れい}では、ここに他の神社の御神体が移され、合祀された。

戦後の神明社

第二次世界大戦の敗戦により、内務省神祇院のもと一元管理されていた個々の神社も、それぞれ独立した宗教法人とされた。一村一社の令は廃されたものの、各小社の御神体は返されていない。^{おおいちひめ}(大市姫神社の場合、お祭りのたびに扇田神明社から御神体を御遷座いただき、終了後お帰りいただいている。)

什物

両刃短刀銘「備前国住長船七郎兵衛祐定」、佐竹侯拜領南画「がん」、茂木筑後贈茶碗「小桜」、短刀銘「大北」、黒糸威鎧「明玲(明珍?)」、岡田琴湖作「^{おかだきん こ}絵馬」、石井百畝作「^{いしいひやつぽ}絵馬」、^{ひやくねん ひやくせん ゆうせん}百年・百遷・友遷父子合作「絵馬」

(2) 扇田の成り立ち

地名の由来

菅江真澄は「扇に似たる稻田のあり(中略)さりければこの里を扇田の名に負へる」と言い、現在も真澄の言うとおり三輪社跡の背後に水路が弧を描いて流れている。現在は宅地であるが、数十年前までは扇形に田んぼが広がっていた。

しかし、真澄より前にすでに扇田の地名はあり、^{ひないせんちょう もうしならわし}「比内千町と申習候村数覚」(慶長2年(1597))によると、「扇田村 田畑一切なし家ばかり60」とある。田が無いのに扇田とはどういうことだろうか。さらにさかのぼって斉明天皇4年(658)に^{あべのひらふ}阿倍比羅夫が秋田に来た時の記録では、秋田は顎田(あぎた)とあり、腰に弓矢を下げた(田んぼとは関係のなさそうな)酋長が登場する。現在も扇田の住民は「おぎだ」と発音することが多い。秋田や扇田の田は単に音を表したもので、田んぼと関係はないかもしれない。

舟運で栄えた扇田

水上輸送は、大量の荷物を安全に運ぶ手段として、古くから重要であった。

米代川では、水深の関係で五十石船は扇田止まりであったため、重要な川港となり、市が立って大いに栄えた。市の成り立ちは不明だが、「田畑一切なし」の扇田村としては、川港と市が始まりであったと考えられる。^{くぼたりようぐんゆうき}藩内の村々を調べた久保田領郡邑記(享保15年(1730))には「市六斎(月6回開催 富村なり)」と特記されている。これは、大館城があった事の^{おおくぞきんざん おさりざわこうざん}ほか、大葛金山や尾去沢鉱山など多くの鉱山があったことも影響している。鉱石は、陸上輸送には適さないからである。

有力な商人であった^{あかしたくべえ}明石宅兵衛は、秋田藩が銀札を発行した際の札元となっている。藩内32人の札元うちの一人で、大館城下に札元となった商人はいなかった。また、同家は大阪夏の陣で、^{あかしかもんたけのり}豊臣方で勇名を馳せた明石掃部全登の末裔とされ、一族からは元国連事務次長の^{あかしやすし}明石康(昭和6年(1931~))を出している。

藍や生糸の集散地

扇田は川港であると同時に、周囲に多くの農村を抱えた、農産物の集散地であった。藍、生糸、木炭、工芸品を近隣の村々から集めた。特に生糸の取引は盛んで、春秋2回市が立ち、扇田神明社にも影響を与えた。従来の春の例大祭が春蚕^{はるこ}の市と重なるため、例大祭の日を一月ずらしたのである。以来、扇田神明社の祭典は7月16日に行われている。

(3) 地域と神明社

お祭りと佐竹の神輿

本殿に向かって右手にある、大谷石造切妻屋根の神輿^{みこし}殿には、新旧二つの神輿が並んで安置され、金網越しに外から拝見できる。一辺 30 cm 程の八角形で、ごく普通の大きさである。新しい方は昭和 43 年 (1968) に作られ、毎年例大祭時に使われている。古い方はかなり傷んでいて年代は不明だが、どちらも佐竹本家の家紋、5 本骨扇に月の丸が浮き出ている。

この地方の管轄は佐竹西家であったが、同家の家紋は丸付きで、御神輿とは紋が異なる。お城のある久保田から見れば、遠い北東の外れに、なぜ佐竹本家の神輿があるのだろうか。有力な説は、国替えにより秋田入りした佐竹氏が、騒然とした比内地方を鎮撫するため水戸より持参のこの神輿を下されたとするものである。前の領主である秋田氏が浅利氏の残党との決着をつけられないまま国を出たので、引き継いだ佐竹氏も苦労したと思われる。

さて、お殿様が御神輿を下さるということで扇田の町衆は人品骨柄^{じんぴんこつがら}卑しからざる者 28



明治 28 年扇田祭典の図 養虫山人 (土岐源吾) 画

名を厳選し、久保田へ向わせた。白^{はく}丁^{ちょう}である。御神輿を頂戴した 28 人の白丁は、船で米代川を上って扇田まで無事持ち帰り、上川^{かみかわ}端^{はた}の地蔵堂^{じざうどう}付近で陸揚げした。往復 10 日の日程であった。この時の 28 人の家は、白丁の家と呼ばれ、現在まで 20 家続いている。今でも、御神輿の飾り付けから運行まですべては白丁が行い、余人は指一本触れることが出来ないとされている。

7月14日全19町内は会所^{かいしょ}を準備し、さらに大通りに面した町内などは、御神灯^{ごしんとう}を高く掲げ、御神輿^{ごしんぐ}を迎える準備を整える。

7月15日は宵宮^{よいみや}である。午前中に各町内の会所^{かいしょ}に神明社より御幣^{ごへい}が下され、正式に会所^{かいしょ}開きとなる。会所開きをした場合は、他の町内に開設のあいさつに行かねばならない。うちの若い衆に不始末^{ふしまつ}があった時はこちらに連絡ください。また、うちの町内を山車^{やまぐるま}や子供みこしが通る際は筋を通してくださいねという通告である。町内の外交担当が二人一組で出かけ、他の町内の会所に挨拶状を置いてくるのだが、その際お酒を飲まされるので、大変な負担である。その方面に覚えのある人であっても、楽に飲んだと思われては更にたくさん飲まされるだけなので注意が必要である。戦前は人口5000人、1平方キロに満たない土地に9軒の造り酒屋があったということもあり、酒飲みの土地柄である。

午後7時から宵祭である。それに向けて子供みこし^{はやしやま}や、囃山車^{はやしやま}が神明社へ登っていく。

7月16日は本祭り。扇田の祭りは雨の日が多い。14日が太鼓（ギネスブック登録）で有名な綴子^{つづれこ}（北秋田市）のお祭り^{くだん}で、件の太鼓が豪快に鳴らされるのだが、この太鼓、雨乞いの太鼓なのである。綴子は米代川沿いに扇田の西側にあり、通常、雲は西から東へ流れている。



扇田神明社の御神輿

午前8時大祭、午前9時30分御神輿^{はつれん}発輦である。花火を合図に出発した神

輿は、各町内を廻るのであるが、この際、会所には重大な任務がある。各町内の外交担当は、町内名の染め抜かれた紅白の法被をまとい、町内名の書かれた弓張提灯を持って自らの町内の入口で御神輿をお迎えしなければならない。そして、町内をつつがなくお通りいただき、次の町内の外交担当へ引き継ぐのである。

また、新町の旧家^{あたびしょ}が御旅所と定められており、ここで御神輿はお休みになられ、御旅所神事が行われる。この家は、氏子総代^{うじこそうだい}を出す五家の筆頭を占める家柄であるが、当主が他県住まいのため、現在の総代は他の四家の中から選ばれている。もとは造り酒屋の立派な家で、白木の塀をまわしているが、年に一度この日だけ開く専用の門を開き、御神輿をお迎えする。



神明社祭典の別の写真

また、御神輿が陸揚げされた上川端地藏堂付近でも神事が執り行われる。

とぎよ
御神輿渡御の順路は次のとおり。

はつれん いちかわ しんまち なかまち おおまち ばくろうまち ひないちょう おうぎの ちょう しんちょう はちまんちょう
発輦→市川→新町→中町→大町→馬喰町→比内丁→扇ノ丁→新丁→八幡町
あさひちょう みなみちょう あけぼのちょう いせちょう みなみちょう よこちょう うらどおりまち しもかわばた かみかわばた
→朝日町→南町→曙町→伊勢町→南町→横町→裏通町→下川端→上川端
しのめちょう せんぎょ
→東雲町→遷御

御神輿遷御で神事は終了である。囃子山や子供みこしを楽しみながら、人それぞれの祭は終わっていく。

○扇田神明社例大祭の神輿渡御○

ジャジャシコ

桜が咲くにはまだ早い、日陰にはまだ雪も残る4月3日の朝、扇田の人々はバケツに水を汲み、小皿に塩を盛って柄杓と共に玄関先に置く。ジャジャシコの日である。賑やかなところはなく、仰々しい儀式もないが、数人の神職が、淡々と1日かけて1,000軒もの家をまわる行事が百数十年続いてきた。

ジャジャシコは、幕末、大火が続いた事を憂いた市川の肝煎が始めた。市川は神明社の所在地で、古くは扇田の枝郷であるが、幕末の時点



ジャジャシコ祭り

では既に家々は扇田と繋がり、一体となっていた。

当日は朝から、錫杖を持った消防団員に先導され、太鼓を打つ白丁（お祭りの白丁とは異なる）とともに神職が扇田の家々を廻る。神職は、玄関先を大麻で被い、手で塩を撒き、水を柄杓で高々と振りかける。家人は外へ出て空を見上げ、神職が撒く水を見守る。無事春がやってきたことをしみじみと感じる風景である。

なお、ジャジャシコという名前は、修験山伏を彷彿とさせる錫杖のジャラジャラという音に由来する。

比内とりの市

ウインタースポーツはあるが、雪国の冬はどうしても家にこもりがちである。家事で外出することはあっても、これといった娯楽が無い。ということで、昭和60（1985）年1月、ふるさとの冬祭り「比内とりの市」は始まった。

当時は「比内地鶏」を特産物として全国に売り出そうと官民挙げて汗を流しており、祭の軸は食鳥への感謝ということにした。

当日の朝9時、神明社でお祓いを受けた一隊が祭り会場へ向け出発する。3 m程の^{のぼりはた}幟旗を持った白丁や、馬そりに乗った稚児たちである。稚児は、この年七五三の子供たちである。隊列は雅楽の調べと共に市川・新町・中町・大町・馬喰町・裏通町・新丁・横町・八幡町の順に通過し、南町の祭り会場へ到着する。馬そりは、天候や路面の状況によるため毎年見られるものではないが、条件がそろった時、市指定文化財「^{ぶけもん}武家門」の前を通過するシーンはとても絵になるものである。



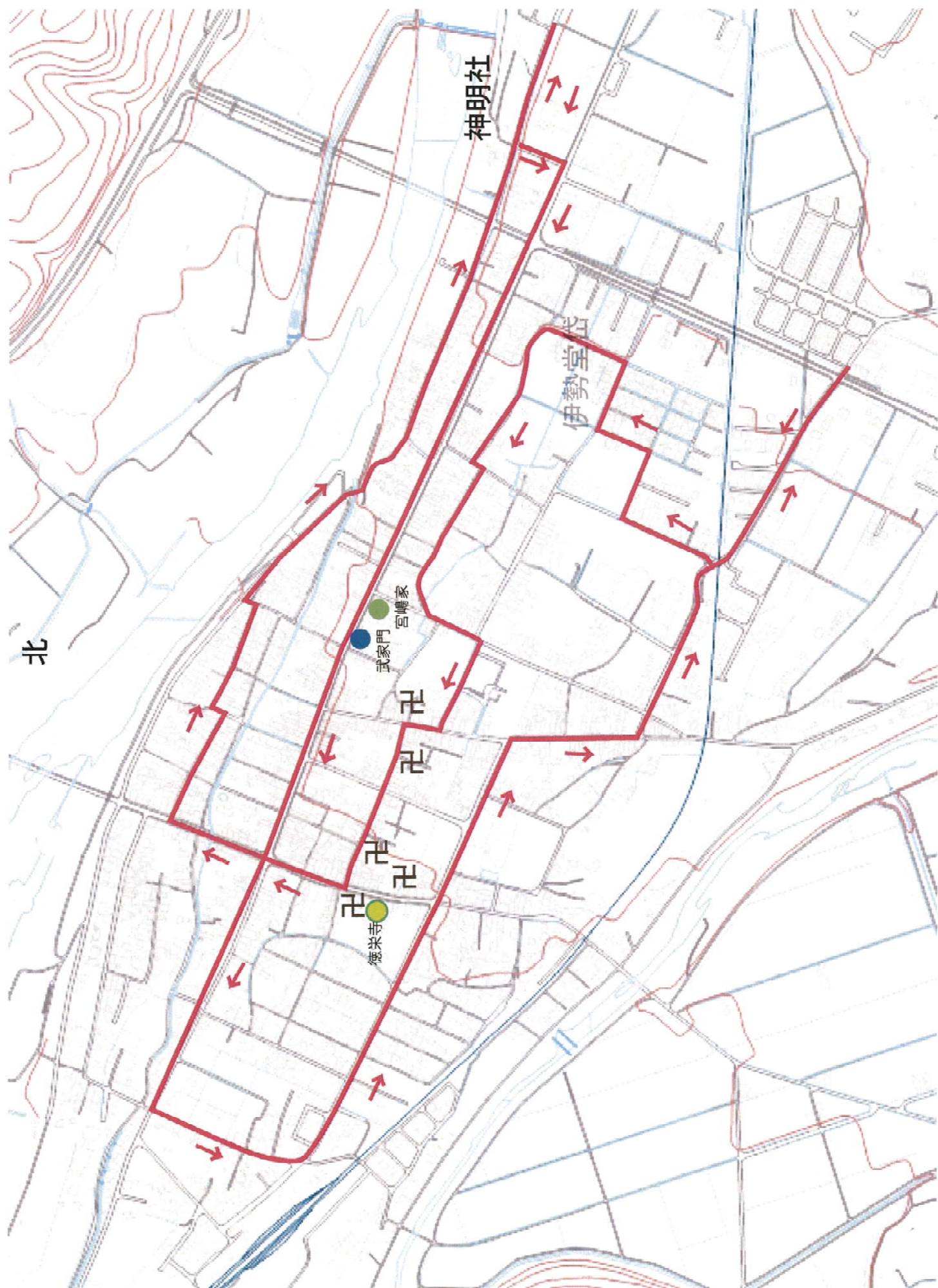
比内とりの市 神迎いの儀

到着した会場には4～5 m雪を積み上げた土台（雪が無い時は単管で足場を組む）上に木製の^{やしろ}社が設置されている。そこで行う感謝祭がメイン行事である。感謝祭では神職が現地へ出向き、祭事を執り行う。

その他お楽しみの行事は数多くあるが省略する。町おこしのイベントブームの中たくさんの祭りが生まれ、その多くは消えていった。比内とりの市は食べ物への感謝をバックボーンとしているため、ぶれずに30年以上続いている。



白丁人の町内巡行



3. 田代岳（田代山神社）の作占いに見る歴史的風致

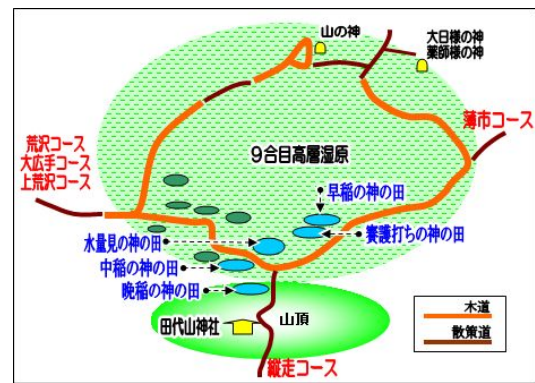
（１）自然的環境

田代岳は秋田・青森の県境近くに位置し、世界自然遺産白神山地の周辺エリアに位置し、標高1178メートル、西に連なる^{らいだけ}雷岳、^{えぼしだけ}烏帽子岳、^{ちやうすだけ}茶臼岳など1100メートル前後の山々からなる山塊は、田代岳四連峰とも呼ばれ、周辺一帯1873haが昭和50（1975）年1月、県立自然公園に指定されている。山麓周辺には樹齢200年から300年級のブナが林立し、鳥獣保護区に指定され、ニホンカモシカ、ニホンザル、クマゲラ、クマタカ、イヌワシ、スノリガモらが保護されている。

田代岳の標高千メートル付近の九合目には、大小合わせて120以上の池塘からなる大湿原が広がり、ミツガシワをはじめとする多数の高山植物（マイヅルソウ・チングルマ・ワタスゲ・イワカガミ・ツマトリソウ・アカモノ・トキソウ・ショウキラン・サンカヨウ・ハクサンシャクナゲ・ウラジロヨウラク・ミネヤマザクラ）が生育している。



（田代岳の池塘）



（田代神社位置図）

（２）暮らしと民俗

地域の住民は、田代山系周辺の山岳地帯を源とする岩瀬川、早口川、その合流する米代川流域に暮らし、水資源をもとに農業を営みながら天然の恵みである河川の鮎やウグイ、溪流魚、山地のタケノコ、山菜、木の実を得るなど田代山系の恵みを楽しんできた。また、家計の支えとなる森林資源や鉱山資源を田代山系に依存し、山麓まで敷設した森林軌道を使って木材を集め、米代川の舟運や鉄道を利用し管外に出荷した。製材や木工、鉄工などの関連産業も興り、次第に地域が潤うようになるにつれて、住民の間から生活に潤いを求めるような機運が高まり、散在する集落の中から様々な民俗行事や信仰行事が行われるようになった。

伝承され今なお継続しているものとして、田代岳の「作占い」、蛭沢集落の「獅子踊り」、代野集落の「番楽」・「ニッキ」、山田集落の「獅子踊り」・人形道祖神「ジンジョ」が挙げられる。これらは、みな田代岳信仰と同様に五穀豊穡・豊年万作といった農業の豊作祈願や日々の生活における無病息災・悪病退散などを神々に祈願して行われる。こうした意味で、自然に囲まれた田代地域は、地域に名称を用いているほど田代山への信仰心が篤く、農業を主に生活全般にまで自然神を崇拝し暮らしてきた。

(3) 田代岳「作占い」

概要

田代山神社は田代連山の山頂に鎮座し、白髭大神を祀り山神、田神、水神、作神の守護神として秋田県北部から青森県南津軽地方に至る広範な信仰圏を持つ。古くから神頼みの場として山岳信仰の対象とされ、昭和初期までは霊峰田代山と呼ばれてきた。

昔の登山ルートは、岩瀬沢からは赤倉鉾山ルートと五色滝ルートの二つがあり、共に白爪沢の尾根伝いに登り田代湿原に出た。また早口沢からは薄市沢の尾根伝いに登り田代湿原に出て山頂へ登った。現在は、赤倉鉾山および五色滝ルートは使われておらず、かなり奥まで車が使え大広手コース、荒沢コース、上荒沢コース、薄市沢コースらが主流である。青森県相馬村と結ぶ峰越林道が奥地に出て以来、田代岳の大衆化が進んだ。

毎年半夏生にあたる7月2日の田代山神社例祭日には、田代岳9合目湿原の池塘に生えるミツガシワの生育具合を見て、その年の稲作の豊凶を占う「稲の作占い」が行われる。池塘を神の田、田の苗代、田ツコと称し、稲の早生・中生・晩生の作を占うのである。この時期の田んぼの稲は、株数が決まる最高分けつ期に入り、一年の収穫量を左右する大切な時期であることから、稲の生育過程を判断する目安ともされ、地元は勿論、近隣市町村や隣県の津軽などから沢山の参拝者が訪れる。この日は草徑に稲魂（霊）の籠る日とされ、農民や篤信の崇拜者が小笹を神殿に捧げて、お祓いと豊作の祈願をなし、それぞれ持ち帰って田んぼの水口や畠にこれを押し立て豊作を祈願するのが習わしとなっている。



(作占いの様子)

田代山神社

田代山神社は、社伝によれば天正年間（1573～1591）の創立とされ、これより約700年前の貞観年中(859～863)に円仁慈覚大使が観音像を造り納めたことが県史に記録されている。この観音像は十一面観音で能代市の長興寺本堂正面に本尊として安置されている。ほかに、弘長2年(1262) 綴子神宮寺の開基による再建、建武元年(1334) 陸奥兼出羽守北畠顯家による麓の長慶金山開発稼行時の再建、宝暦10年(1760) 山師の伊多波武助による金山再興時の再建を伝え、その後も幾度となく補強改築が行われている。現在の社殿は、落雷により焼失後、翌年の昭和62年に再建されたもので、材代に青森ヒバ材が用いられ、六畳1間の拝殿の奥に「白髭大直日大神」を象った「御神体」が奉られている。「白髭大直日大神」は、近江国（滋賀県）比良の白髭神社を根本社とし、祭神の猿田彦之神と御同神とされ、山神、田神、水神、作神ともいわれている。祀ってある木彫りの御神体は、社殿と同様に焼失してしまったため、綴子神社にあ

る白髭大直日大神の掛軸を見て彫られ、昭和62年の社殿再建時に奉納されたものである。その後、平成3年(1991)9月の大型台風で、土台から上の建物全てが吹き飛ばされてしまったため、材代を拾い集め、翌年補強措置がとられ再建築された。参拝者のほかに登山客の避難小屋としても利用され今日に至っている。

山頂の田代山神社の傍らには、明治43年(1910)に建立された石造りの小祠があり、境内社として9合目前岳に薬師の大名持之神、小毘古名神を祀り、相善神社という馬場で農畜神を、浮島と称する小池で山林・木材・学問の神である久延彦之命を祀る。湿原南側にも「大日貴命」^{おおひるめむつのみこと}と「小彦名命」^{すくなひこなのみこと}と刻まれた風化しかかった自然石の石碑がある。鳥帽子岳山頂にも、昭和41年(1966)に奉納された「御神体」がある。

奉納者は、地元田代地域のみならず大館市全域、北秋田市鷹巣地域にまで及んでいることから、田代山が古来比内郡の総鎮として信仰の対象となっていたことが伺える。

作占い

半夏生の日、まず前日の早朝、神官と綴子神社の氏子7人ほどが田代岳に登り、山頂で昼食のあと宵祭りと本祭りの準備にかかる。

午後6時頃になると神官は田代湿原へと下りて行き、まず「稲作占い」の御許可願いの神事と言われる、山の神「田代山」の御神体を拝む。これが終わると、次に水量見の神の田での神事が行われる。これはその年の半夏生から秋の稲刈りまでの田の水の具合や洪水の有無を占うものである。次に稲の神の田に行き、稲がつぼみになっているか、膨らんでいるか、形が普通かを診て、早稲、中稲、晩稲のうち、どの種類が適しているかを占う。

次に、湿原の中で水深が一番深いとされる三五の池という神の田へ行き、「賽護打ち」^{さいごう}の占いを行う。賽護打ちとは、風による稲の倒状の有無を占うもので、五円玉の穴に通した和紙を羽根状に作り、水に三回投げ入れてその沈み具合を神官が瞬間的に読み取るものである。最後に、湿原の南側にある大日様と薬師様の御神体を拝んで、宵祭りの稲作占いの神事は約一時間で終了する。この御神体は「大日貴命」と「小彦名命」と刻まれた大きな自然石の石碑で、その前にある大きな丸型のテーブル状の自然石にお供物をあげてから拝む。

湿原での神事が終わると、山頂の社殿に戻り田代山例祭の宵祭り神事が執り行われる。湿原から山頂へ戻る間は、誰も神官と口を聞いてはいけないことになっている。社殿の神事は、氏子や神社関係者が参列する中、奥殿に奉られている「白髭大直日大神」を拝み、お祓いをし、のりとそうじょう、玉串奉奠の順で行われていく。宵祭り神事はこれで全て終了し、神官から今年の稲作占いの結果が氏子たちに話され、この夜、皆で雑談を交わしながら夜籠りをする。

夜が明けると、朝の7時頃から正午にかけ続々と山頂目指して参拝者が登ってくる。昔、農家にとって馬が唯一の機動力であった時代は、人馬一体となって奉納登山し、山頂の笹に細い髪の毛のような白い毛が根元に絡まっていればその笹を取って馬に食わせたという。9合目湿原に馬洗場という池塘もあり、水位の高低によってその年の用水の多寡を占ったという。

現在の参拝は、農家の人たちが山頂で一握りほどの笹とつげを採り、それを神社の中で祈祷してもらい、前日行われた宵祭の作占いの結果を神官から告げられたあと下山の途に就く。祈祷してもらった笹とつげは、家の神棚に置き、翌日になって田んぼの取水口に差しおくと病虫害の発生を防ぐお守りになると伝えられる。

下山の最後に神官は田代山神社白髭大直日大神を拝み、田代岳に連なる西の雷岳、烏帽子岳、茶臼岳そして白髭の山々の方向に手を合せ拝み、作占いの2日間に渡る全行事が終了する。

白髭大直日大神

田代山神社の祭神である「白髭大直日大神」は山神、田神、作神のほか、水神としても崇められ、田代山は雨乞いの山としても知られていた。

「白髭」の名は、田代地域の属する米代川中流域のほか、東北各地で洪水と結びつき白髭水しらひげみずの名で知られており、白髭神は洪水時に木の根に腰をかけ濁流を下るとも、事前に洪水の起こるのを村人に告げるという。こうしたことから、天空に水を湛えた田代湿原の守護神である白髭大直日大神に祈願すれば、豊饒の雨を地上にもたらしてくれるといった信仰が生まれついたのである。

古くから、この地方では旱魃の際に田代山神社へ参拝し雨乞いする風習があって、記録の古いものに、大館市花岡在住の肝煎、鳥潟扇峰が寛政7年(1795)の旱魃の年、二度に亘って田代山に登り雨乞いした『田代山道の記』が挙げられる。

鳥潟扇峰は雨乞いについて、三つの考え方があるとしている。

- ・ 山神を怒らせて雨を降らせようとする考え方。
- ・ 山神に願って雨を降らせるとする考え方。
- ・ 自分たちの嘆きを天に訴えとするとする考え方。

従来、田代山の近村の者が雨乞いをする時には、浮島のある沼へ鶏あるいは猫を殺して投げこんで帰ると記録にあることから、扇峰の言う卑俗な方法が一般的であったようだ。

扇峰は、山神を怒らせて雨を降らせるのは卑俗な心からのものだとし、自分たちは天に近づくために田代山の高山に登り訴えるのだとする。そしてこの扇峰たちの訴えは見事に効を奏し、帰路霰まじりの小雨が降りだし、感慨気に「われわれが命に替えん一タ立」と俳句を残している。

また、津軽側にも雨乞いのため田代山に参詣した記録が残っており、江戸期の平尾魯仙の「谷の響」に天保10年(1839)のこととして、百姓3人が連れだって田代嶽に参詣のため登山し、帰りに六尺もあろうかという大女に遭遇し、滝壺で水を巻き上げられ大雨となり、逃げ帰ったという話である。こうした話から、田代山の神「白髭大直日大神」は女の神とされ、地元では昔から女人禁制の山とされてきたが、大衆化するうち津軽側から女性も登るようになり、昭和60年(1985)の半夏生には女性も含めた大勢の津軽の人々が田代山に笛太鼓を持参して参拝し、山頂でこれを演奏し踊り興じたと記録にある。

(4) 民俗行事

田代山の作占いに関連し、麓の村々では定着する土地への愛着から、神社に自然神をはじめとする諸神を祀り心の拠りどころとしてきた。

神明社や八幡社とともに穀神・倉稲魂神を祀る稲荷神社、水運・山岳信仰に関係あるとされる観音様を祀る神社が多く、作神、水神、山の神といった川筋の農耕地帯の特色を持つ。

田代の御山に降る雨は、東西から流れ落ちて流域を潤しているうちに、そこに住む人々の情感を織り交ぜながら地域独特の文化や信仰が豊潤に育まれていった。

田代山の作占いと同様に、次に挙げる民俗行事は、五穀豊穰、豊年満作といった生活基盤である農業の豊作を祈願するもので、諸神を祀る神社へ奉納しその信仰を表わしている。

代野番楽

田代岳を源とする岩瀬川の清冽な流れの下流域に位置する代野集落は戸数55戸。国道7号線、田代大橋から町道を北へ約1キロの旧羽州街道沿いにあり、江戸中期に代野村として始まり約80年間村として存続後亡村し、20数年後に再興した村といわれ、この集落で伝統的民俗行事、代野番楽が今に受け継がれ踊られている。その由来は、代野村再興後、一人の旅芸人が村に立寄り、世話になったお礼に番楽を教え、それが代野番楽として今にもたらされたと言われている。

番楽は、能楽の原型であり、山伏などの修験道から起こり望夫石の伝説を素材とした物語演技で、主に日本海側では、番楽、ひやま、獅子舞と呼び太平洋側では、山伏神楽、権現舞、能舞いと呼ばれている。

以前は、近隣の仲仕田、越山、山田の集落でも番楽が踊られていたが廃絶し、現在は代野番楽一つだけとなっている。

代野番楽は、毎年元旦に代野稲荷神社拝殿において五穀豊穰、悪病退散など祈願し、奉納される。以前は、稲荷神社の境内にヤグラを組み焚火をして踊ったが、今は神社の中で踊っている。昔は今の代野会館東側、栗木岱の森羅万象の地、通称番楽岱で舞ったとされる。小正月の16日に踊るのが幕開けで、11月10日(元旧10月10日)、ムラの稲荷神社のお祭りの日に踊るのを幕納めにしていた。今は小正月ではなく元旦に踊り、11月10日は取り止めている。踊る前には、神前で御神酒を戴く。番楽は不幸ごとだけが禁忌で、家に不幸ごとがあれば、一年は踊れなかった。昭和の中頃、奉納は一時中断したが伝統行事の復活を願う地元有志により、昭和48年(1973)7月に番楽の保存会が結成され、平成7年に町の無形民俗文化財に指定された。

戦後廃れかけていた代野番楽を復活させることは並々ならぬ努力があつたと言われ、その発起人でもある佐藤六七八氏は舞いを知り得る一人として若者有志を集め陣容を整え伝授に努力された。現在、後を引き継いだ部落青年会有志らは、永代保存を願い部落総意により保存会を結成、手探り状態とはいえ、地域一丸となって芸能保存に努めている。

代野番楽の踊りは、同じ踊りを4回、四方に向かってするのが本来であり、南から始まって、東、北、それから西に移る。神社内で踊る時は、入り口に向かって進む。露払い是最初舞台を二

回まわり、それから進んでいくが、他の踊りはまっすぐに進む。露払いには手に神官が払うものと同じ幣を持つ。服装は胴着に袴、腰に刀を一本差し、頭には烏帽子をかぶり、鉢巻で押さえてある。露払いは本来、四方に向かって払うが神社内でやるようになって、三方ですましている。恵比須舞いの時の烏帽子は上のほうで折れている。

番楽には、武士舞いとドケマイ(道化舞い)の二つがあって、ドケマイには元々詞がついていたが今は忘れられ、現在演じているのは恵比須舞いだけである。他は武士舞いである。舞台に出て踊るときに、たとえばそれが露払いだと、まず「ようよう急ぎ行くほどに、ようよう急ぎ行くほどに、露払いと急ぐなり。」と唱える。他の踊りの時は、露払いの代わりに、その踊りの題名が入る。

現在演じられている演目は、次の六種類である。

- ・露払い。一人で踊る。踊りは簡単なので今は、若い人、中学生、高校生が踊っている。昔は年配の人、腰の曲がったような人が踊るものだった。舞台を清める意味がある。ある意味では簡単なようだが、厳かなものである。詞はない。
- ・一人武士。
- ・二人曾我。二人で、刀を合わせあいながら踊る。
- ・金巻き。武士と獅子が踊る。獅子を退治する話。
- ・恵比須舞い。魚を釣り上げる。一人で舞う。
- ・高館。一人で踊る。棒にかえて踊る。獅子舞い(金巻き)の前に踊るのではないかと言われた。一人武士、二人曾我も金巻きも、どの踊りも最初は扇子で、後は刀になる。

また旧来は、次の14の演目があったとされる。

- ・露払い 一種の舞台開きと挨拶の舞いである。
- ・一人武士 一人の武士が刀をもって舞うものである。
- ・金巻き 獅子と武士との対決であり、一人武士同様最後の見せ場は、刀を腹に立て回転し手に汗握る舞いである。
- ・二人曾我 一人武士を二人で舞う。
- ・高立 獅子舞いの前座で、棒を使い、舞いは一風変わった雰囲気をもっている。
- ・車相撲 二人で十字に抱き合って舞う。
- ・三馬 翁の面を用い、幕開けに舞う一種の祝儀の舞いである。
- ・翁舞 面をかむって舞う本格的な舞いであり、見る人をしんとさせる高尚な舞いである。
- ・紅葉狩り 木の槌を持った子供を肩車し、調子を取って舞う。
- ・恵比須舞 七福神の一人である恵比須様の鯛釣りを面白おかしく舞う。
- ・千才 万才を千才に置きかえ、面をつけて舞う。
- ・山神舞 刀八本を使って舞う八面六臂の阿修羅の舞いである。
- ・四拍子 舞いの中で一番スローな舞いである。

- ・根子切 爺婆がかわいい孫を鬼にさらわれる舞いである。



(代野番楽の様子)

獅子踊り

獅子舞は元来、お伊勢さんのお祓いと称し村々や家々を巡回して御幣を振るって悪魔祓い、家運隆盛、五穀豊穰を舞いにしてお祓いする行事で、秋田県内の獅子踊りは、慶長7年佐竹侯の秋田転封の際、道中の慰安に家来が踊ったのが各地に伝わり今に受け継がれ踊られて来たとされている。

・山田の獅子踊り

獅子踊りが受け継がれている山田地区は、旧大館市に隣接する旧田代町の東の端に位置し、国道7号から北へ約3キロの山田川の中流域にあって、約90戸の人家が小高い丘、北川丘陵地に蜂の巣状の集落を形成している。村の創設は今から約500年前と推測され、幾度も戦場となった土地で習慣風俗にもその名残を留めている歴史的な集落である。

北側には、田代岳、茂屋方山、東南には月山と信仰に崇められた山々があり、末広に開かれた耕地は地味肥沃で米作地帯とされ、白神山地に属する山々を源とする山田川が大きな水界をもって地域の稲作や文化発展の底流となっている。

この地区には、洞雲寺、八幡神社、稲荷神社、愛宕神社、薬師神社のほか、道祖神といわれる地像様が道端6ヶ所に祀られており、人々は様々な信仰に導かれるように寺や神社などを生活の拠り所とし、その中で獅子踊りをはじめとする伝統的文化が育まれ、大切に保存してきた。

山田の獅子踊りは豊年万作・無病息災を祈って、佐竹義宣が秋田に移封を命じられた慶長7年(1602)から踊り始められたという。また、小場義成が大館城へ入部の際、その前で山田獅子踊りを披露し、義成公から誉めの言葉を受け、山田の獅子踊りが盛んになったともいう。

一時、昭和10年代に中絶したものの、昭和22年に再興され、地元若者有志によって昭和40年に保存会が結成され、現在は青年会が引き継ぎ集落ぐるみで伝承にあたっている。平成6年5月に町の無形民俗文化財に指定されている。



(山田の獅子踊りの様子)

・蛭沢の獅子踊り

獅子踊りが受け継がれている蛭沢地区は、戸数約30戸。奥羽線早口駅より北へ約9.5キロ入った岩瀬川沿い、十の瀬山東側急峻の麓に、小さな集落を形成し、北の田代岳を源とする清冽な水は岩瀬川となってこの集落内を走り、地域の田畑を潤し、情感ある独自の慣習や民俗的文化を育んできた。

蛭沢の獅子踊りの始まりは安永年間（1772～1781）とも文化年間（1804～1818）とされ、この地の佐々木一族統領左衛門が氏神の祠堂を建立する際、先祖の鎮魂供養に奉納されたのが始まりと言われ、踊りの種類は獅子踊り、奴振り、棒使い、の三種である。獅子舞は昭和47年（1972）までは太夫制で運営していたが、人員確保が深刻な問題となり、廃れないようにするため永代保存を部落総意で強固にし、保存会を発足して後継者育成に努めている。平成6年（1994）5月に町の無形民俗文化財に指定された。

獅子踊りの奉納は、月遅れのお盆、8月13日と16日の2回蛭沢地区集会所前で披露される。昭和30年中頃までは、蛭沢稻荷神社境内で神舞い、村の南側にある墓処で墓舞、蛭沢橋近くの民家の前で館舞、と3箇所、総勢50名が獅子踊りを披露したと言われている。

獅子踊りは、神社境内で「街道下り」の囃子を披露した後、拝殿内で修祓の儀を執り行い、安全を祈願しお神酒で清めた後で始められる。

最初に「街道下り」の囃子に合わせ、棒術使、奴と行列を組み入場する。棒術使は棒振りの演技をしながら、棒を振り回し、これから舞う広場の確保である場均しを行ったあと、1本目・腰車・3本目・地ガラミ・行違・トラバシリ・マツカゼの順で棒術演技を行う。

続いて、「奴所望」と口上され、小・中学生による扇の舞（奴）が披露される。

扇の舞は、奴12種、「アヤ」6種、脇差6種となっている。

奴12種の内、「ハリクジュス」「扇奴」「落し奴」「風切り」「紅葉奴」「チラシ奴」「四

五六」の7種、綾舞は6種の内「持ち替え」、脇差は小剣を小道具として使い6種の内「廻り白羽」が踊られる。

奴の舞が終わると師匠が「獅子所望」と口上して退場、後に獅子が登場し、獅子踊り4種の内、2頭の雄獅子が雌獅子を奪い合う恋仇を演ずる勇壮な争いの舞「三ツ山」が披露され終了する。

なお、蛭沢の獅子踊りの種類は、次のとおりである。

- ・ 棒術 = 棒と刀、半棒と刀、鎌と刀、十手と刀など12種類。
- ・ 扇の舞(奴) = 扇子舞い十二種、アヤ舞い六種、脇差舞い6種。
- ・ 獅子舞い = 一ツ山、三ツ山、早橋、遅橋の四種類。



(蛭沢の獅子踊りの様子)

ニッキ

代野集落において番楽とともに受け継がれている民俗行事にニッキが挙げられる。

悪疫と凶作で亡んだ集落が享保4(1719)年に再興された際、二度と不幸に遭わないように無病息災と五穀豊穡による発展を祈願して始めた行事である。

過去に何度か中絶したことがあったが、代野の村に連続して悪いことが起こったため、ニッキの中絶に故を求め再び行われるようになった。

以前は、小正月16日の朝6時頃に行われたが、今は元日に行われ、10歳前後の二人の男児が半ズボンとシャツ姿(以前は裸)で頭に注連縄と榊(新木)をつけて、鎮守稲荷神社で参拝してから集落家々を一軒一軒まわる。墨を塗った顔で「ニッキ、ニッキ」と戸口で叫び、お初穂をもらって走って廻り、終了後は神社の庚申搭に頭の注連縄を巻き付ける。

ニッキは若木を意味し、新しい年の神の宿る木とされ、それを持ってまわることで家々に新しい年の霊を付与し祝福して歩くものであった。

ジンジョ(人形道祖神)

山田地区において、村開創以来連綿として受け継がれている民俗行事に、無病息災・悪疫退散・豊年万作を祈願する地藏祭りジンジョ(人形道祖神)があり、地区七ヶ所の村端の堂宇に男

女一対のジンジョが安置されている。

ジンジョは、地蔵に由来するものとされ、大館市内では山田地区の他に米代川の北岸の長木川支流筋、下内川筋に人形道祖神を祭る村が多く、名称はジンジョ、ニンギョ、ニンニョ、ドジン、ショウキ、ベンケイなど様々で、病魔や災厄がムラに侵入するのを防ぐためにムラの入口や出口、辻などに置かれている。

秋田県北部の人形道祖神の古い記載は、文化4年（1807）の菅江真澄『おがらのたき』に見ることができる。綴子から早口、岩瀬を通り、大館から長木川を遡り、「小雪沢というところの関屋を越えると、道の傍らに大木でもって人形を二つつくり、赤色に塗って、それに剣を持たせ、武人になぞらえたものが立っていた。これを小屋に入れて、くさひとがたを作るのと同じく、常民の疫病を避けるまじないとしており、春秋につくりかえたり、あるいは赤色のぬりかえなどをするという。」（内田武志・宮本常一編訳「菅江真澄遊覧記」）と人形道祖神について書き記し、「避疫神」とする挿絵も描いている。

山田の地蔵祭りの祭神は天照大神の御弟素戔鳴命^{すさのおのみこと}で、俗に風の神と称し、風邪にでもなれば地蔵様にお参りするのが習わしとされる。

地蔵祭りは旧暦の十月末日の前日に行われ、藁で作ったジンジョを若者が二体担いで村を回り、付いて回る人達は「送りヨ、送りヨ 能代まで送りヨ」と唱えながら練り歩く。川によって悪虫、悪病を流そうとするもので、この「能代まで送りヨ」ということばは「ムシボリ」（虫送行事）の際の詞章に類似している。

地蔵祭りの記録を記した浅利益司氏の『山田地蔵由来記』によると、昔は古いジンジョを川に流していたとされ、周辺地方の大館市長木川、下内川流域に伝わる人形を川に流す行事のカシマサマ（鹿島様）を連想させるが、人形道祖神を川に流すのは山田のジンジョだけである。現在は規制も厳しくなり水量不足もあって川流しは実施せず、祭りも春秋の2回から秋祭りだけの1回としている。

昭和60年に書かれた『山田地蔵祭由来記』の以前に、地元の田村元成氏（明治33年生）が昭和初期に著した『山田の道祖神について』があり、その中にジンジョを粗末に扱って災いを受けた人の例を載せていることから、人々はジンジョを霊験あらたかなものと信じて、戒律を守り『山田地蔵祭由来記』に記された昔のやり方に則って祭りが行われている。

地区七ヶ所の町内の宿では、祭りの前日に御神体の衣替えと称した胴体と手足の付け替えを行う。男神、女神一対の御神体の木彫の面以外を取り外して川原で焼却し、その年収穫した新しい藁で胴体と手足を作り面に取り付ける。前年のものを焼却するのは、旧年中の悪疫など人形の体に憑りついていったものを焼き払うためである。

祭り当日は御神体の魂入れが行われ、祭神にちなんだ八盃の儀といわれる神事が執り行われ、供えた御神酒を戴くことで無病息災の御利益に授かるとされている。そのため、ジンジョ祭では八皿の酒を飲むことが大事とされ、さらに八皿の酒を飲むとその家は作負けをしない、稲の収穫量が落ちないとされ、万盃飲み干せば干害負けしないという言い伝えがあり、農業の豊作祈願の

一面もあることがわかる。

神事を終わると、ジンジョの自町内巡行が行われ、太鼓・笛の囃子とともに若者たちが無病息災・悪疫退散・豊年万作を感謝してジンジョを担いで自町内を練り歩く。他町内との境界で相手のジンジョと遭遇すること、親睦を込めて和合の動作をさせたりすることがある。



{ 代表的なジンジョ (人形道祖神) }

第2章 大館市の維持向上すべき歴史的風致

4. 天然記念物「秋田犬^{あきたいぬ}」を守り育てる歴史的風致

(1) 秋田犬の歴史

日本犬で最初の天然記念物に指定された秋田犬は、上代の狩猟^{じやうだい しやうりやう}に欠くことの出来ない伴侶であった。当秋田地方^{あきたのくに}に出羽国が設置される頃から、地域の開拓と鉱山の開発が進み、群雄割拠^{ぐんゆうかつきよ}で戦乱がおこり、また他国人の流入は世情を不安にして、狩猟犬は番犬としても飼育された。

その後徳川時代には、大きく強くなった番犬で闘犬が行われるようになり、明治後期からは常設闘犬場が設けられ、大正期になってからは闘犬が興行化されて、種族的な犬質はいよいよ雑種化されていた。

このような時代、失われてゆく日本の伝統的名勝史跡及び動植物の天然記念物指定保存の世論がおこり、大正8年(1919)に「史跡名勝天然記念物保存法」が制定され、秋田犬は昭和6年(1931)7月、日本犬では最初の天然記念物に指定されたのである。

また天然記念物の指定と相まって、秋田犬を著名にしたのは、昭和7年(1932)10月、朝日新聞紙上に忠犬として報道された「ハチ公」である。

その記事は、愛犬家はもちろん日本人の胸に深く感動を与え、秋田犬も広く脚光を浴びることになった。そうして大戦中の空白はあったが、戦後は順次発展し、犬質も向上して、現在は立派な秋田犬が全国各地で飼育されている。



(天然記念物「秋田犬」)

（２）秋田犬の血脈を守る人々の活動

秋田犬保存会の設立とその運営

日本犬には、最北系・中北系・南方系の３系統があり、この内最北系（北欧から中国の一部に渡ったパレシベリア民族によって飼養された）が、最初に日本に渡来し日本犬の先祖になったといわれている。

一方、形態的には大形・中形・小形の３系統があり、大形犬の代表が秋田犬、中形犬は北海道犬や南部犬、小形犬の代表が柴犬である。

秋田犬は、大館地方が原産なので当初は「大館犬」と言われていたが、天然記念物指定が「秋田犬」となって、以後そのように呼ばれるようになった。

明治末期から大正期にかけて強犬作出のため、純粋秋田犬絶滅の危機に直面した際に、当時の泉大館町長をはじめ愛犬家の努力により、純血種探索と種族保存が図られ、保存運動として昭和２年（１９２７）には有志により「秋田犬保存会」が結成された。

こうした活動が実を結び、昭和６年（１９３１）には犬族として日本で初めて国指定の天然記念物の指定を受け、昭和７年には大館町内の純粋種１０頭を天然記念物指定犬とし、当時指定犬になると１頭３円課せられていた町税も免除された。

また、昭和１１年（１９３６）には県レベルの「秋田犬保存協会」が結成され、会長には児玉知事が就任し、７項目の「秋田犬の標準」が定められ、年刊会誌「秋田犬」の発行や秋田犬種並びに資料の展覧会、研究会の開催、忠犬ハチ公に関する記念事業の開催を目標とした。

現在、当市の三ノ丸に所在する秋田犬会館内の「秋田犬保存会」は、泉大館町長らが中心となって設立した「秋田犬保存会」からの継承であり、昭和２８年（１９５３）５月からは社団法人組織に移行後、翌年には「秋田犬保存会」と「秋田犬保存協会」の一本化協定が成立し、天然記念物秋田犬の保護、繁殖並びにその本質に基づく体形の固定化や諸要素の向上を図り、わが国の秋田犬による文化の発展に寄与するとともに、世界の犬種として海外への発展に大きく貢献している。



（大館市字三ノ丸の「秋田犬会館」）

現在「秋田犬保存会」では、秋田犬に関する犬籍、犬舎号の登録及び血統書の発行や、展覧会、観賞会の開催及び研究会、座談会などの指導育成、秋田犬の固定化保護、繁殖及び普及、会報「秋田犬」及びその他の他刊行物の発行を行っている。

秋田犬展覧会にみる天然記念物「秋田犬」を守り育てる活動

第1回秋田犬展覧会が、昭和〇年に〇〇で開催されて以来、昭和17年(1942)には、大阪府・愛知県・長野県・新潟県などからの出陳を得て、第8回全国秋田犬展覧会が大館で開催された。

また、戦後の昭和22年(1947)11月には、第11回(終戦第1回)展覧会が大館の城南小学校校庭で35頭が出陣し開催された。

その後は、城址公園である現在の桂城公園を会場に、全国規模の本部展覧会や東北北海道支部展覧会、秋田県北部展覧会が開催されている。

特に、毎年5月に桂城公園で開催される「本部展覧会」では、全国各地から自慢の愛犬を連れて大勢の皆さんが大館入りされ、楽しみにしている市民がたくさん会場へ詰めかけている。



(桂城公園で開催されている「秋田犬本部展覧会」)

戦時中は食糧難のため、大量の食べ物を必要とする秋田犬などの大型犬は、やむを得ず捕獲するよう強制された際に、飼い主や家族が山中に純血の秋田犬を隠し、必死に守ったとされている。

また、かつて血族結婚の弊害が生まれないため、他県へ贈った雄犬のもとへ、その後種族保存のため、大館から雌犬を連れていき交配をさせたという先人の苦心の積み重ねが、天然記念物秋田犬の保存に繋がっている。

なお、本部展覧会はここ大館市の桂城公園を主会場に開催されているが、秋田犬の普及を兼ねて全国各地でも開催され、平成 27 年 12 月に岡山県で第 133 回目の開催となった。

また、展覧会時の審査では、秋田犬保存会会員としての 5 年以上の経験を有し、試験や実技、面接の合格後、2 年間の研修を終えた審査員が、厳選なる審査を行っている。

さらに、「秋田犬保存会」では、「天然記念物秋田犬」を守り育てるため、標準（審査基準）を定め、保護や繁殖、本質に基づく体形の固定化など諸要素の向上を図っている。

具体的には、本質とその表現、外貌、頭、頸、耳、眼、口吻及び鼻、歯牙、胸及び腹、背腰、前肢、後肢、尾、被毛、毛色の 15 項目について標準を定めている。

また、減点対象や失格案件を別途定め審査基準を明確にしているほか、審査ガイドラインにより各チェック項目のポイントを定め資質向上と審査の透明性を高めている。

（トピックス） 忠犬「ハチ公」の物語

ハチ公は大正 12 年（1923）11 月に、秋田県北秋田郡二井田村（現大館市）大子内（おおしな）の豪農である齋藤義一宅で出生し、大正 13 年（1924）1 月に大館駅から東京渋谷駅へ送り出され、東京帝国大学（現東京大学）農学部教授の上野英三郎博士のもとで愛育され、「ハチ」と命名された。

そして、上野博士が出勤の際には、いつも渋谷駅まで随伴するのを常とした。

残念なことに、大正 14 年（1925）5 月に上野博士が急逝されたが、ハチは故人を慕って毎日決まった時間に渋谷駅前に佇んで主人の帰りを待ち続けた。

その後ハチは、上野家に出入りしていた植木職の小林菊三郎氏宅に預けられ、昭和 4 年の春、皮膚病にかかり衰弱により一命も危ぶまれたが、見事全快し渋谷駅員や付近の人々にも大切にされるようになった。



（晩年のハチ）



（改札口前のハチ）

秋田犬ハチが、広く知れ渡るようになったのは、当時に独力で「日本犬保会」を設立し、日本犬の純血保存に努めていた犬の研究家である齋藤弘氏が、「朝日新聞」に投稿し、昭和 7 年（1932）10 月 4 日付朝刊に「いとしや老犬物語、今は亡き主人の帰りを待ちかねる 7 年間」という見出

しに写真入りで報ぜられてからである。

「ハチ公せんべい」や「ハチ公チョコレート」などが方々で売り出され、昭和 9 年（1934）4 月には、大勢の方々のご寄付により渋谷駅前にハチ公の銅像が建立され、並行して大館にもハチ公の銅像建立の運動が生まれ、当初は昭和 9 年 9 月に除幕式を行う予定であったが、途中大館駅周辺の大火により時間を要した。

ハチは、故郷での銅像除幕を待たず、昭和 10 年（1935）3 月 7 日から翌 8 日にかけて亡くなったが、当時の国鉄から大館駅の用地使用許可が同年 3 月 7 日であったため、奇しき縁と当時の話題を呼び、同月 12 日に市民 80 人が当市の蓮莊寺に参列し追悼会が催された。

同年 7 月に、大館駅前へ建立されたハチ公の銅像除幕式には、上野博士の未亡人やハチ生前の渋谷駅長であった吉川氏をはじめ、千人もの市民が参列しハチを忍んだ。

大正 12 年 11 月	大館市大子内斎藤義一宅で父大子内号、母胡麻号の間に生まれる。
大正 13 年 1 月 14 日	生後 50 日で上野博士のもとに送られ、「ハチ」と名付けられる。
大正 14 年 5 月 21 日	博士が大学の教授会の講演中に脳溢血で倒れ急逝。その後 10 年間渋谷駅で待ち続ける。
昭和 8 年 11 月 3 日	上野公園で開催された犬の展覧会（日本犬保存会主催）で人気者となる。
昭和 9 年正月	「忠犬ハチ公銅像建設趣意書」が作成され、全国各地より募金が寄せられる。
昭和 9 年 4 月 21 日	渋谷駅に銅像が完成。上野博士未亡人を始め各界の名士が参加し除幕式が行われた。ハチ公もこれに参加。
昭和 10 年 3 月	尋常小学校の修身教科書二巻に「恩ヲ忘レルナ」と題してハチ公の物語が掲載される。
昭和 10 年 3 月 8 日	フィラリアで死亡。渋谷駅近くの路地で発見される。 東京帝大農学部で解剖され、毛皮は剥製にされ上野科学博物館に保存。 青山墓地の上野博士の傍らに葬られた。
昭和 10 年 7 月 8 日	大館市の大館駅前に忠犬ハチ公の銅像が建設され除幕式が行われる。
昭和 19 年	昭和 16 年からの太平洋戦争により金属回収令が公布され、渋谷・大館ともにハチ公銅像が回収される。
昭和 23 年	ハチ公銅像再建委員会が結成され、募金により渋谷駅前にハチ公銅像が再建される。
昭和 39 年 5 月	大館駅前に、ハチ公の若い頃の姿を中心とした「秋田犬群像」が建設される。
昭和 62 年 11 月 14 日	大館駅前にハチ公銅像が再建され、除幕式が行われる。

（忠犬ハチ公年表）

（３）ハチ公や秋田犬の像にみる人々の営み

ハチ公の像

忠犬ハチ公の銅像建立は、ハチの身許調べにあたった大館愛犬協会長の田山弥一郎氏や、元大館町長で大館犬保存会長の泉茂家氏らが発起し、合わせて田山氏の伯父にあたる木村泰治氏が、その後ろ盾となり当時 500 円寄贈され、大館町も 100 円を支出し、内外から寄付を募り、総経費 1,200 円をかけて大館駅前に建立し、昭和 10 年（1935）7 月 8 日に除幕式を行った。

また、忠犬ハチの話が宮中に伝わり、^{しょうけんこうたいごう}昭憲皇太后が生前のハチとの引見を強く望まれたが叶わず、この話を荒井侍医からお聞きした木村氏が、渋谷駅前のハチ公像や鹿児島市の西郷隆盛像の作者である東京美術学校教授の安藤照氏に依頼し、3 体の彫像を用意した。

この像は、縦 11 cm、横 22 cm、重さ 1.2 kg 弱のブロンズ像で、1 体は昭和 9 年（1934）5 月に東京都知事を通じ宮中へ納められ、1 体は上野家へ贈呈し、1 体は木村泰治家に現存していたものが、昭和 59 年（1984）に 50 年ぶりに公開された後、平成 27 年に大館市へ寄贈されている。

また、ハチ公の像は、「秋田犬会館・ハチ公生家・大館駅・観光案内所」など大館市内の要所に建立され、市民の心のふるさとなっている。

なお、戦時中の金属回収で渋谷駅前並びに大館駅前のハチ公の銅像が撤去されたが、いずれも戦後に関係者の努力により再建されている。

具体的には、戦後の昭和 22 年（1947）8 月、渋谷駅前には再建されたが、大館駅前の再建は著作権などの課題もありすぐには実現できなかったものの、昭和 39 年（1964）5 月に、忠犬ハチ公の若い頃の姿を中心に「秋田犬群像」が大館駅前に建設された。

またその後、ハチ公没後 50 年にあたる昭和 59（1984）年に、大館市観光協会の提唱により「忠犬ハチ公銅像再建の会」が結成され、「忠犬ハチ公銅像」の再建に向けて広く募金活動が行われ、昭和 62 年（1987）11 月に、大館駅前ハチ公銅像の除幕式が行われた。

この時には、63 年ぶりに生まれ故郷に帰ってきた剥製のハチ公も列席して、同年 2 月には映画「ハチ公物語」のロケが大館で行われ、封切り後は多くの人々に感動をあたえた。



（大館駅前の秋田犬群像）

なお、昭和 19 年（1944）に大館駅前の初代ハチ公の銅像が回収された際に、ハチ公が鎮座していた台座は秋田犬保存会本部に保存され、しばらく主を待つ状態であった。

その後平成 16 年（2004）10 月、主なきあとの台座に 60 年ぶりにハチ公像が完成し、「望郷のハチ公像」として秋田犬会館前広場に建立された。



（秋田犬会館前の銅像）



（ハチ公生家前の石像）

秋田犬の像

秋田犬の像は、市内にある「八幡神社」、「桂城公園」、「橋梁の親柱」などへ古くから建立され市民に親しまれている。

また、「公共下水道のマンホール」や「道路照明灯」、「防護柵」などに、市のシンボルとしてデザイン化され広く浸透している。



（八幡神社の石像）



（桂城公園の銅像）



（二井田大橋の銅像）

（４）秋田犬の現状と市民の活動

秋田犬の現状

秋田犬は、大きな体ながら素朴で穏やかな気性のため、長い間多くの市民に飼われてきた。

朝夕飼い主と一緒に散歩する「秋田犬」の姿は、当市の日常風景そのものであったが、昨今は住宅環境や生活様式の変化により、市内では秋田犬の飼育頭数減少が危惧されている。

海外で年々高まる秋田犬人気ではあるものの、国内でも、秋田犬保存会の会員やその頭数は減少しており、ピーク時の昭和 47 年（1972）には会員 14,199 人・頭数 46,225 頭が、昨今では会員・頭数共に 3 千を下回る状況にある。

当市の「きりたんぼまつり」や「アメッコ市」など各種イベント時には、たくさんの方々が秋田犬とのふれあいを求め楽しみに訪れており、秋田犬の血脈を守ってきた先人の苦労を無為にしないうえにも、秋田犬を継続して守り育てることが今最も重要である。

市民の活動

現在も続く八チ公にちなんだ活動として、春に「八チ公慰霊祭」、10 月には「八チ公生誕祭」を、いずれも大館駅前広場で大勢の市民と関係者が参列し毎年開催している。



（大館駅前の「八チ公生誕祭」）



（大館駅前の「八チ公慰霊祭」）

また、市の代表的な行事である「アメッコ市」や「きりたんぼまつり」などでは、秋田犬の行進やふれあいイベントがあり、秋田犬会館では秋田犬ふれあいコーナーが設けられ、遠方からおいでいただく方々はもちろん、市民もとても楽しみにしている。



(アメッコ市会場の「秋田犬」)



(きりたんぽまつり会場の「秋田犬」)

また、市内には「大町八チ公通り」や「八チ公小径」、「達子森温泉八チ公荘」、「大館八チ公スタンド」など、八チ公にちなんだ商店街や施設が多く、さらには、あきたこまちの産地ならではの「田んぼアート」に古代米を使った稲文字の八チ公が描かれるなど、市民の秋田犬や八チ公に対する熱い思いが綿々と受け継がれている。

なお、秋田犬保存会では、「歴代秋田犬保存会名誉章犬」や、「作出功労犬」を広く紹介しており、「作出功労犬」は以下の 8 頭である。

1		犬名	2		犬名
		一ノ関ゴマ			五郎丸
3		犬名	4		犬名
		清姫			太平
5		犬名	6		犬名
		玉雲			東桜
7		犬名	8		犬名
		雲丸			大雲女

(秋田犬保存会資料より)

（５）秋田犬やハチ公の縁による交流の広がり

ヘレン・アダムス・ケラー女史を通じた日米の交流促進

昭和 12 年（1937）に、奇跡の聖母こと「ヘレン・アダムス・ケラー女史」が来日され、秋田県記念館で講演会を行った際に「来日記念にぜひ忠義な秋田犬を連れて帰りたい」と語ったことから、当時秋田警察署剣道師範で大館出身の小笠原巡查部長が、郷里から連れてきていた生後間もない仔犬をケラー女史へ贈り、女史に伴われ海を渡った。

この仔犬「神風号」は、渡米 2 カ月後、残念ながら病気で死亡し、ケラー女史の悲嘆が伝えられたことから、昭和 14 年（1939）に再び小笠原氏の愛犬「剣山号」がケラー女史のもとへ贈られ、日米両国の各紙が写真入りで大きく報じ、両国の親善に大きく貢献した。

ロシアのプーチン大統領への秋田犬贈呈による交流拡大

最近では、平成 24 年に東日本大震災時の被災地支援に対する御礼と、プーチン大統領の就任の御祝いの意を込めて、愛犬家として名高い大統領に佐竹秋田県知事を通じ、社団法人秋田犬保存会のご協力のもと、当市で育てた牝の子犬「ゆめ」を贈呈した。

これは、平成 24 年（1949）6 月 18 日にメキシコで開催された日ロ首脳会談で、野田首相からプーチン大統領に対し、秋田犬を贈呈する旨を表明いただき、大統領から快諾を得て、同年 7 月 27 日午後 11 時に、モスクワ市シェレメチェボ空港貴賓室において、大統領府関係者へ秋田犬をお渡しした。

この際に、秋田県は秋田港からウラジオストク港へのコンテナ航路とシベリア鉄道を活用して貨物を輸送する「シーアンドレール構想」に取り組んでおり、今回の秋田犬の贈呈を一つの契機として、「今後、ロシアとの一層の交流拡大を図りたい。」とする知事のメッセージを発表した。

その翌年 2 月に、ロシアより秋田犬「ゆめ」の返礼として、シベリア猫がエフゲーニー・アファナシエフ駐日ロシア連邦大使に伴われ佐竹知事へ贈られ、知事は、ロシア語で「平和」を意味する「ミール」と名付け、「ゆめ」を叶えるためには「平和」が必要、古くから友好関係を築



（プーチンロシア大統領へ贈呈する秋田犬「ゆめ」の寄贈式）

いてきたロシアとの交流をさらに発展したいと表明し、知事自ら 7 匹の猫と一緒にシベリア猫「ミール」と暮らし育てている。

国内の交流と連携

国内には、秋田犬保存会会員が、各地に 6 総支部と 50 余りの支部があり、保護の輪が広がっているほか、当市の「秋田犬会館」や「老犬神社」、「ハチ公生誕地」へ訪問される方も多い。

また、上野博士とのご縁で全国のハチ公の銅像が建つ自治体や施設（三重県津市・東京都渋谷区・山形県鶴岡市・東京大学）との交流が深まっている。

特に渋谷区との交流は、近年では平成 13 年に両市区間で防災協定が締結され、平成 14 年からは、渋谷区内の学校給食で大館産の「あきたこまち」が使用されるなど様々な形で交流が続いている。大館青年会議所が主催した「渋谷・大館ツーリズム」では、大館市を会場に両方の子どもたちが一緒に農作業を体験し、一方渋谷区では、大館の郷土料理「きりたんぽ」の試食や、伝統工芸品「曲げわっぱ」の製作体験が開催されるなど、歴史や自然、文化、伝統を通じた交流が当市の目指す将来像である「匠と歴史を伝承し、誇りと宝を力に変えていく『未来創造都市』」につながっている。

戦前・戦中・戦後の厳しい時代に、子供や孫の世代へ秋田犬を守り育ててきた先人の偉大なる先見力と深い情愛の足跡と、人間側の生活の都合で制約や尺度を秋田犬へ求めてしまう現状を想う時、人間と共に歩んできた秋田犬の道程は、私達人間社会の縮図でもある。

⑪城址の土居や緑の保全
(急傾斜地崩壊対策事業・秋田県と連携)
長木川方面から城址を望む景観を保全する
ため、急傾斜指定の斜面を保全し、緑でつな
ぐ杜の城を構築

歴史的風致維持向上計画 【重点区域】(案)

A-②市道城南古川町線、上町金坂線、金坂後4号線、八幡神社線の道路美装化
【街なみ環境整備事業】
(公共施設の修景整備メニュー)
城址公園～遍照院～八幡神社までを繋ぐ
道路の美装化や街路灯を整備し、歴史的資源の回遊性を向上



街なみ環境整備事業 整備構想図【桂城公園】(素案)

資料3-2(関係者と協議中)



【大館市全域におけるソフト事業概要(素案)】

- (1)歴史的町並み調査事業
- (2)歴史的資源周知サイン事業
- (3)まち歩きマップ作成事業
- (4)趣のある風景・建物ガイドブック作成事業
- (5)無形民俗文化財活動支援事業
- (6)大館曲げわっぱ伝統工芸支援事業
- (7)秋田犬ふれあい交流及び種の保存支援事業
- (8)案内ボランティア及びガイド育成事業
- (9)地域応援プラン事業

歴史まちづくり地区座談会の内容について(抜粋)

資料 4

【11月分】

NO.	開催日時	地区	参加者数	地区からのご紹介	ご意見・ご要望
1	平成27年11月11日 午後6時から	下川沿	17人	①浅利家の家臣だった佐藤家は内村の屋号として、現在で21代目である。 ②江戸から明治までは、宿屋が4～5軒があったそうだが、現在は屋敷跡も無く、イザベラ・バードが泊ったという宿帳も残っていない。 ③小林多喜二、安倍弥吉、小林要助、鎌田茂治の個人名の碑が建立されている。 ④川口獅子踊りは、400年以上前より行われており、昭和15年に一時途絶えたが、昭和49年に保存会により復活している。	①奴踊りは川口小、獅子踊りは下川沿中の生徒が踊り手として取り組んでおり、また衣裳等は補助を受け整えたが、伝承には保存会の指導者の不足が大きな課題である。 ②小林多喜二生誕の地碑を遠方から訪ねてくる観光客に対して、石碑周辺の整備や生誕の家に案内板を整備してほしい。 ③城下町の町割りの名残がある町名を住居表示に変更せずに残していただき、町名が分かり歴史を感じれる看板を設置してほしい。
2	平成27年11月17日 午後1時半から	矢立	11人	①羽州街道の一里塚跡が4箇所、矢立廃寺跡などの寺跡が3箇所あり、また各町内には人形道祖神が祀られるなど県境の要衝の関係で歴史的資源が豊富である。 ②矢立峠周辺には古い歴史の道(明治新道など)やSL三重連の旧国鉄のトンネルや橋脚が残るほか、天然秋田スギを国道から眺めれるのは珍しい。 ③400年前から師匠から伝わってきた粕田、白沢、松原の獅子踊りや粕田酒こし舞の4つの保存会があり、後継者を育成しながら、活動を継続しております。	①羽州街道を案内するにあたり、市道や国鉄跡地において、景観を妨げるものが存在しており、交渉手段や予算確保が必要な整備に対し、市の援助が必要と考える。また点在する歴史的資源へ同色、同形など統一性を図った案内板を設置してほしい。 ②若い人の流出や高齢化により、獅子の踊り手や厄除けの人形道祖神のわら細工の作り手が不足しており、今後継続していけるか不安である。 ⑥トレイルガイドに紹介したルートについて、安全な登山ができるよう整備してほしい。
3	平成27年11月18日 午後3時から	長木	16人	①秋葉山中腹にある沼の窪神社ですが、水が枯れない沼が存在し、東二ツ屋、宮袋町内で旧暦の3月25日に農耕馬を祀る例祭を継続している。 ②長木川流域に沿った雪沢地区において、古くから鹿島太鼓が伝統行事で継承しており、一度途絶えたが有志により復活している。 ③旅客であった当時の小坂鉄道は、長木溪流沿いで四十八滝や夫婦岩が存在し、また窓が額縁になり油絵の中を走っているような紅葉美を誇る名所である。	①行政だけではなく、地元において長木溪流の自然を残す会などを発足させ、出来るところからの活動を模索するべきと考える。 ②雪沢産直前に秋田落発祥の地碑が建立されていることから、近くに小さい落の畑は存在するが訪れたお客が目を引くような形にしてほしい。 ③長木溪谷は樹海ライン沿いであり、1年を通して自然を楽しむことができ、温泉を含めた観光的要素があることから、景観にも配慮してほしい。
4	平成27年11月18日 午後6時から	二井田	12人	①忠犬ハチ公生家への案内板を3ヶ所に設置した。 ②藤原泰衡の関係で、平泉の中尊寺から蓮の花を株分けしてもらう約束をしている。 ③錦神社のお祭り(毎年旧9月3日)には、中尊寺から使者が来ている。 ④温泉寺のお経堂は、文化財の価値がある。	①他県等から忠犬ハチ公生家へ来る方々に、わかりやすい案内板等を国道や県道脇等に設置してほしい。 ②錦神社で、中尊寺から貰う蓮の花を育てたいので協力してほしい。 ③歴史を学ぶ会等を市内各地で開催してほしい。 ④安藤昌益、一関家の歴史も盛り込んでほしい。
5	平成27年11月19日 午後1時半から	釈迦内	17人	①温故知新の会で活動している地域の歴史起こしをして、釈迦内の人に釈迦内の事を知ってもらって、歴史の保存や継承の機運を高めたい。 ②釈迦内地区のご案内地図、パンフレット、唐糸姫伝説等を作成した。 ③羽州街道の7ヶ所に標柱を設置した。 ④大山(松峰神社)のスギ並木や祠は、整備して大切にしている。 ⑤実相寺には、北条時頼の彫った釈迦像が祀られている。	①芝谷地の案内板、トイレ、遊歩道を再整備して、観光に繋がる取り組みをしてほしい。 ②羽州街道は、萩長森の麓を通っているが、道が悪いので、整備が必要である。 ③行政だけではなく、市民の歴史に詳しい人やノウハウをもった人を参画してはどうか。 ④市内の各町内にアンケートをして、意見を反映していくことが必要である。 ⑤範囲が広いので、中間報告で詳しく確認したい。 ⑥風致として、松峰神社の活動もある。
6	平成27年11月19日 午後6時から	上川沿	11人	①山館集落の名前の由来は、浅利則頼の家臣の山館刑部(おさかべ)が、現山館神社の位置に城を構えたことから、名残として付けられた。神社には大木から彫られた大きな馬の彫刻があり、農業が盛んなため、馬を大切にしたいと思われる。 ②200～300年の伝統がある池内地区の奴踊り及び獅子舞は、町内の大人の男性のみで八幡神社祭典日の十五夜に途絶えては復活を繰り返して行われていた。現在は町内のみでは踊り手が不足なため、上川沿小児童が町内の垣根を越えて、活動している。	①根下戸地区は3つの神社があり獅子頭は存在しているが、どのように踊ったか、どのようにかぶったかも分からないのが残念である。 ②復活を遂げた池内町内の伝統芸能は、上川沿地区の方々に感動をあたえており、地区の協力を得てぜひ継承していってほしい。 ③佐竹北家の角館より、佐竹西家の大館が石高が多かったことを、この機会に市民が誇りに思えるような計画づくりを期待している。
7	平成27年11月20日 午後1時半から	十二所	13人	①老犬神社は、400年前より毎年4/17に例大祭が開催され、また忠犬シロの物語にあるマタギの猟の免状が巻物として保存され、全国各地から愛犬家が参拝されております。 ②三哲神社は、340年前に十二所での事件で亡くなった人物が祀られており、年1回の例大祭のほか、二戸出身であることから現在も交流している。 ③猿間丹内様の公園を地域応援プランで整備したが、各町内で連携して整備すればもっと魅力あるまちづくりができる。	①三哲山と曲田の淡島様は恋中で、昭和40年頃まで淡島様の近くに桜並木があり、青空の下に天女が舞い降り、お参りすれば必ず結ばれる物語を繋いでほしい。 ②市内全域に誇れる歴史的資源が存在しているので、観光バスルートに組み入れるなど、市がもっと宣伝すべきと考える。 ③地区座談会に参加して、各町内にある神社の保存の課題や、また、鳥居はプラスチック製で補修した事例など参考となったので、地区全体で継続して開催してほしい。
8	平成27年11月21日 午後1時から	花岡	12人	①明治時代に鉱床が発見されてからの鉱山文化があったが、建造物等はほとんど残っていない。周りの景色も変わっている。 ②鳥潟家や鳥潟会館、庭園、記念碑等の貴重な歴史や建造物がある。 ③5月16日に統一祭典を行っていて、こども神輿等もやっている。 ④各町内ごとにそれぞれ祭りがあり、繁沢地区の活動が盛んである。 ⑤獅子踊りは、休眠としているが、復活は厳しい。	①各町内の行事等は、この場で全部紹介できないので、改めて取りまとめをしてほしい。 ②郷土史会等で本を出しているので参考にしてほしい。 ③鉱山文化の歴史を知っている人がいなくなっているが、資料や写真は残っているので、取りまとめた産業博物館等を検討してほしい。 ④花岡城跡等の標柱を設置して、平和記念館までの周遊ルートを計画するのもいい。
	小計(11月)	8地区	109人		

歴史まちづくり地区座談会の内容について(抜粋)

【12月分】

NO.	開催日時	地区	参加者数	地区からのご紹介	ご意見・ご要望
9	平成27年12月10日 午後1時半から	比内地域	20人	①かつての道路事業で、八幡町交差点にあった蓑虫山人が作庭した大沢邸の貴重な庭園や立派な蔵が跡形も無くなり、町民の記憶からも薄れてしまい残念である。 ②独鈷囃子は、後継者不足のため東館小のふるさとクラブで募集しているが、時間が限られ技を教えるのが厳しく、比内とりの市などの行事で披露できない。 ③扇田神明社祭典は再来年で650年を迎えるが、若い世代の関心がなくなり、また夜店の賑やかさが無くなるなど祭りの存続が厳しく、将来の地域のまとまりが不安である。 ④神明社に明石文治が扇田に道場を開設した当時のいきさつを記した主文がある。	①安藤昌益の「自然真営堂」を発見した狩野亨吉は有名で全国で展覧会が開催されている事から、生家があった大館において、もっと光を当ててほしい。 ②学校の授業の一環だけでは子供のみの活動となるため、親や青年団を抱き込んで興味を持てるよう、地域の機運が高まるような取り組みを実施していただきたい。 ③片貝家ノ下遺跡が注目を浴びているが、1100年前の十和田噴火のシラス灰の30mの断面が独鈷の県道脇に存在しております。今後も歴史の宝物がたくさん出てくるのを期待している。
10	平成27年12月11日 午後5時半から	真中	12人	①鹿角街道は十和田噴火の泥流が流れた位置に存在しており、シラス台地による恵みで良質なお米ができる。また、板沢一里塚、三浦のけら木森一里塚は一对で存在しており貴重だったが、現在は板沢のみ一对で残っている。 ②出川のケヤキは樹齢1100年で地区の御神木として、現在も若い世代が中心となり、しめ縄造り、お祭りも続けており、町内のまとまりが保たれている。コブの形が乳房に似ており、女の神様を祭ってるのは珍しい。板沢八幡神社、板子石神社のケヤキとは兄弟分である。	①地域の方が観光客に対し積極的に案内や説明することが一番の観光PRとなる。トイレや休憩所などを地域の力により、管理することで愛着が高まると思う。 ②戊辰戦争で戦死し埋葬されていた所の墓石がいつの間にか無くなっていた。無くなれば、記憶から消えてしまううえ、言い伝えが出来ないのが残念である。 ③施設は年月を重ねるごとに補修が必要となってくるので、地域応援プラン事業などの支援を検討していただきたい。
11	平成27年12月14日 午後1時半から	田代地域	31人	①田代岳は県立自然公園に指定され、山頂の田代山神社には白髭直日大神が祀られ、薬師山も兼ねておりアメッコ市の飴は菓として伝わっている。半夏生に行われる作占いは、池唐に笹に一文銭を付け沈み具合で稲の出来を占っている。 ②代野番楽は290～300年前に旅芸人より伝えられ、昭和35年に休止、48年に保存会を結成し復活したが、少子高齢化で伝承に苦労している。代野ニッキは新しい木、めっき(滅鬼)のなまりで、村で悪い病気がはやった時に始まり県内で代野のみ継続している。 ③蛭沢獅子踊りは250年前より五穀豊穰、無病息災のために始まり、8月13日に奉納している。越山地区の協力も得て踊り手不足を解消し活動を継続している。 ④山田獅子踊りは佐竹公を家臣が慰めるための奉納とされるが大火により文献が無い。6年前に東京在住の方も含め六本木で披露、また3年前には新たな演目を復活させた。	①田代岳、雷岳、烏帽子岳の三連山に全国から多くの登山者が来るため、また宇宙技術を支えるロケット燃料燃焼試験場や長慶金山も周辺にあることから、登山口へのアクセス道の整備、山頂への簡易トイレの設置を検討してほしい。 ②坂地地区には煉瓦工場が存在していたが、名残は早口駅の脇にある油庫だけであり、また地域の活性化に大きく関わった田村鉄工所跡も保存や標識を検討してほしい。 ③早口貯木場はかつて日本一の材木貯木量を誇っていた、また森林軌道は田代全域を網羅する形で整備されていた事について記録として残してほしい。 ④高陣場から見下ろすと羽州街道や戊辰戦争をしのぶ事ができることから、地域の力を借りて散策路を整備して欲しい。また矢石館遺跡から出土した石棺は県立博物館へ保管されているが、発掘箇所は現在田んぼで1枚の看板のみなので検討してほしい。
12	平成27年12月16日 午後1時半から 午後6時から	旧市内	31人	①徳川家康が愛読した吾妻鏡によると、源義経を自害に迫りやった藤原泰衡が源頼朝から逃れて河田次郎を頼り辿り着いた贅ノ柵の正確な場所が認定されていない。平泉の藤原家の滅亡により公家政治から武家政治へうつる舞台となった大館比内は日本の通史において重要なターニングポイントである。鎌倉幕府から慶長3年まで甲斐国の浅利氏が経営することになったが、比内浅利氏と檜山安東氏との間で、おなり騒動が起こり、五大老五奉行で評定が行われたことは、後に起きた関ヶ原の戦いの東西の色分けに通じている。 ②先人を顕彰する会は、大館で生まれて世のために自分の生涯を注いだ3大先人(安藤昌益、狩野亨吉、小林多喜二)の顕彰するために発足し、文化、芸能、スポーツなどで活躍した258名の先人を顕彰し、大館の人物人名事典を刊行するなどの活動をしている。 ③大館神明社祭典は、1675年に古神明社の祭典として旧暦の7月30日夜宮、8月1日例大祭みこし巡行、8月2日湯立で3日間でしたが、明治43年からは明治14年9月11日の明治天皇巡行にあわせ9月11日の例大祭開催となり現在に至る。以前は高さ3～5m程の鉾であったが、道路の電線により通れなくなり、現在の形の町内の囃子山車の巡行となる。山車運行の安全を図るため点検をお願いしているが、台車が古いなど年々維持管理費が高んでいるうえ、若手の参加が減っている。 ④大館囃子は演奏者が少なくなったことから昭和38年に保存会が発足し、神明社祭典前には練習会や各講への指導を継続し、平成13年に市無形文化財に指定されたが、近年は保存会の会員が少なく、市内の他行事への参加は厳しい状況である。	①大館で生まれて育った偉大なる先人が多数おり、その方々により歴史や建物が構築されたことから、顕彰館の整備を検討してほしい。 ②三ノ丸周辺の石田ローズガーデンは日本知識層に影響を与えた狩野親子の生家跡で全国的に有名なため偉業を学ぶフィールドワークとして整備してほしい。 ③神明社祭典は9月11日に開催しているが、平日だと動員数が少なくなるため、土日の開催および祭典に参加しやすい地域環境づくりを目指してほしい。各町内の山車は老朽化が著しく維持管理費がかかるため、継続できる支援体制の整備をしてほしい。 ④城下町の名残がある町名の由来が分かる説明板があれば、身近に歴史を感じられ、また愛着がわくので、城址公園の整備と関連づけてほしい。また、点在する歴史的資源を桂城公園(城址公園)から徒歩で散策できるようにネットワーク化してほしい。 ⑤大館に来れば、天然記念物である秋田犬に触れられると期待して、全国から来る観光客が多数いることから、秋田犬保存会と連携して集客に繋げてほしい。また高速交通網や情報伝達を整備されていることから、街の観光案内の拠点づくりを期待する。 ⑥先進地の事例や観光客の意見を参考し、外からの目線でアイディアを取り入れることにより、大館の良さが実感したり新たな発見に繋がる。 ⑦大館は鉱山や林業により繁栄したことから、閉山等により人々の営みが無いので歴史的風致には該当しないが、若い世代に受け継ぐべきと考える。 ⑧天然記念物のザリガニ生息地も宅地化により絶滅が危惧されていることから、大館が誇る大事な資源として保存を考えてほしい。
13	平成27年12月16日 午後6時半から	雪沢	9人	①鹿島祭りは旧暦6月1日に無病息災のため藁で作った人形を舟に乗せて流す。祭りの時にたくさん鹿島太鼓は地区の囃子芸能で、現在は小中学生に伝承している。 ②雪沢地区の各集落の入口に鎮座する道祖神は木彫りで造られ、肌が赤く塗られているのは全国的にも珍しい。 ③羽保屋山の山頂からは市街地が一望できるなど、市民には知られていないが、全国から登山者は訪れている。	①樹海ライン沿いには針葉が黄色いアオヤジロの木、大明神の明神岩など風景を楽しめるポイントがあるので、案内板の設置や、観光バスが停車できるスペースがほしい。 ②鹿島太鼓の膜が破けているが、張替には費用が高いため修復できず、練習用にも使用できない状況が続いており、また羽保屋山の山頂神社にある掛け軸も傷んできているので支援策を検討してほしい。
	小計(12月)	5地区	103人		
	合計	13地区	212人		

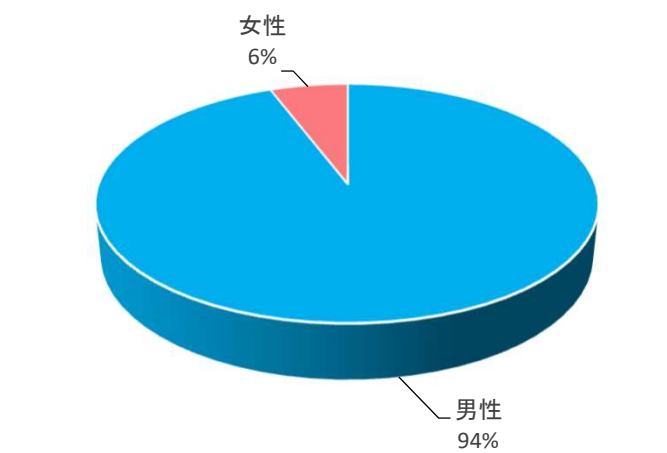
『歴史まちづくり』に関するアンケート 調査結果

資料 5

(1)実施期間 平成27年11月11日 ～ 平成27年12月16日
(2)実施方法 各地区座談会において、アンケートを実施。
■コメント総数 189人

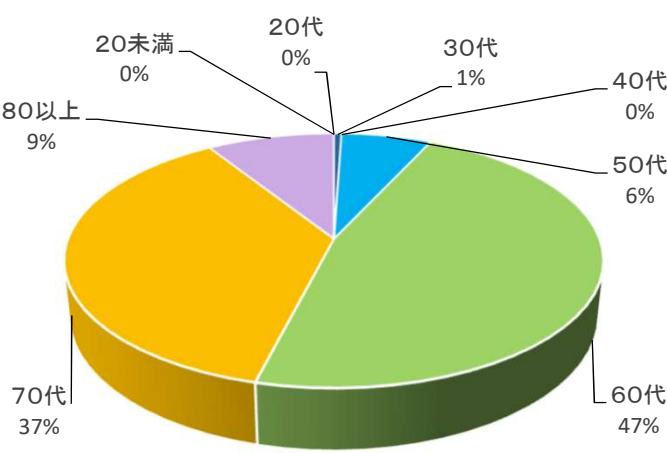
1. 性別

	人数(人)	割合(%)
男	178	94%
女	11	6%



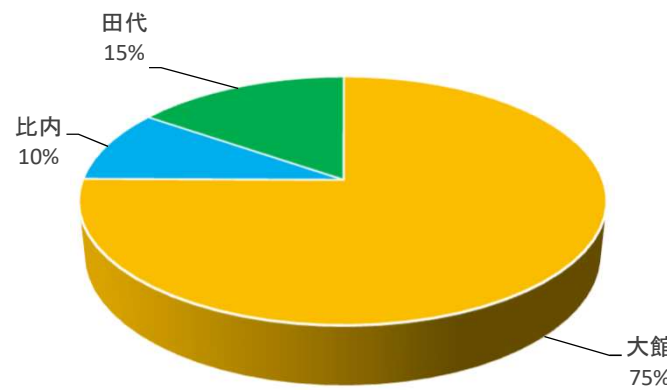
2. 年齢

	人数(人)	割合(%)
20未満	0	0%
20代	0	0%
30代	1	1%
40代	0	0%
50代	12	6%
60代	89	47%
70代	70	37%
80以上	17	9%



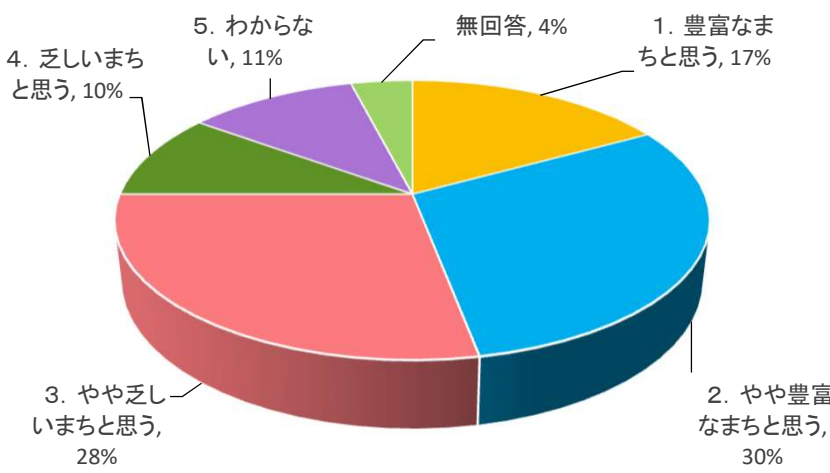
3. 地域

	人数(人)	割合(%)
大館	142	75%
比内	18	10%
田代	29	15%



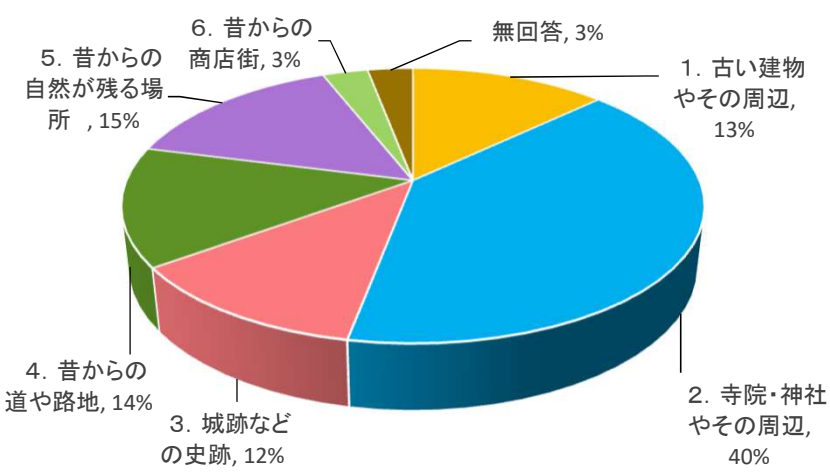
問1 あなたは、大館市は歴史的な資源が豊富なまちだと思いますか。
あてはまるもの1つに○をつけてください。

内容	人数(人)	割合(%)
1. 豊富なまちと思う	32	17%
2. やや豊富なまちと思う	57	30%
3. やや乏しいまちと思う	54	28%
4. 乏しいまちと思う	19	10%
5. わからない	20	11%
無回答	7	4%



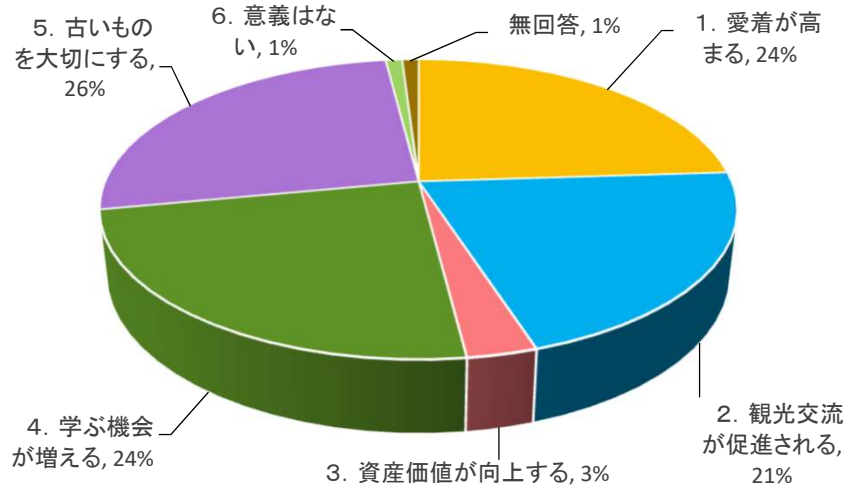
問2 あなたがお住まいの地域において、歴史が身近に感じられる場所は、どのような場所ですか。
あてはまるものすべてに○をつけてください。[複数回答]

内容	人数(人)	割合(%)
1. 古い建物やその周辺	44	13%
2. 寺院・神社やその周辺	138	40%
3. 城跡などの史跡	42	12%
4. 昔からの道や路地	48	14%
5. 昔からの自然が残る場所	55	15%
6. 昔からの商店街	9	3%
無回答	9	3%



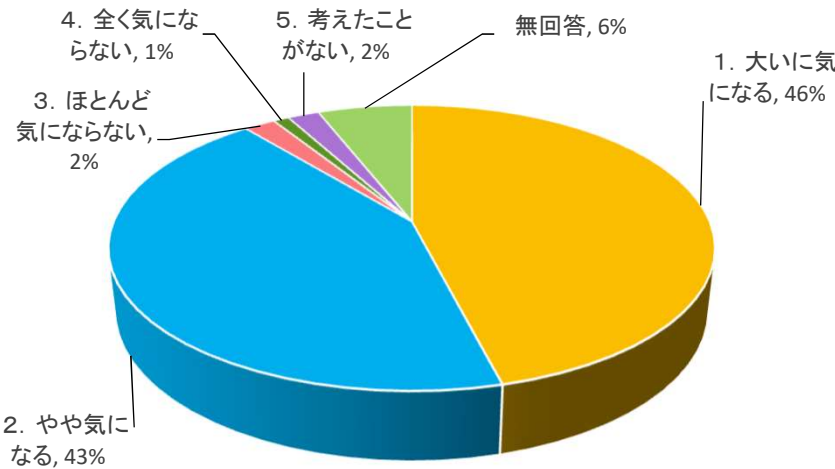
問3 あなたは、歴史的な地域資源を活かしたまちづくりには、どのような意義があると考えますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。〔複数回答〕

内容	人数(人)	割合(%)
1. 愛着が高まる	110	24%
2. 観光交流が促進される	96	21%
3. 資産価値が向上する	12	3%
4. 学ぶ機会が増える	109	24%
5. 古いものを大切にする	118	26%
6. 意義はない	2	1%
無回答	5	1%



問4 大館市の城や神社、仏閣などの歴史上価値の高い建造物や、工芸品や祭礼行事などの伝統を反映した人々の営みが減少していくことをどのように思いますか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

内容	人数(人)	割合(%)
1. 大いに気になる	86	46%
2. やや気になる	82	43%
3. ほとんど気にならない	4	2%
4. 全く気にならない	2	1%
5. 考えたことがない	3	2%
無回答	12	6%



問5 大館市の歴史上価値の高い建築物、樹木、文化、風俗・慣習などについて、未来に残すべきものをご自由にお書きください。なお、既に失われた、又は失われるおそれがあるもので、お気づきの点があれば、ご自由にお書きください。

自由記入欄に寄せられた主な意見(抜粋)	
1	建築物、風俗、慣習等は、未来に残すべき。地域の芸能文化は、地域活動の指導者と連携する。
2	神明社祭典を一神社の祭りではなく、大館の祭りとして、盛り上げてほしい。
3	矢立峠散策路及び道の駅の充実、整備。花岡事件関連資料。
4	大館曲げわっぱ職人の育成。小坂鉄道軌道跡を延長して利活用する。
5	八幡神社と周囲の樹木、北側流域が一望できる。石碑は風化が著しいので、案内板が必要。
6	比内、花矢、田代の祭りや踊り。学校の校歌と応援歌。地区の方言。地域名や町名の由来。
7	桂城公園の柳、十二所の天空の松、松峰神社の杉並木、岩神貯水池の桜、東台～長根山のポプラ並木、長木川堤防の桜等。景観を美しくするという見地から、是非保存してほしい。
8	大館市内の古い遺跡等は、大火によりほとんど焼失しているが、昔からの町名は残されている。
9	祭囃子と庶民のくらしを無形文化財に形成する取り組みをして、地方再生に結びつける。文化財保護のチームだけでなく観光課、教育委員会と連携を強化すること。
10	安藤昌益、狩野亨吉、小林多喜二等の顕彰、史跡保存にもっと力を入れるべき。
11	地域の長老と言われる方に聞き取りをして、失われるおそれがあるものを確認するべき。歴史まちづくりは、むしろここから始めなければならない。
12	浅利氏から佐竹氏に至る城主の変遷、大館の変遷がわかるような一連の表示、施設を大切にしてほしい。浅利氏の居城も歴史的価値があり、もっとクローズアップする必要がある。さらに独鈷城の出城だった西館や山田等、各地との歴史的なネットワークもある。
13	広報等で知られているものの他に身近に地域にあるものを掘り起こすことが必要。
14	市の銘木、庭園の保存。貯水池周辺の一万本桜は、もっと手入れをするべき。
15	過去、現在を知り、将来を作るため、地域の石碑や神社等を継承する人材や組織の育成が必要。
16	大館駅前を再開発するときにハチ公像のスペースを広げて、もっと安らげる空間にするべき。
17	歴史的な建物は、ほとんどないが、過去の歴史的事実を、子供たちにも学んでほしい。
18	獅子踊り等の郷土芸能の継承、保存。郷土芸能等のDVD化。集落にあった屋号、各地にある道祖神の継承。
19	出川の櫓は、休憩所等が整備されたが、その後の維持管理が不十分となっているので、責任ある管理に努めてほしい。
20	戊辰戦争において、大館・扇田神明社付近で戦死した県外鎮撫軍兵士の墓がある。この墓を保存していく必要がある。
21	神社の維持管理が人口減少で危ぶまれていて、その対策に苦慮している。
22	神社、仏閣は数多くの伝説や由来が残されているので、調査してほしい。
23	建築物、樹木を残したい。文化、風俗は廃れたものが多い。
24	羽州街道、安倍良宗から藤原泰衡の平泉伝説、十和田噴火と八郎太郎伝説、浅利氏と佐竹家の武家文化、城下町の成立ち、近代の大館、鉱山の町
25	矢立峠の天然杉の保存。厄除けの人形祭は、作り手不足で維持していくのが困難になっていて、唐松講も減少していて、継続していくのが大変。各地域の祭りの行く末が心配。
26	町名の標識整備、羽州街道の地図入り説明板、吉田松陰が逗留した家への説明付案内板等。
27	錦神社と西木戸神社は、物語性があるので付加価値を付けて環境整備してほしい。
28	明治期の文化人、歌人、教育等の素晴らしい人たちの掘り起しが必要。
29	資料にある樹木や民俗芸能は、将来にわたって残した方がいい。矢石館遺跡は田んぼで、跡地が看板のみで残念。看板を新しくしてほしい。
30	踊りの内容が、伝承されていない所がある。どのように継承していくのか考えていく必要がある。
31	失われたものが多い。軌道や鉱山関係等。伝統芸能を継承するには、人材不足で困っている。
32	明治天皇行在所が解体されたのは残念なので、同敷地の標柱や吉田松陰の遊歴碑等は保存してほしい。旧田村鉄工所事務所は、地域の歴史において価値が高い。早口駅のレンガ油庫は、地元の土を使っている所以重要。羽州街道の早口川の徒渡りは、歴史的継承行事として素晴らしい。

問6	歴史上価値の高い建造物を保存し、未来に継承するためには、所有者だけでは維持できない場合があります。 そのような場合、どのように取り組むべきだと思いますか。ご自由にお書きください。
自由記入欄に寄せられた主な意見(抜粋)	
1	いろいろな提言のなかで、限られた財源の振り分けが問題。
2	維持、修理の費用補助と固定資産税の減額。
3	行政や個人の支援も必要ではあるが、地域や町内の協力が鍵となる。
4	歴史的価値のある建造物の所有者を、市民がどの程度理解しているのか。公費の投入は、難しいのでは。
5	絵画、写真等の展示会を開催して、市民に建物を見てもらう。定期的に大工さんに点検してもらう。各地域での意識高揚に努める。宣伝する必要がある。
6	保存や継承は、所有者だけではできない。行政に頼り過ぎてもいけない。市民が価値観を共有して、知恵と少しの財力を出して保存していくべき。
7	鶴岡市の致道博物館を参考にする。移転などでまとめて、維持管理していく。
8	市に寄贈していただき、管理するのがよい。ふるさと納税の事業項目にして、寄付を募る。市民にも寄付を募る。寄付者の集いを開催する。
9	寄付の場合は、検討すべきだが、税金は使わないでほしい。
10	地域が先頭に立ち、行政がバックアップするシステムが必要。
11	次世代に継承する話し合いがないのが現状。各地区で座談会をして結論をだしてほしい。
12	NPOを設立して、支援する会等の民間の力を活用する。
13	リストアップして、価値をよく説明して保存をお願いする。管理費用の一部は市が負担する。ふるさと納税の事業に加えて寄付を募る。
14	残す価値の判断をするべき。行政の適切な取り組みが必要。
15	地域全体で取り組むべき。地域の賛同を得て、寄付を募る。
16	歴史まちづくりの先進地の事例を参考にする。
17	行政・地域が感心をもつためのアピールの機会が必要。
18	地域と行政が知恵を出し合う組織づくり。子供から高齢者までの生涯学習としての位置づけ。
19	これからの長い期間を考えると民間では無理なので、重要度の高いものから公的な管理に移管する。
20	多くの補助は、無理なので、できるだけボランティア援助を手厚くすることが重要。イベント、清掃、補修等。市民に伝えて関心を持ってもらう。
21	展示会やイベント等を行って、建造物をPRする。保存会等を設立して、そこへ市が助言・助成してはどうか。
22	ふるさと納税のような、ふるさと保存条例を制定して、市の内外から支え合うしくみが必要。
23	地域住民、地元企業、行政が三位一体となり、相互協力体制を作り、運営、管理する。
24	市が援助して、観光地として収入を得ながら維持していく。
25	地域住民の意識を高めるため、地域で努力することが第一で、その上で周りに協力してもらうこと。自主的取り組みが中心。
26	行政が先に立って、若い人たちに教える継承活動を行う。後継者の育成等に努めてほしい。イベント的な行事を行う資金を集める。
27	保存に意欲のある団体等の組織により、継承できればよいが、難しい場合は、市のバックアップ等が必要。
28	市独自の指定のありかたなど、もっと柔軟なルールがあってもいいのでは。
29	維持費はもとより、残していく為の対策や工夫、周辺の環境整備が必要。行政がかかわり、率先して取り組むべきこと。

問7	大館市ならではの『歴史まちづくり』の推進に関して、ご意見やご提案(アイデア)がありましたら、ご自由にお書きください。
自由記入欄に寄せられた主な意見(抜粋)	
1	中学校、高校、大学の教科書、歴史年表に記されている大館の先人は、安藤昌益、狩野亨吉、小林多喜二の3名。この人物を観光、修学の招致に活かして、全国的な大館の売りにしてほしい。
2	町名の由来を記した看板を整備して、市民はもとより観光客にもわかるようにして、アピールする。羽州街道を分かりやすく整備する。坂のある町なので、坂の名称と立札を整備する。
3	風習や慣習というような言い伝えは、高齢者に限られるため、記録しておかなければならない。各地区でのお話会等を開催してほしい。
4	歴史上の人材をもっと注目させる。先人顕彰会等を充実させる。人物の参考資料が寂しい。
5	市にどんな建造物、祭礼行事等があるのかよくわからない。PRをもっと必要。
6	他の地域に比べると歴史的なものがないので、市民の関心が薄い。多くの市民の関心、協力を得るために取り組みをもっと強力にするべき。計画策定後に市民の関心と理解が少しでも深まればよい。
7	史跡をもっと大事に手入れして保存し、案内板、史跡マップ等をもっと整備して、観光案内コースとして、分かりやすく、訪問しやすくする。曲げわっぱや体験工房にもっと市でバックアップしてほしい。
8	歴史認識を高めることが必須。現存する史跡を洗い出して、標識、標柱を設置していく。歴史を身近に感じられるようにする。時間をかけて、各町内の歴史を掘り起こしてみる必要がある。
9	物語があるとさらに想像が膨らむので、宿泊施設等に物語等の案内リーフレットがあるといい。
10	各地区ごとに実行委員会を組織して、代表者による情報交換会、マップ及び案内書作成、案内ガイド養成、自転車の貸し出し、観光客誘致活動。
11	歴史まちづくりに関するキャッチフレーズやキャラクターで、市民の意識を高める。
12	旧市内中心だけの視点でなく、広範囲に取り上げてもらいたい。この後の観光につながる企画・事業を大切にしてほしい。米代川流域一帯の歴史まちづくりが必要。
13	多くの伝承芸能が集落にあると思いますので、市が調査する機会をつくり市民へ紹介してほしい。広報等で、郷土の伝承芸能の紹介をしてほしい。
14	まずは、知ること、知らせることから始めてほしい。歴史的に大切なことに目をつむったり、関心がなくなることが困る。歴史や文化を知っている人、地域の長老から話を聞くべき。
15	関連する町内会、歴史研究会、観光関係、農林業関係、工芸品関係等の方々と市民、行政の座談会を開いてみては。団体に関しても偏らないようにいろいろな方面の方々に参加を依頼してほしい。
16	市民に興味を持ってもらうようにアンケート等から出発するのが良い。各地区からの感心をもってもらい勉強会があっても良い。現存する風俗・習慣が途絶えないように行政で援助してほしい。
17	先祖の生活や交流等を知るうえで大切なことであるが、観光面での資金収入を考えないと維持・継続に無理がくるのでは。
18	矢立峠の散策会は、年々参加者も増えて、歴史の道と天然杉、旧国道と旧国鉄の遺構など好評だが、景観上問題になっている矢立温泉上の産業廃棄物らしきものの撤去、整備が必要。
19	建造物だけでなく、それを取りまく環境(街路樹、街灯、車歩道間の緑化等)の整備もしてほしい。桂城公園の整備を見直してほしい。歴史的風致を中心として景観が美しくなければならない。
20	もっと早くこのような取り組みがあれば、よかった。負の歴史にロマンがある。奥州藤原氏終焉の地、浅利氏、戊辰戦争激戦地など。大館叢書(そうしょ)が参考になる。大館八景等。
21	狩野亨吉は、建物もあって価値がある。大館の人としてのアピールが必要。
22	田代地域の縄文遺跡、農作業史跡など身近な歴史が沢山ある。地域住民の理解・協力を得て後世に引き継ぐことが現世代の責務である。
23	きりたんぼ等の食文化・秋田杉による曲げわっぱの匠・アメッコ市等の歴史的行事・鳥潟会館や秋田犬等の歴史的物語の素材・鉄砲場や三ノ丸、商人留等の地名に由来する物語を加味して、由緒ある神社・仏閣・建造物、更には、片貝遺跡までロマンを遡らせれば。
24	文化財を結び付けて、地域住民が足を運べる形態が理想的。文化財に触れるコースを選定して、教育に取り入れることが大切。学校の時に学ぶ機会を増やす。
25	地域の誇りの再発見につながる取り組みをしてほしい。古い写真を広い地域で探すと、資料として貴重なものが見つかるかも。地域のための文化財保護を検討してほしい。

資料 6

業務内容		年度・月		平成27年度												平成28年度												平成29年度					
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月				
計画書策定	計画全体																																
	序章 計画の策定の目的及び経緯																																
	第1章 歴史的風致形成の背景																																
	第2章 維持向上すべき歴史的風致																																
	第3章 歴史的風致の維持及び向上に関する方針																																
	第4章 重点区域の位置及び区域																																
	第5章 文化財の保存及び活用に関する事項																																
	第6章 歴史的風致維持向上施設の整備又は管理に関する事項																																
	第7章 歴史的風致形成建造物に関する事項																																
		※庁内会議 議題 (1)大館市の歴史的風致の検討 (c) ①大館市の歴史的風致の概要 ②想定重点区域及び事業の検討 ③他事業との連携、調整 (2)基本方針の検討 (d) ①大館の歴史的風致の維持向上に関する方針の検討 ・大館の歴史的風致の維持向上に関する課題 ・大館市の歴史的風致の維持向上に関する基本方針 ②文化財の保存及び活用に関する事項(市全体/重点区域) ③良好な景観の形成に関する施策との連携 (3)施策や事業の確定 (e) ①大館の歴史的風致維持向上のために必要な事項 ・歴史的風致維持向上施設の整備又は管理 ・計画期間 ②歴史的風致形成建造物の指定方針と管理指針 ③重点区域の設定 ④概算事業費と資金計画の確認																															
国	三省庁協議		1		2		3		4		5		6	7		8		9	10	11	12		13	14	15								
		序～第2章 → 序～第4章 → 序～第5章 → 序～第6章 → 序～第7章 → 素案 → 原案 → 最終案 →																															
庁内	経営会議(市長・教育長)						1		2				3		4		5		6				13	14	15								
	検討会議(部・課長級))※旧準備会	1	2	3				4				5		6				7				8		9									
	策定部会	準備会発足(a)推進体制(b)想定事業・スケジュール																															
庁外	大館市歴史的風致維持向上協議会								1						2								3										
		骨子・第1～2章 第3～7章 最終案																															
審議会	大館市文化財保護審議会																																
	大館市都市計画審議会																																
	有識者ヒアリング																																
市民	市民参加																																
	シンポジウム																																
市議会	定例会・報告																																